

三、戰捷

一八〇五年——一八〇七年

「余の権力は余の光榮に左右せられ、光榮は戰勝に左右せられる。」とナポレオンは云ひ云ひした。「戰勝は余を現在あるが如きものとなした。たゞ戰勝のみが余の権力を支え得るのである。新しく誕生した政府は國民の眼を眩ませ驚嘆させなければならぬ。これを解るならば直ちに倒壊するであらう。」

彼はあらゆる戰勝の中、最も偉大にして且つ最後のものは、世界制覇を目標とする英吉利との一騎打ちであることを知つてゐた。——記憶してゐた。トゥロンからワートルオに至るまで、彼の戰つた一切の戰爭は、要するにたゞ英吉利を相手の不斷の戰爭に過ぎなかつたのである。彼は到るところに英吉利を追求した。初めは伊太利、埃及、シリヤの背後に、後に至つて奧太利、獨逸、西班牙の背後に模索した。陸の背後に海を覓めたのである。陸を通して海に潜り抜けようとしたのである。この島人は生涯「島」と格闘したのであつた。「もし余が制海權を握つてゐたならば！」と彼はセント・ヘレナで云つてゐる。海を制する權力こそ世界を制する權力であることを彼は知つてゐた。——記憶してゐたのである。

「余は英吉利を亡ぼして見せる。さすれば佛蘭西は世界の覇者となるであらう。」と彼はマドリードの後に云つてゐる。「我國の全能力を海軍に集中して、英吉利を撃滅しようではないか。その時こそ全歐羅巴は我等の足下に跪くであらう。」

當初永遠のものと思はれてゐたアミアンの媾和條約は、僅か十四ヶ月の壽命であつた。英吉利に上陸作戰を行つて敵の心臓部を突かうといふ想念は、第一統領官時代にも、皇帝となつてから後にも彼の胸中を去らなかつた。一八〇五年七月十九日、彼はラマンシュの海岸にあるブウローニユの陣營へ赴いた。この陣營では既に二年前から上陸作戰の準備が行はれてゐた。陸上工事、水上工事が續けられ、灣の浚渫作業、船渠や工廠の建造、堰堤、防波堤、壘壕、要塞工事などが行はれた。同時に「偉大なる陸軍」の編成が進められてゐたが、これはこのブウローニユの陣營で初めて與へられた名稱である。その六箇軍團は灣をめぐる圓形劇場のやうな丘陵に配置され、その中央に皇帝の大本營がおかれた。

片々たる解のやうな砲艦を初めとして一萬二千の乗組員を有する戰艦に至るまで、形狀組織を異にする二千三百六十五隻の船から成る「國民艦隊」は、兵員十六萬人、馬匹一萬頭、砲六百五十門の大部隊を輸送することになつてゐた。

複雑な上陸作戰は八時間内に實施され得る筈であつた。たゞ三十二軒の海峡を渡りさへすればよかつたのだ。「好條件に恵まれた夜間の八時間は、世界の運命を決定するであらう。」と第一統領官

時代の彼はガントン將軍に宛てた手翰に書いてゐるし、またその後皇帝となつてからラトウーシユ・トレギーユ將軍に書き送つてゐる。「もし我等が僅か六時間だけ海峡を制するならば、我等は世界を制するのである。」

アミアンには、「英吉利への道」と大書した凱旋門が建てられた。ブウローニユなる皇帝の大本營では、土中から古代羅馬の鎧が発見された。それは最初の英吉利征服者であるジュリウス・シーザアの陣營にあつたものと想定された。さながら世界歴史の二千年がブウローニユの陣營をもつて成功の冠とすゝかのやうであつた。

八月十五日、ナポレオンの誕生日に、莊重な式典が行はれた。ほかでもない新しく設けられた名譽軍團の十字勳章授與式である。皇帝は丘陵の頂きに設へた玉座、千年の星霜を経たグゴペール王の鐵の玉座に就いて、新しいクセルクセスか何かのやうに、陣營全部は云ふまでもなく、艦隊の諸船舶に蔽はれた海面を見渡すのであつた。その様子は、たゞ手を一掉りしただけで英吉利を撃滅し、世界に覇を唱へることが出来さうに思はれた。

けれども巴里ではこの上陸作戦を信じなかつた。「それは世界一般の笑ひを呼起すのみであつた。」とブウリエンヌは追憶してゐる。「事實、これ以上國の財政を荒廢せしめる、無益にして滑稽な企ては想像することさへ出来ない程である。」^(四) さまざまな諷刺畫が現れた。例へば、ブウローニユの艦隊は洗面器に泛んでゐる胡桃の殻で、岸に腰掛けてゐる英吉利の水兵がパイプを吹かしてゐる

と、その煙のためにまるで嵐にでも吹きまわられたやうに、佛蘭西の艦隊が逆走する、といつたやうな類である。英吉利でも同じやうに笑つてゐたが、同時に職々競々としてゐた。

「果してナポレオンが眞剣に英吉利遠征を企圖したかと云ふ問題については、置々たる論争が行はれたものであるが、」とマルモン將軍は云つてゐる。「私は確信をもつて斷乎として答へる、然り、眞剣であつた、と。この遠征こそ彼の全生涯を通じて最も熱烈な空想であり、何よりも尊い希望であつた。——上陸の可能は疑ふべくもない。ナポレオンは砲火をもつてドーヴァ要塞を一掃し、瞬くひまにこれを降伏せしめんと意圖してゐた。——『埃太利があればどの大兵力をもつて我國に挑戦した瞬間、英吉利の遠征が始まらなかつたのは勿怪の幸ひでした。』と私はある時、既に埃太利戦争が開始された當初、ナポレオンに向つて云つたことがある。『もし我々が英吉利に上陸してロンドンへ入つて行つたら（それは間違ひなく實現し得たことなのだが）、その時は我國の國境を守るのにストラスブルグの女達ばかりでも結構間に合ふくらゐだ。』とナポレオンは私に答へた。この一事以上に彼が熱烈に翹望したことは斷じて他にないのである。」^(五)

「余は英吉利に共和政治を宣言し、貴族階級を滅ぼし、上院を廢し、余に抗する一切の者を徵用し、自由と、平等と、民衆の主權を宣したであらう。ロンドンの如き大都會には多數の賤民と不平分子が存在するが故に、怖るべき一大徒黨が余の味方として起ち上るであらう。そのほか余は愛蘭土にも叛亂を惹起した筈である。」^(六) 英吉利國民の大部分は余を招き呼んだに相違ない。上陸後は、た

* ベルシヤ王、在位紀元前四八五—四六五年。

だ一回の正しき決戦を行つて謬りなき戦果を獲得すればよいので、さすれば余はロンドンに足を踏み入れるであらう。……寡頭政治の幌のもとに呻吟してゐた英吉利國民は、直ちに來つて我等に合するであらう。我等はその時、彼等の解放のために参じた同盟者となるのである。我等は自由、平等と云ふ魔法めいた言葉をもちて彼等のもとへ赴いたであらう。」^(七)

上陸作戦の成否は一にヴィルネーヴ將軍の海上牽制に懸つてゐた。彼は英吉利艦隊の注意をラマンシユから外らさせる目的をもつて、佛蘭西艦隊を率ゐてアンティル諸島へ差向けられたのであつた。この牽制の第一段はヴィルネーヴとしても成功であつた。彼はマルティニカに到着し、英吉利艦隊はそれを追跡した。しかし歸途フェロール附近でネルソン將軍に遭遇したので、ヴィルネーヴは針路を南方に轉じて、カディクスへ去つた。然るに彼の受けてゐた命令は、更に進んでロシユフ、オール及びブレストへ直行し、こゝで佛蘭西ならびに西班牙の艦隊に合して兵力を強化した後、突如ラマンシユに現れて、數日間ドーヴァ海峡から英吉利艦隊を一掃せよと云ふのであつて、「さすれば上陸の成功は殆ど疑を容れないのであつた。」^(八)

「急行せられよ。ラマンシユに急行せられよ。一刻も空しく過すべからず！ 英吉利は我等の掌中にあり。——たゞ僅か十二時間海峡を確保せられよ。」とナポレオンは八月二十二日ヴィルネーヴに書いてやつた。が、二十三日にはヴィルネーヴが南方に去つたと云ふ報知が届いた。これ以上陸作戦の運命は決せられたのである。^(九)

曾て、海軍の要人たるが如く、其大な空軍の運用は如何なるやうに前してしまつた。國民艦隊はして鼠一匹、數百萬の國帑は水中に投ぜられ、風のまにまに吹き散らされたのである。國民艦隊は「洗面器に泛んだ胡桃の殻」に過ぎず、ブウローニユの陣全體も惨めな月足らずの死産となつた。しかし又もやあの時と同様に、一つの空中樓閣が消えると、更にもう一つの遠大な計畫が生れた。——それは全歐羅巴を英吉利と戦はしめることであつた。全大陸を海に向つて動かせることであつた。即日、すなはち八月二十三日、ナポレオンは各隊に布令を廻して、「英吉利の黄金に誘惑された奥太利が、佛蘭西に抗して起つた」ことを報らせた。彼はブウローニユの陣地の撤退を命じ、對奥太利の計畫を口授した。「偉大なる陸軍」の一切の行動——各部隊の行進の數も、配置も、任務も、すべてが數學的な正確さをもつて推定され計量されてゐた。知識は豫言と合し、數學は洞見と提携してゐるのであつた。ブウローニユの陣は撤退されて、十八萬の大軍はさながら魔術でであるかのやうに、ラマンシユの岸からダニユの岸へと轉じられた。全軍は驚くべき迅速さで、理想的な秩序を保ちながら移動したので、もし誰かこれを高みから眺めることが出来たとしたら、これこそ神自身を指揮者とするディオニソスの整然たる圓舞であると思つたに相違ない。

かくして高みより、名を知らぬ神の如く
彼らの上を天翔りつゝ、すべてを動かす

その奇しくも美しき眼眸^{まなこ}もて
ものみなを守るかと疑はる^(二〇)。

ナポレオン帝國は八つの柱——八つの戦勝の上に築かれた。そのうち四つは南方に屬する。即ちロデイ、アルコラ、リヴォリ、マレンゴであつて、これによつてジブラルタルからアドリア海に到る地中海の水域が征服されたのである。残りの四つは北方のもの、即ち、ウルム、アウステルリツ、イエーナ、フリードランドであつて、これによつてラインからネマンに到る中央歐羅巴が征服されたのである。

南方の戦勝は困難なものであつたが、北方のそれは容易であつた。前者に於てはナポレオンは昇る朝暈であり、後者に於ては中空に不動の相を示す太陽である。前者が朝暈の光線に似て虹の如き色さまざまの輝きを見せてゐるならば、後者は眞晝の光のごとくたゞ一様に白々としてゐる。前者が彼の権力を深化したとすれば、後者はこれを擴大した。前者が國民的であるのに對して、後者は全世界的である。前者が個性的であるのに比して、後者は没個性的、といふよりも寧ろ彼の個性を匿すものである。それは恰も眞晝の太陽の面が目眩しく見分けられぬのと一般である。前者は英雄的であるが、後者は、——しかしこの感じを云ひ現すべき言葉がない。古代希臘人ならばこれを「デモニック」と名づけたであらう。しかし我々の中で、それが何を意味するかを理解し得るものは、

恐らくゲーテ一人だけであらう。正しく彼は「デモニック」の性質を「ダモン」として論じた。——勿論、我々の使ふ基督教の意味ではなく、古い異教の意味に於てである。daimonとは地上の神、義である。「デモニック」なものの法則を知らないものに取つては、それは「美しきもの」「超自然的なもの」のやうに思はれるであらうが、しかしその實は我々に「必至なもの」「自然なもの」と感ぜられる事物と同様に、極めて單純なものかも知れない。

人間と事件に對するこの眞に奇蹟的とも見える權力をナポレオンに與へたのは、果して何であるか？ 「一種の磁力的洞見」une sorte de prévision magnétique と彼の學校時代の同志であり秘書であつたブウリエヌは、このことについてこんな風に云つてゐる。^(二一)「余は已れを待設けてゐることに對して内部的感覺を有してゐた。」「余の身の上には、自ら豫見しなかつた事は皆て生じたことがない。」とナポレオン自身も云つてゐる。^(二二)

これは彼にとつて常住のことであつたが、ウルムからフリードランドに至るこの二年間、即ち一八〇五年から一八〇七年にかけて、それが何時にも増して顯著であつた。

人間は弱少である。何故なら彼等は盲目であつて、未來に何が控へてゐるかを知らないからである。ナポレオンは未來を過去と同様に知つてゐた。——記憶してゐた。知は即ち能である。すべては可能である。何故ならばすべてを知つてゐるからである。彼は硝子を隔てて見るやうに壁を隔てて見た。幽霊の如く壁を潜つて通り抜けた。彼にとつては、勝利の果實を撈ぎ取るのに、手を差伸

べる必要もないかのやうに、いとも易々と戦ひ勝つた。勝利はさながら熟した果實のやうに、みづから彼の足下へ落ちて來るのであつた。これはもはや戦争ではなく、凱旋の行進であつた。もしかやうにして續いて行つたら、彼は歩を進めて全世界を征服したに相違ない。しかしその二年間に於いても、これは僅か一轉瞬の間であつた。——ウルムからアウステルリッツまでは四十日に過ぎなかつた。それから先は光が薄れ、衰へて行つた。最後の戦捷フリードランドは、輕々と獲得された輝かしい勝利であつた。彼自身もどうやらそれを感じたらしい。彼はティルジットの媾和條約で戦ひを終結させたが、この平和が最後のものであることを囑望したのであらう。英吉利は歐羅巴の封鎖によつて、海に覆へされた陸地によつて征服されるに相違ない、と心ひそかに恃んでゐたのであらう。

電光にも譬ふべき南方の勝利は描寫に困難であるが、小搖ぎもせぬ目眩むばかりの眞晝の白光にも似た北方の戦捷は、それよりも更に困難である。またこの場合描寫することなど何もありはしない。依然として同じことを涯しなく繰返すより仕方がないのである。——知つてゐたが故に能くなし得た、豫見したが故に征服した、と。

ナポレオンのウルム作戦は、ラインからダニューヴへかけて巨大な網を張り、その中に奥太利の元帥マツクを捉へようと云ふのであつた。マツクは自らその民に向つて行つたのである。「この戦役の作戦計畫はマツクに非ずして、余によつて爲られたかやうである。」とナポレオンは一八

〇五年十二月一日、即ちアウステルリッツ戦の前夜、皇帝が馬上で各部隊を巡回した時、兵士等はこの日が戴冠式の一週年に相當することを想出して、銃剣に藁束と松の小枝を結びつけ、これに火を點じて、總數六萬の把火をもつて彼を歓迎した。かくしてミトラの神、常勝の太陽、皇帝自身に、火の夜祈禱を營んだのである。それはさながらナポレオンが彼等一同にその「磁氣的洞見」を感染させたかのやうであつた。明日の「アウステルリッツの太陽」は彼等にとつて早くも夜

或はマツクも、一見して感じられる程の愚者でも臆病者でもなかつたかも知れない。たゞ彼は鳥が蛇の凝視に會つたやうに、「デモン」の魅するが如き視線のもとに發狂したのである。彼はウルムを脱出することも出来れば、或はその中に閉ぢ籠つて、強行軍で援助に向つて來る同盟露西亞軍の到着を待つことも出来た筈である。しかし彼は脱出もしなければ、閉ぢ籠りもしなかつた。十月二十日、殆ど戦はずして降伏したのである。

三週間にも充たぬ短時日に、八萬の奥太利軍を或は追散らし或は殲滅しつゝ、ナポレオンは維納に軍を進め、同じく殆ど戦はずしてこれを占領し、モラギヤさして退却する奥露軍を追跡しながらダニューヴを渡つた。

一八〇五年十二月一日、即ちアウステルリッツ戦の前夜、皇帝が馬上で各部隊を巡回した時、兵士等はこの日が戴冠式の一週年に相當することを想出して、銃剣に藁束と松の小枝を結びつけ、これに火を點じて、總數六萬の把火をもつて彼を歓迎した。かくしてミトラの神、常勝の太陽、皇帝自身に、火の夜祈禱を營んだのである。それはさながらナポレオンが彼等一同にその「磁氣的洞見」を感染させたかのやうであつた。明日の「アウステルリッツの太陽」は彼等にとつて早くも夜

間に差し昇つたのである。

十二月三日、戦闘は未明から開始された。塙軍はマツクを同様従順にナポレオンの作戦を實行して、陥井——テルニッツの低湿地へ進んで行つた。ミニラーの率ゐる騎兵の突撃は彼等をアウステルリッツへ壓迫した。スルト及びベルナドット兩元帥の指揮する軍團は、ホルバツハの四地で霧の中に隠れてゐたが、突如現れてブラーツェンの高地を攻撃した。この瞬間、報告に書かれてゐる通り、「アウステルリッツの太陽は輝かしく差し昇つた」『le soleil d' Aus erit, se le a radier』のである。

ナポレオンの戴冠は法王が帝王の冠をもつて行つたのではなく、皇帝自身がこの太陽をもつて己れの冠としたのである。

一八〇六年十月十四日はイエーナである。佛蘭西軍にランドグラーフエンベルグ高地の迂迴路を教へたサクソニアの牧師は、卒然感じられる程の裏切者ユグではなかつたかも知れない。彼は、不運なマツクと同様に、「デモン」の魅するが如き視線のもとに發狂したのである。彼に抗することは出来ない。どうせ勝つに決つてゐる、と云ふことを理解したのである。又しても朝明けの濃霧がナポレオンを助けた。イエーナの太陽——「アウステルリッツの太陽」——は再び燦然として、不意を打たれたプロシヤ・サクソニア聯合軍を目ざしてランドグラーフエンベルグの高地から奇襲する佛蘭西軍を照らしたのである。

アウステルリッツはナポレオンに塙太利を興へたが、イエーナは彼にプロシヤを興へた。一八〇六年十月二十七日、彼は伯林へ勝利者として乗込んで、フリードリッヒ大王の剣を巴里へ送つた。

この常勝將軍の運命に對する最初の脅威は、一八〇七年二月八日のアイラウ會戦である。こゝで露西亞軍は彼を向うへ廻して、曾てその比を見ぬほどに闘つた。「火藥が發明されて以來、かほどの死闘は一度もなかつた。」と一目撃者は云つてゐる。^(一四)オジエロー軍團は敵の砲火のため殆ど殲滅された。戦闘中に吹雪が起つて、十五歩の先は黑白も分かれ程霏々と降りしきり、佛蘭西兵の顔を眞正面に叩きつけるのであつた。將兵は敵の所在を知らず、屢々味方にむかつて發砲した。一八一二年の恐怖——宿命の恐怖が、このアイラウの氷と、鐵と、血の一夜に、ナポレオンの眼をさし覗いたのである。

露西亞軍は竟に退却したが、しかし敵の手に残したのはたゞ三萬の死傷者に蔽はれた戰場のみであつた。

「なんと云ふ、恐ろしい光景であらう！」とナポレオンはこの戰場を巡回しながら繰返した。「これこそ當然各國の皇帝に平和に對する愛と、戦争に對する嫌惡とを感じさせるべきものである！」また彼はヤッフに向つて追想を洩らした。「余があれば戦争を忌はしく思つたことは後にも先にもなかつた！」

けれどもアイラウは太陽の面を横ぎつた黒雲に過ぎなかつた。一たび通り過ぎると、太陽は再び

燦々と輝き始めた。

一八〇七年六月十四日——マレンゴの一週年——はフリードランドである。すべては依然として舊の如しである。勝利の「磁力的洞見」はもはや勝利それ自身である。目眩めくばかりの眞霊の白光。「正午に近い頃、戦闘の作戦を口授してゐたナポレオンの顔は、恰も既に勝利を獲得したもののやうに、さも嬉ばしげに輝いてゐた。」^(二五)彼は敵を目前に控へながら、ひゆう／＼と飛び交はす彈丸の下で悠然と晝餐をした。人々が注意を促すと、彼は莞爾と打ち笑みながら云ふのであつた。「幾ら露西亞人が我々の晝餐の邪魔をしたつて構はない。こちらはそれ以上に彼等の晩餐の邪魔をしてやるのだ！」軍隊の檢閲をしながら、彼は兵士の歡呼の聲に答へて、「芽出度い日だ、芽出度い日だ、マレンゴの一週年だ！」と絶えず繰返した。その顔は太陽の如く輝いてゐた。^(二六)

戦闘の當初には、佛軍は敵の七萬五千に對して僅か二萬六千の歩兵しか有してゐなかつた。將軍達は大ナポレオンに、戦闘を翌日まで延期するやうに提言した。「いや、いや、敵がこれほどの誤算をするのを二度と再び當てにする譯には行かない！」と彼は答へた。露西亞軍の總指揮官ベニグゼンが背後を迂廻され、包圍され、粉碎される可能性のあるのを、早くも見て取つたからである。「晩餐」までには、果してナポレオンの豫言した通り、露西亞軍は退却し、ベニグゼンはネマン河の彼岸に去つた。

ネマン河は東方と西方との神秘的な境界線である。ナポレオンはこの岸に逗留つて、彼つたものかどうかと考へるやうに、肉思はしげに馬を停めた。が、結局渡らなかつた。——恐らくまだその時機が至つてゐないのを想起したのであらう。

七月二十五日の正午、一日の半ばであり、夏の最中である。

もの憂げに霞める眞午は息づき

もの憂げに川は激みつ流れ

滑くまた焙のごとき穹窿に

もの憂げに雲は溶けゆく。

むし熱き眠りは小霧のごとく

あめ地をなべて抱きつゝめり。^(二七)

ネマンの砂洲の上には水蒸氣が立ち騰り、生暖い水と魚の匂ひが鼻を打ち、松林からは暖い草薺と樹脂を含んだ飽屑の香が漂つて来る。息ぐるしい。苦熱の中に雷雨が孕まれてゐる。

小都市テイルジットに面したネマン河の中流に、一艘の筏が錨を下して停止してゐる。筏の中には木造の小家が建てられて、その正面には緑葉で編まれた二つの文字が花環に圍まれて浮き出てゐる。——N/A、即ち「ナポレオン」と「アレクサンドル」である。ナポレオンを乗せた小舟は左

の岸から纜を解き、アレクサンドル一世の舟は右岸を離れた。やがて二艘の舟は中流に相會し、兩皇帝は筏へ上つた。そして兩軍の面前で、露西亞の「ウラア！」と佛蘭西の「皇帝萬歲！」の絶間なく響き渡る中で、兄弟のごとく相抱擁した。東方と西方、歐羅巴と亞細亞とが相抱擁したのである。一日の半ば、夏の最中、——ナポレオンの太陽の正午。中天に懸つた太陽は大空の兩半球、東と西とを結び合せたのである。

「陛下、わたくしは陛下と同じやうに英吉利と憎むものであります。」とアレクサンドルは云つた。「もしさうでしたら、平和は成立したのです。」とナポレオンは答へた。

「余は曾て何人に對しても彼に對するが如き先入見を抱いたことはない。しかも四十分間の會見の後、余の先入見は悉く夢のごとく霧散してしまつた。」^(二八)「余は何人をも彼を愛するが如く愛したことは曾てなかつた。」とアレクサンドルは回想してゐる。^(二九)

二人は互に相手を誘惑しようとした。ナポレオンはアレクサンドルを、「魅惑の人」と呼んだが、しかし相手の腹の底を見透かしてゐた、少くとも見透かしてゐるものと申つた。「正真正銘のギザンチン型」^(三〇)。靈細で、巧妙で、嘘つきだ。あの人は中々大したものにはたると云ふよ。^(三一)「あつ男の虚榮心を煽て上げ給へ。」とアレクサンドルは自分の親友であるプロシヤ人達に忠告した。

一八〇七年七月八日、ティルジットの媾和は調印された。「ティルジットの出来事は世界の運命を決するであらう。」^(三二)ナポレオンは云つた。^(三三)ベテルブルグからナポリに至る全歐羅巴は英吉利に

敵兵の陣地を掃つた。誰が海へ覆へされたのである。其の間に中流に船を置かれたのである。

太陽は中天に懸つてゐる。最高の頂點に達して、やがて没落が始まるのである。

「側近にあつて觀察してゐる人間の目には、ナポレオンの没落は既に一〇八五年の頃から映じてゐた。」とスタンダールは述べてゐる。しかしそれは眞しからぬやうに思はれる。一八〇五年——一八〇七年、アウステルリッツ——ティルジットは、ナポレオンの太陽の正午である。とは云へ如く何とも仕方がない、太陽は正午から西へ傾き始めるのだ。

「不幸なるものよ、余は汝を憫む。汝は同胞の羨望の的となると同時に、彼等のうち最も憫憫に傾するものとなるだらう。」このことを彼は知つてゐた、——記憶してゐた。が、今や權力の絶頂に立つた時、それが何時よりも明瞭に見えるのであつた。一切を獲得し、一切に到達したが、突然倦意を感じて、何一つ欲しくなくなつたのである。政權、偉大、光榮、力、——世の人にとつて何よりも望ましく思はれる一切のものが、突如不思議に空虚な、要のないものとなつた。何かしら別なものが望ましくなつて來た。それが何であるかは、彼自身も知らない。そして最後まで遂に識らずして終るのである。もしも人が彼に向つて、お前は既にティルジット以後、己れの日の正午にありながら、夜を欲したのだ、犠牲となることを欲したのだ、——サムソンがテムナテの獅子を裂いたやうに、己れ自身を八つ裂きにせんと欲したのだ、と云つて聞かせたとしても、彼はその言葉を理解しなかつたであらう。セント・ヘレナへ行つてからでも本當にはしなかつたであらう。

「天才は、我が世を照らすために燃え盡すべき運命をもつた流星である。」燃え盡すこと、死ぬることは、即ち犠牲となることである。「食ふものより食物出で、強きものより甘きもの出でたり。」これこそ黄金の蜜蜂が皇帝の緋袍の上で唸りながら語つてゐた言葉である。

ナポレオンの眞の犠牲的な魂は、目に見えぬ正午の星である。

魂は星とならんと欲りす

されどそれは夜半の空より

さながら生ける瞳のごとく

睡れる下界を見おろせる星にはあらで

熱き陽影に隠されつゝも

目に見えぬ清き虚空に

夜よりもいや輝やかに

神のごと燃ゆる星にこそあれ^(三四)

ナポレオンの太陽は中空の最頂點に達したとき西に傾きはじめ、正午に早くも黄昏が訪れたのである。

註

- (一) ラクロール・ゲイエー、二一八頁。(二) ヴンダル、『ボナパルトの即位』、第二卷五一〇頁。(三) ラクロール・ゲイエー、二二四頁。(四) プウリエンス、第三卷一八三頁。(五) マルモン、第二卷二二二、二二六頁。(六) オメアラ、第一卷三二八頁。(七) 回想録、第一卷五三一頁。(八) バスキエ、第二卷二一七頁。——マルモン、第二卷二一五頁。(九) ラクロール・ゲイエー、二二七頁。(一〇) チュツチェフ。(一一) プウリエンス、第四卷三八九頁。(一二) 回想録、第四卷一六〇頁。——ミオ・ド・メリト、第一卷二八九頁。(一三) ラクロール・ゲイエー、二四二頁。(一四) マルボー、第二卷二〇頁。(一五) セギニール、第三卷一八三頁。(一六) マルボー、第二卷三九頁。(一七) チュツチェフ。(一八) ヴンダル、『ナポレオンとアレクサンドル一世』(一九一四年版)、第一卷五八、六七頁。(一九) アブランテー、第二卷二五頁。(二〇) ヴンダル、第一卷六七頁。(二一) 回想録、第一卷二九頁。(二二) ヴンダル、第一卷四三頁。(二三) スタンダール、二八九頁。(二四) チュツチェフ。

第四篇 黃

昏

一、英吉利との一騎打

一八〇八年

「英吉利は各員が己れの義務を履行せんことを庶幾す。」この單純にして偉大な、偉大な國民に相應はしき戰鬪信號は、一八〇五年十月二十一日、カディクスに近い西班牙領海で、トラファルガル海戰の直前、提督ネルソンによつて旗艦キクトリーの橋上に掲げられた。——それはナポレオンの世界的勝利の手始めであるウルム降伏の翌日であつた。ネルソンは「己れの義務を履行し」、戰鬪に登れた。しかも死んで行きながら、幸福にも勝利を見ることが出来た。佛蘭西・西班牙聯合艦隊は英吉利に撃滅せられ、この戰捷によつて同國の世界制覇は、英吉利の敵の中でも最も恐るべき敵であるナポレオンの面前で、遂に全く確立されたのである。

「數隻の佛蘭西軍艦は、不用意なる戰鬪に應じたる後、暴風のため沈没せり。」とナポレオンは不運な勝負に強ひて愉快げな顔つきをしながら、トラファルガルの戦ひに就いてかう云つたが、しかし何人をも欺くことは出来なかつた。艦隊は全滅せられて、マレンゴ、ウルム、アウステルリッツ、イエーナ、フリードランド——陸上のすべての勝利は徒勞に終つた。かつて埃及に於けるアプキールと同じく、今や彼は歐羅巴に於てトラファルガルをためし、見事にかけた二十員團然になつた。たとへ彼が全歐洲を席巻し、亞細亞を征服して印度にまで進んだとしても、それが何のた

めにならうぞ？ 海なき陸は彼にとつて生きながら埋められた墓である、生計することのできな

い牢獄である。——「小さき島セント・ヘレナ」である。

一八〇六年十一月二十二日の伯林法令によつて聲明された大陸封鎖は、トラファルガルに對する答辯であつた。歐羅巴のありとあらゆる港灣は英吉利商船のために閉鎖された。英吉利の船はすべて拿捕され、一切の貨物は戰利品として沒收され、大ブリテン臣民すらも俘虜として逮捕された。英吉利との交通は郵便まで中止された。「血の過剰のために腦溢血を起させる」やうに、海外市場に捌け口を見出すことの出来ぬ製品の過剰によつて英吉利を窒息せしめること、——これが封鎖の目的であつた。「歐洲各國のあの敵どもが法律の保護外に置かれるやうに宣告してやるといふ。」とモニターは云つた。「これは生きるか死ぬるかの闘ひだ。」

封鎖の成功は可能であるか？ これは當時人々が考へたやうに、否、今日までも多くの人が考へてゐるやうに、しかく容易に解決できる問題ではない。

人は云ふ、もし封鎖が成功したならば、そのために窒息するのは、アルハンゲリスクから君府まで幾々と續く萬里の長城に隔てられてゐる歐羅巴であつて、決して英吉利ではない。この突拍子もない計畫を實現するために、ナポレオンはすべての歐羅巴諸國を征服するか、もしくは併合すると云ふ必至の義務を自ら背負つたわけで、山賊野盜のごとく各國を侵略するの止むを得ざるに至つ

た。かやうにしてポルトガル、西班牙、和蘭、教會領が侵略された。最後に彼は巴れが滅亡の主因たる露西亞との國交斷絶の罷むなきに立ち到つた。しかもそれらはすべて徒勞に終つた。何故ならば、英吉利商品は歐羅巴以外の殖民地にも捌け口を見出し得たからである。^(三)

「英吉利艦隊が佛蘭西の港灣を残らず封鎖してゐるのに、英吉利に封鎖を宣告するのは馬鹿げた話である。」と或る同時代人は云つてゐる。「この無分別な法令で、ナポレオンは誰よりも先づ自身を傷つけてゐるのだ。よしや二十人の王を退位させたにしろ、彼はあれ程の憎惡を呼び醒ましたなかつたらう。……封鎖は成功したかも知れないが、それは歐羅巴各國が忠實にそれを遵守したならば、といふ不可能な場合に限るのである。しかし假令一つでも開放された港があつたら、すべては無に歸してしまふのだ。」^(四)この蟻の這ひ出る隙もない全大陸の封鎖に生じた間隙は、佛蘭西政府自身がつくり出したのであつた。佛蘭西政府は *Licences* と稱して、自分に必要な品々のために通過證を與へたのである。^(五)

「それは狂氣の沙汰であつた。何故ならば高人に害をなしたからである。」^(六)英吉利を殺すためには、歐羅巴は自分自身を殺さなければならなかつた。全歐洲は封鎖のために、空氣を抜いた硝子鐘を被せられたやうになつたのである。

かうしたすべての反駁は單に封鎖の困難と危險を指摘してゐるに過ぎない。しかし危險や困難は不可能といふことではない、況してナポレオンに於てをやである。「不可能といふことは願望者の

案山子であり、卑怯者の逃避場である。」^(七)

爰に記憶しなければならぬのは、英吉利との一騎打に關する彼の戰略が、ほんの小部分しか實行されてゐないことである。その他の、しかも主なる部分——英吉利に對する作戰基地としての地中海水域の制壓は、竟に實行されずして終つた。しかもそれは彼の罪ではないのである。もしこの計畫が全面的に實施されてゐたら、ナポレオンの鷲はその兩翼をもつて全歐羅巴を蔽うてゐたに相違ない。その左の翼はジブラルタルに、右の翼はボスフォロスに達してゐた筈なのである。「全歐洲國民は、一つの偉大なる軍隊の各箇軍團の如く、英吉利に對する最後の攻撃のために行動を開始したであらう。」^(八)歐羅巴の後からは亞細亞も續いて、陸の全部が海に覆へされたに相違ない。

またティルジットの蜜月時代に、彼はこの計畫の一部をアレクサンドルに傳へたらしい。當時相愛の男女のやうなこの二人が何を囁き合つたかについては、一八〇八年二月二日附のナポレオンの書翰が、ある程度の觀念を與へてくれる。

「露西亞、佛蘭西、場合によりては奧太利の一部を合したる五萬の軍隊が、^(九)君府を経て亞細亞に向ひなば、いまだニューフラテスに達せしめて英吉利を震駭せしめ、大陸の前に跪かしむべし。余はグルマチヤにあり、陛下はダニューヴに怒を停められなば、一箇月の後には我等の聯合軍はボスフォロスに達するを得べし。この打撃は印度にも影響して、英吉利は遂に征服せられん。……余等兩人の親密なる友情によりて、世界は前後未曾有の狀態に置かるべし。……余等兩人は廣大なる地

まつた熔岩、消えた革命の噴火山以上のものではない。彼はその遺産として、世界制覇を目標とする。佛蘭西と英吉利との一騎打を相續し、その武器である大陸封鎖をも譲り受けたのである。この政
策に關する案は既に一七九五年、社會救済委員會によつて採用されたのであつた。^(二三)

ナポレオンはその闘争の相手が何ものであるかをよく諒解してゐた。最初の痛手を彼に負はしたのは、トゥロン包圍の際に於ける英吉利の鈍劍であつたし、最後の手疵であるワートルロオとセント・ヘレナも、同じく英吉利のなせる業であつた。しかしそれとても、彼が敵の力と偉大さを認識する妨げとはならなかつた。「英吉利人は佛蘭西人以上によく鍛錬された人間である。……もし余に英國の軍隊があつたならば、余は全世界を踏み破つてこれを征服したであらう。……もし余が佛蘭西なら、英吉利の國民に選まれた人であつたなら、余は一八一五年に十度ワートルロオの戦ひに破れたとしても、議會に於ては一人の投票も失はず、軍隊に於ては一人の兵士をも背かしめることなく、最後にはよく一黨を己れのものとなし得たであらう。」^(二四)

しかし問題はそれなのである。もと／＼國民的存在である英吉利は彼を選み出すことなど決してなし得ないので、佛蘭西がそれをなし得たのはこの國の本質が全世界的であるからである。「英吉利は各員が己れの義務を遂行するものと庶幾してゐる。」然るに佛蘭西は各自が己れの名譽のために死ぬものと囑望してゐる。義務と名譽と執れが大であらうか。——祖國に對する義務か、それとも世界に對する名譽か？ 一國民にとつては、自己のために世界を犠牲にするのと、世界のために

自己を犠牲にするのと、果して孰れが優つてゐるだらうか。——自己の中にたまはるべきか、又は世界の中へ出て行くべきか？ これは各國民の世界歴史的運命も依然として解決しない、否、解決することの出来ない問題である。この意味に於て英吉利と佛蘭西、——國民的存在と全世界的存在の一騎打も解決されてゐないのである。

島國英吉利は己れ自身に局限し、己れ自身のうちに集中し、己れ自身の中に常住してゐる。然るに革命佛蘭西、それから後に帝政佛蘭西は、己れの國境を犯し、己れ自身の中から出て、世界性を翹望するのを仕事のやうにしてゐる。恐らく英吉利ほど自由を愛する國は又とあるまい。——けれどもそれはたゞ自分自身のための自由に限られてゐるのである。英吉利は歐羅巴各國のすべてを通じて、最も自由な、同時に保守的な國であり、革命的な傾向の最も少い國である。自國の國民的革命を逸早く適當な時機に成就したので、世界革命に關して心を用ゐることは最も少いのである。「余は革命である。」とナポレオンは云ひ、更に進んで鋭い、より革命的な言葉を吐いてゐる、「帝政は革命である」と。「余は反動である、英吉利は反動である。」と、海軍卿をはじめとして下町シブツの仲買人に至るまで、すべての英吉利は佛蘭西の全世界的革命に面と向つて、かう云つたことであらう。

しかし爰に大きな錯誤が生じた。ほかでもない、英吉利が「自由の搖籃」となり、專制君主ナポレオンに對するその防壁となつたのである。「幸運にも、諸國民はボナパルトの武器ですら征服す

ることの出来なかつた障害によつて救はれた。僅か數海里の海峡が世界の文明を護つたのである。^(二五)レミューザ夫人の客間でこれを信じたのは、まださほど驚くには當らないが、全世界がそれを信じたのは、又いまでも信じてゐるらしいのは、驚くに堪へたことである。

佛蘭西には「怪物的暴君」ナポレオンがあるわけだが、英吉利には誰があるのか？ ビット卿、議會、下町、商業、そして恐らく詐欺、——誑詐政策であらう。一人の偉大な專制君主、「騎馬のロベスピエール」と、無數の小詐欺師どもと、その執れが果して恐ろしいだらうか？

しかし何もかもがどつた交ぜになつてしまつた。まるで悪魔がこのいかさま勝負の骨牌を引つ掻き廻したかのやうである。革命の佛蘭西が案外反動であつて、反動の英吉利が革命であつたり、自由が隷屬であつて、隷屬が自由であつたり、過去が未來であつて、未來が過去であつたりするのだ。さながら、全地球上の陸地が海中へ顛覆して、海もなければ陸もなくなつたかのやうである。新しい全世界の大洪水が起つて、混沌がやつて來た。——尤も、今のところはたゞ人間の頭腦の中だけで、現實界ではすべてが依然として舊の通りである。しかしこの儘では決して濟まされない。頭腦の混沌は現實の混沌を生み出すに相違ない。この混沌の最初の申し子は世界大戰であつて、我々は既にそれを見た。或は第二の申し子——世界革命をも見るかも知れない。ナポレオンはこの到來せんとする混沌と戦つて、遂にそれに打破られたのである。

國民的存たであるポナパルトがあるまで完全に體現してゐる。——中斷——^(二六) HENRI ROUILLON

界の存在であるナポレオンは、實現したかのやうである。しかしそれは容れにたくあるべきで、國民的存在の尺度は世界的存在のそれとは異なつてゐる。前者には我がニウクリ下の「三次元の」幾何學が當て嵌るが、後者を支配するのは我等にとつて未知の「第四次元の」幾何學である。恐らくナポレオンのこの新しい尺度が我々には「途方もない」「狂氣の沙汰」のやうに思はれたのかも知れない。全世界性の梨はまだ熟さなかつたので、この余りにも早く生れた全人はそれを解さなかつたか、それとも余りに遅く解したのであらう。^(二七)

また次のことも忘れてはならない。瘋癲病院では正氣のものが狂人に見えるもので、事實發狂することは易々たる業なのである。ナポレオンも發狂の近いことを感じてゐた。「帝王の臥床に寢て、滅亡の狂氣に感染せずにはゐられない。余もまた狂氣した。」^(二七)

しかし主なる原因は彼の「狂氣」ではなく、かう云へば奇妙に聞えるかも知れないが、彼の單純さなのである。彼はテイルジットの筏の上で餘りにも易々と、「私は陛下と同様に英吉利人を憎みます！」といふアレクサンドルの言葉を信じたのである。「繊細にして偽り多きギザンチン型の人間」が、コルシカ人の裏を掻いた。一切のものを約束して、何ひとつ實行しなかつたのである。豫言者の所謂、「これに凭れば手を刺して傷つくる折れ目ある杖」だつたのである。露西亞の沼澤地の苔のごとく柔かでもの優しいが、それに足を載せると吸ひ込まれてしまふ。

「余は親友的な態度で露西亞を壓迫して亞細亞へ追ひ出さうと思つた。」とナポレオンは云つてゐる

る。「余は露西亞に君^{コンスタンチノブル}府を提^て供した」が、但し兩海峽抜きなので、要するに鍵のない錠前である。^(二八)「鍵はあまりに高價で、これ一つだけでも一帝國に値する。これを領有するものは世界を領有するのである。」^(二九)兩海峽問題のためにティルジットは破綻を來したのであつた。

一八〇八年の秋、エルフルトで新たに兩皇帝の會見が行はれた。俳優クルマが舞臺の上でヴォルテールの『エデプス』の一行

偉大なる人との交りこそは神々の愛^{あて}なき贈物なれ

L' amitié d' un grand homme est un bienfait de dieux.

を唱へたとき、アレクサンドルとナポレオンは抱擁を交したが、最早ティルジットの筏の上のやうではたかつた。それ以來モーヌ河でもネマン河でも、すでに多くの水が流れ去つたのである。ティルジットの花瓶には龜裂が入つた。エルフルトでそれを修理したが、修理後は一寸でも龜裂の入つた花瓶を叩くと、不吉な調子外れの音が、「十二年」と答へるのであつた。

註

(一) ラクール・ゲイエー、二二九頁。(二) 同上、四一〇頁。(三) 同上、四一二、四一六頁。(四) プ

カリュクヌス、第一卷一七二頁。(五) マルモン、第一卷一七二頁。(六) ティルジット、第一卷一七二頁。(七) ティルジット、第一卷一七二頁。(八) ティルジット、第一卷一七二頁。(九) ザンダク、第一卷二四二—二四三頁。(一〇) 同上、第一卷二六三頁。(一一) マルモン、第三卷三三七頁。(一二) ティルス、『現代佛蘭西の起源』(アシェット版)、第九卷一二四頁。(一三) ザンダク、第一卷四四〇—四四一頁。(一四) グルゴ、第一卷三三三頁。(一五) レミュザ、第三卷二二二頁。(一六) ブーシキンに關するドストエーフスキイの言葉。(一七) ラクール・ゲイエー、四四二頁。(一八) ザンダク、第一卷二七二頁。(一九) ラクール・ゲイエー、四五九頁。

* 一八一二年、ナポレオンの露西亞侵入と敗走の年。

二、各國の背反

一八〇九年

「全歐洲は彼に反して起つであらう。彼が各國民を固く繋ぎ合せば合せるだけ、むしろ爆發は恐るべきものがあらう。私の言葉を信じて頂きたい。もし我々が已れを支へることが出来さへすれば、佛蘭西は自分自身の勝利に疲弊して倒壊するだらう。」これは一八〇六年、イエーナ會戰の後、ワートルロオ戰に於ける未來の勝利者であるプロシヤ將軍ブリュッヘル(二)の云つた言葉である。爆發は恐らくブリュッヘル(二)の考へてゐたであらうよりも早くやつて來た。

ジブラルタルからキスチュラ河に至る歐洲大陸封鎖の環を完全にするため、ナポレオンとしては西班牙を占領することが必要であつた。一八〇七年にジュノー將軍がポルトガルを占據した時の迅速さと容易さから推して、皇帝は全半島を占領するのもそれと同じ位迅速かつ容易な業であらうと考へたのである。佛蘭西のブルボン王家から遺産の半分——佛蘭西を譲り受けた以上、西班牙のブルボン家からも他の半分——西班牙を譲り受けるのは當然である、——かう云つて彼を説き伏せたのは、彼のメフィストフェレスであるクレイランであつた。

一八〇八年の三月、ミュラーの軍團はポルトガルなるジュノー將軍投助の口實のもとに西班牙に

侵入し、エスキリアル・マドリッドに乗込んだ。首都の情勢は混沌を極め、佛蘭西人の鼻には早くも甘い焼肉の匂ひがしてゐたのである。

王位繼承者であるアストゥリイ公フェルチナンドは、「平和侯」と呼ばれてゐた宰相ゴドイを憎んでゐた。これは前身の曖昧な野師であつて、王妃の寵臣となつたために、妃を通じて老練した國王カルル四世を藥籠中のもとし、國を荒廢させ王家の名譽を傷つけてゐたのである。ゴドイのお庇で父母と王子の間に軋轢が始まり、その結果紛れもない國內戰が惹起されることゝなつた。アランジエツツには王子派の反亂が起り、王子はフェルチナンド七世なる名のもとに國王と宣言された。平和公は獄に投じられて、危く刑死されんばかりとなり、老國王は我子のために自ら位を退いた。

一八〇八年四月十五日、ナポレオンは西班牙事件を近く觀察するため、バイヨンナなるマラックの城に駕を進め、そこへ西班牙王家の一統、即ち父母、息子、情夫を招致した。一同は彼が紛糾を裁いてくれるものと期待して、勢ひ込んで飛んで來た。けれども五月二日、マドリッドに新しい叛亂が起つた。佛蘭西の占領軍に對する反感から出たものである。ミュラーは血の海の中にこれを鎮壓した。一萬五千人の叛徒は埃及騎兵のために殺戮された。

同時に、バイヨンナにあつたナポレオンはフェルチナンドを廢王とした。マドリッドの叛亂は彼に心を寄せる人々の仕業に相違ないといふ口實なのである。ナポレオンは王位を老父に返すやうに

と勧めたが、老國王はそれを拒んだ。ナポレオンにはこれこそ思ふ壺だつたのである。

フェルチナンドはブレンシヤに幽閉され、カルルはコムピエンに移された。かうして西班牙の王位は空きが出来たわけである。皇帝は弟のジョセフをその位に即かせ、妹婿のヨヒム・ミュラーをナポリの王座に坐らせた。「一人の頭から王冠を奪つて、それを別の人にすつぱりと被らせた。そして二人の王は帽子を取り換へた新兵のやうに、めい／＼自分の行くべき所へ別れて行つた。」とシャトーブリアンは評してゐる。^(八)

「現代の歴史が知れる限りの不法きはまる王冠の掠奪が成就した。」とマルボー將軍は憤慨の辭を洩らしてゐる。「父子の間の和解者と名乗り出て、二人を二人ながら係蹄にかけたうへ掠奪を行ふとは——これこそ歴史の特筆大書した陋劣無比な悪行であつて、天帝もそれに對して猶豫なく罰を下し給うたのである。」^(三)マルボーのこの憤慨には彼の高潔な心情とともに、政治家としての感覺の鈍さが窺はれる。悲しいかな現代の歴史は、人間によつて賞せられ、天帝によつて少くともこの地上では罰せられなかつた悪行、しかも遙かに大きな悪行を無數に知つてゐるのである。

メフィストフェレスであるクレイラン——ナポレオンが彼に面とむかつて呼んだ言葉に従へば、「絹の袋に包んだ排泄物」^(四)であるクレイランは、得々として凱歌を奏した。ともかく皇帝の頸に係跡をかけることに成功したのである。限りなく聰明な人間が限りなく愚劣な事件に巻き込まれ、汚穢と血との中に首まで浸る事となつたのである。世界を領するのにはナポレオンであつて、ナポレオ

ンに對するのにはクレイランである。

尤も、皇帝自身も極めて残酷に己れを裁いてゐるので、倒れたるもの之を觀つやうな面影は、かのテレーヌ位でなければ所詮出来なであらう。「潔く自認するが、この事件に手を染めた余の遣り口は拙劣を極めてゐた。不道德性はあまりにも明瞭であり、不正はあまりにも大膽的であつた。しかも全體がこの上もなく醜惡な形狀を帯びてゐた。何となれば余が失敗を喫したからである。それがために、この試みは赤裸々にその醜態を晒して、そこに何らの莊重さもなければ、余の意圖した無数の善行も窺はれない。この不運な戦争が余を破滅させたのである。……」「この痛腫が余を啖ひつくしたのである。」^(五)

バイヨンナに於ける惡逆事件の後、マドリッド街上に横溢した血潮の中に消された暴動の焰は、さらに新しい勢ひで燃え上つて、今度は西班牙全國に擴まつた。國中はゲリラ Guerrilla と稱する半ば野盜的な、半ば英雄的な暴民の徒黨で、網の目のやうに蔽はれてしまつた。刀と銃彈は到るところの街角で佛蘭西兵を待伏せしてゐた。「西班牙兵を撃破するのはいと易いが、彼等を征服することは不可能である。何故ならば、彼等と正規の戦ひをすることは所詮不可能だからである。」國民の精神、——これこそ目に見えず捕捉することの出来ない、しかも隨所に遍在してゐる敵である。

「かやうな敵は長期戦となつて軍隊を腐敗させ、國民を鍛鍊するものである。」^(六)

十萬人の狂信的な僧侶達は晝となく夜となく、「千二百萬人の虱だらけな、しかも誇りの強い」乞

食共に向つて、神聖なる戦ひを宣傳した。^(七)「ナポレオンには二つの本性がある——人間的なものと悪魔的なものこれである。」^(八)「彼の本源は何であるか？ 罪惡である。佛蘭西人を殺すのは罪惡であるか？ 否、これらの犬の如き異教徒を殺す者には、賞として天國の至福が與へられるであらう。」これが西班牙の僧侶達の愛國主義的示教書であつた。

西班牙人はナポレオンの「恩惠」などはまるで望んではゐなかつた。——ジョセフ王も、ジャン・ジャック・ルソーも、「人間および市民としての權利」も、法典も、「黄金時代」すらも、占領軍と共に受けつけようとしなかつた。それより寧ろ昔ながらに、「虱だらけでも誇り高く」暮す事を望んだのである。雪の風と、伊吹芹と、山羊の糞の匂のするシエラ・モレナの荒涼たる山徑の方が、彼等にとつては凱旋門の聳えてゐるシャンゼリゼーよりも貴いのであつた。

王様の人形とも云ふべき哀れなジョセフは、羞恥と恐怖のために泣かんばかりであつた。「西班牙人の中で私の味方をしようと云ふものは一人もないのだ。私の敵は自暴自棄になつた勇猛な千二百萬の國民である！」^(九)

勇敢をもつて聞えたデュボン將軍は、南部西班牙占領の任務を授けられた。一八〇八年七月二十二日、シエラ・モレナ山麓のベイレン峡谷で、敵に遮断され包圍されたデュボンは、一萬八千の軍隊を擧げて降伏の餘儀なきに至つた。「兵士等は概ね新兵で、まだ鼻髭も生え揃はぬ少年であつたが、烙くがごとき七月のアンダルシヤの太陽の直射下を十五時間強行軍をしゐられた後、八時間

亘つて戦闘を續けたため、戦ふことは愚かじつと立つてゐることさへ出来ない程であつた。^(一〇) 彼等は鎌に薙がれた麥の穂のやうに、俘虜か死を覺悟しながら靜かに地上に倒れ伏した。たとへ戦ひの神であらうとも、かうなつたら最早降伏よりほかに途がないであらう。とまれ、ベイレンは偉大な軍隊の、否、皇帝自身の横面に加へられた平手打のやうに、西班牙全國はおろか佛蘭西から歐州全體に高々と響き渡つたのである。ベイレンは、バイヨンナに對する刑罰であつた。

「名譽は喪失した。これは取返しのかめことだ。名譽の痛手は癒すことが出来ぬ！」とナポレオンはこの報に接した時、氣絶するのではないかと疑はれるほど蒼褪めながら、かう呟いた。^(一一) 國會の席上でも、ベイレンのことを語りながら泣いたとのことである。

戦捷の魔術は破られた。ナポレオンも征服することが出来るのだ。マドリッドは撤退することになつた。ジョセフは見苦しくも追放された。未來のウェリントン公であり、ワートルロオの英雄であるウェルスリー將軍麾下の英吉利軍は、リスボンに上陸してサラマンカ、マドリッドに向ひ、佛蘭西軍撃滅の演練をしてゐた。

一八〇八年の秋、ナポレオンは二十五萬の軍を率ゐて、ブルゴスからマドリッドを襲ひ、再びジョセフを王位に即かせ、一月餘りの間に半島の北部を殆ど残らず占領した。西班牙軍はほとんど闘はずして遁走した。しかし、「彼等を撃破するのは容易いけれども、征服することは不可能である。」ナポレオンは一步毎にこの血腥い底なしの泥沼に吸ひ込まれて行つた。

突如、戦役を完了しない中に、一八〇九年一月十八日、彼は急遽巴里へ引返した。半島には三十萬の兵を残しておいたが、「千二百萬人の憑かれたる人々の中に在つて、これしきの軍が果して何するものであらうか！」⁽¹¹⁾ 彼、巴里へ急行したのは、外務大臣タレイランと警務大臣フーシェが、ナポレオン戦死の場合を豫想して企てた陰謀事件を耳に入れたからである。彼としてはアンギアン侯などよりも、寧ろかゝる輩をこそ刑すべきである、この二匹の毒蛇を殺して世を清めるべきである！ けれども彼は二人を赦した。概して彼は易々と自分の不倶戴天の仇を赦した、或は輕蔑の念から出たことかも知れない。この陰謀には皇帝の妹婿であるナポリ王と、その妻カロリース・ボナバルト、——「マクベス夫人」⁽¹²⁾ も加はつてゐたのである。

ナポレオンはまた奥太利も佛蘭西に弓を引いたと云ふ報を受取つた。彼はさながら、片足を泥沼に吸ひこまれて、しかも襲ひ来る敵を防がなければならぬ人に努驚としてゐた。泥沼は西班牙であり、敵は奥太利、英吉利を始めとして歐羅巴全體である。

短期間の奥太利戦争は輝かしいものであつたが、しかしそれは夕立雲の間から差覗く夕陽のごとく、最早不吉な輝きを感じさせた。

一八〇九年五月二十一日から二十二日へかけてのエスリングは、ほとんど敗北であつた。七月五日——六日のヴグラムも完全な勝利とは云へない。戦闘は有利であつて、敵は退却したが、「しかし不意にも、友軍は一人の捕虜も一歩の進軍も出来なかつた」と、この戦闘の全がが利便を

述べてゐる。それは餘りにも奇しい、最後、死力を尽した。このこと、ボナパルトは、
する敵を追跡しようときへしなかつた。負傷した獅子は襲ひかゝる犬共に齒を割いて威嚇するもの、最早これに飛びかゝつて八つ裂きにするだけの力がないのである。恐らくヴグラムの戦闘で彼は初めて、戦争の相手が既に帝王でなく國民であることを感じたのであらう。

一八〇九年十月二十三日、維納に近いシェンブルン城の廣場で、佛蘭西軍隊の觀兵式が行はれてゐる間に、一人の若者が捕へられた。ナウンブルグの新教の牧師の息子で、フリードリッヒ・シュタプスといふ、年齒十八の、殆ど少年に近い男であつた。訊問に際して率直に答へたところに依れば、彼は料理庖丁でナポレオンを殺さうとしたのであつた。「何々ためにお前は僕を殺さうと思つたのか？」「あなたは私の祖國に惡をなさるからです。……」「もしお前が僕に赦しを乞ふなら、お前の命を助けてやるが。」「私は助けてなんか貰ひたくありません。私はあなたを殺すことが出来なかつたのを心から残念に思ひます。」「ちよつ、困つたやつだ！ どうやらお前は犯罪を何とも思つてゐないやうだな？」「あなたを殺すのは犯罪ではありません、義務です。」「ふん、でも僕がやつばりお前を赦してやつたら、お前は感謝するだらうな？」「いや、私はそれでもあなたを殺します。」「ナポレオンは思はず棒立ちになつた。」と目撃者は語つてゐる。「これが獨逸全國を感染させたイルミナートの結果だ。しかしこればかりは何とも仕方がない。宗派的なものは大砲で撲滅するとは出来ないからな。」と、シュタプスが引立てられて行つた時、彼は側近の者に云つた。「あれの

* 自然神教に共和政治的思想を交へた秘密結社。

最後の様子を見て儂に報らせてくれ。」

シユタプスは英雄らしい最後を遂げた。銃刑の場所へ引き出された時、彼は「自由萬歳！ 獨逸萬歳！」と叫んで噉れたのであつた。

ナポレオンは長くこの少年を忘れることが出来なかつた。「あの不仕合せなやつは儂の頭にこびりついて離れない。あれのことを考へると、頭がこんぐらかつて来る。……あれは儂の分別以上だ！」^(一五)否、分別以上ではない。彼は知り、記憶してゐるのだ。この「ひどく蒼褪めた、處女のやうに優しい顔をした」十八歳の少年が、——古英雄と基督教の受難者を一緒にしたやうな顔つきの少年が、復讐する自由の天使であり、彼自身の分身であることを、知り記憶してゐるのだ。一七九三年、ジヤコバン黨であつたボナパルトの言葉、——「たとへ余の父であらうとも暴君たらんと欲するならば、余は匕首をもつてこれを刺すであらう！」

もしかしたらナポレオンは、ヴグラムの戦場よりもシユタプス訊問の際、自分は帝王を相手ではなく國民を相手に闘つてゐるのだと云ふことを、一層明瞭に悟つたかも知れない。この暗殺事件の後、彼は早速奥太利との媾和談判を急いだ。「儂はこれを片づけて了ひたい！」^(一六)否、決して片づけることは出来ないのだ。

「陛下は恐らく既に御承知のこと、思ひますが、萬一陛下が敗北なさるやうなことがありましたら、露西亞と獨逸は巨大な一國となつて、己れの鞭を振り落すために蜂起するでせう。それは一種

の十字軍であります。すべての同盟國は陛下を棄て、世民はその帝王を擁護して陛下に敵と討はしめるでせう。」と、ラッブ將軍が既に一八〇六年、イェーナの戦の後にかう云つてゐる。「彼が獨逸人を評して、吠えるばかりで咬みつくことのない犬ころに譬へたのは、餘りこの國民をよく知らぬ證據である。彼等が如何なる事を仕出來す力を有してゐるかは、彼も後日思ひ知つたところである。」^(一七)

同年、ニユーレンベルグの書籍商バルムが、「深き屈辱に沈める獨逸」^(一八)なる小冊子を普及させた罪によつて銃殺された時、義憤と絶望の嵐は全國を吹きまくつた。一八〇七年から一八一〇年にかけて、プロシヤに國民運動が起つた。ファイヒテは「獨逸國民に告ぐ」を、アルントは「獨逸兵士の示教書」を、ケルネルは「堅琴と劍」を出した。

「勳播はその頂點に達しました。」と弟ジェローム、ウエストファリア王は、ナポレオンを警戒した。「思切つて氣狂ひめいた希望が歡喜の情をもつて人々に受入れられてゐます。みんな好んで西班牙の例を擧げてゐるのです。もし戦争が勃發したら、ラインとオーデルの間の諸國は悉く一大暴動の温床となるでせう。」^(一九)これぞ即ち、ブリュッヘルの言葉に従へば、「彼が各國民を固く繋ぎ合せれば合せるだけ、寧ろ爆發は恐るべきものとなるだらう」である。

單に各國元首ばかりでなく國民すらもが、歐羅巴をボナパルト一族の間に分配したことに憤慨した。即ちジョセフはマドリッドに、ジェロームはウエストファリアに、ルイは和蘭に、エリーズは

トスカナに、カロリーヌの夫ミュラーはナポリに君臨してゐるのであつた。

ナポレオンは歐羅巴を命名日の飾菓子のやうに切つて、その一片々を弟や妹達に分け與へた。驚の王は歐羅巴を獸の死骸と見做して、これで自分の雛たちを養つたのである。

とは云へ彼自身も爆發の來ることは承知してゐた。地上を歩みながらも、大地が彼の足下で噴火山のごとく燃え震へてゐるのを感じた。しかし何ともせん方のない事である。各國民を征服するか、然らずば全世界性を斷念するかである。「余の前にはゴルヂウスの結び目が置かれた。余は劍をもつてこれを兩斷したのである。」⁽¹¹⁰⁾各國民の結び目、肉と血の結び目を、彼は幻影的な世界性の劍で斷ち切らうとしたが、却つてそれは彼の首に死の良となつて纏ひついたのみである。

「余は何人にも惡を欲しなかつた。しかし余の偉大なる政治の車が驀進するとき、その前進が必要なのである。故にその轍にかゝつたものは禍である！」⁽¹¹¹⁾彼自身がその轍にかゝつたのだ。

註

- (一) フウリエンス、第四卷一四八頁。(二) ラクール・ゲイエー、四四二頁。(三) マルボー、第二卷七九—八四頁。(四) “Vous n'etes que du fumi r dans un bas de soie” (五) ラクール・ゲイエー、四二三頁。(六) テイエボー、第四卷三九四頁。(七) L. フロア、一六九頁。(八) フウリエス、第三卷八頁。(九) ラクール・ゲイエー、二九七頁。(一〇) マルボー、第二卷八五頁。(一一) セギユ

- ー、第三卷二五四頁。(一二) 同上、第三卷三〇九頁。(一三) バスキエ、第一卷三五—三五九頁。(一四) マルモン、第三卷一一五頁。(一五) ラップ、一四七一—五三頁。——フウリエンス、第四卷四一—四一七頁。——コンスタン、第三卷一一五頁。——メレジコフスキイ、ナポレオン論第四章「アトランチードの人」(こゝにも再び避くべからざる反覆が生じてゐる。何となれば、同一の事件が他の光、個人ならぬ時代の光に照らされてゐるからである。)(一六) セギユール、第三卷四一九頁。(一七) ラップ、一六六一—六七頁。(一八) “Deutschland in seiner tiefen Ernüdrigung” (一九) ラクール・ゲイエー、四六四頁。(二〇) 同上、四二三頁。(二一) 同上、四二四頁。

三、皇統

一八一〇——一八一一年

奥太利の皇女マリー・ルイズが、ヴグラム戦の勝利者の獲物となつた。

ジョセフィーヌは子供がなかつたが、ナポレオンとしては皇統の礎を置くために継承者が必要であつた。「もし余が不幸にしてジョセフィーヌを失ふやうなことがあつたら、國家的考量は余をして再び結婚せしめるかも知れぬが、その時余は單に腹と結婚するのみであつて、*J'épouserai un ventre* ジョセフィーヌは依然余の生涯の唯一の伴侶として残るであらう。」と彼はよく云つたものである。そこで、彼はマリー・ルイズの腹と結婚した。彼女の母には十三人の子があり、祖母には十七人、曾祖母には實に二十六人あつたのである。

一八〇九年十二月二十五日、皇帝の離婚が發表され、皇后ジョセフィーヌの「自由意志による」退位が聲明された。彼女にあつては、幾度かのヒステリーの發作、氣絶、涙が伴つたのは勿論である。彼自身も泣いた。尤も、彼は一寸したささやかな悲みではよく泣いたが、大きな悲しみで泣くことは決してなかつた。ジョセフィーヌには心から愛着を感じてゐた。世にも不思議なことながら、ナポレオンは古い習慣、——云はゞ「古い上靴」の人間であつた。ジョセフィーヌは彼にとつ

て「古い上靴」であつた。當りが柔かくて押めつけないのである。

ハプスブルグ家の多産のほか、彼がマリー・ルイズに誘惑を感じたのは、ブルボン家の血筋を引いてゐるからでもあつた。彼女と結婚したら、彼はルイ十六世に向つて「叔父さま」と云ひ、マリイ・アントアネットに向つて「叔母さま」と云ふことが出来るわけである。革命の兵士は初め「皇帝」に墮落し、後には「ハプスブルグの継承者にまで下つた」のである。「あゝ、これこそ本當に奥太利式の唇だ！」と彼はマリー・ルイズの肖像をハプスブルグ一族のメダルと引較べながら、歡喜の聲を上げたものである。

ナポレオンはボナパルトを忘れた。「余には子供がない、また余はそんなものなど一向に必要としない。家族的精神などと云ふものは余にとつて縁がない。マレンゴの戦闘の時余が何よりも最も恐れたのは、もし余が戦死したならば、兄弟の一人が余の後を繼ぐだらうと云ふことであつた。」「余の唯一の継承者は佛蘭西國民である。これこそ余の息子であつて、たゞそのために余は働いて來たのである。」

「なり下つた、」——血統のために己れ自身を、己れの個性を拒否した。彼は唯一無二のものとなることを欲せずして、ハプスブルグの中に第二のナポレオンを得んと欲したのである。

一八一四年、マリー・ルイズが息子をつれてラムブリエへ到着した時、フランツ二世は三歳の羅馬王がヨシフ二世と酷似してゐるのに一驚を吃した。「正真正銘のハプスブルグだ！」

* ナポレオンとマリー・ルイズの子ジョセフ。

四十歳の花嫁は十八歳の花嫁のために浮身を寒した。洒落た窮窟な服と窮窟な靴を註文して、どうにも穿きこなせなかつたり、眼が廻つて吐き氣を催すくせにワルツを習つたりした。(五)まるで子供が新しい玩具を待ち焦れるやうに、花嫁を一日千秋の思ひで待つてゐた。

彼は雲の降る夜中に、彼女を迎へにコロムビアンまで出掛けて行つた。そして彼女の馬車へ飛び込むなり、兵隊式な性急さで彼女を領有した。(六)

彼女の肌は陶器のやうに眞白で、眼は青磁のやうに碧く、ものごしはごつ／＼とぶつきら棒で、顔は微かに痘痕があつたけれども鮮かな薔薇色を帯び、胸は乳母のそののやうに張つて、あどけなさは十歳の少女のやうであつた。彼女は夫に接吻されると何時も手巾で顔を拭つた。「どうした事だね、ルイズ、お前は僕を嫌つてゐるのか？」「いいえ、これはわたしの癖なんですの。わたしは羅馬王に接吻された時でもさうしますのよ。」

夫は暖を好み、妻は冷を愛した。「僕のところでお寝み、ルイズ。」「いいえ、あなたのお部屋はあまり燠爐が熱すぎるんですもの。」(七)

「わたしたちはちつともあの人が怖くはありません。でもこの頃あの人がわたしを恐れてらつしやるのぢやないか、と云ふ氣がして参りましたわ。」と彼女は結婚後三月たつた時メツテルニツヒにさう云つた。

彼は彼女が愛してくれてゐるものと想像してゐた。一八一四年、最初の退位の後、彼女は夫に宛

てて、わたしは決してあなたを愛してはしない、一體何なる人間かお二人を引裂くことは出来ませぬ。』と書いてやつた。で、彼はそれを信じた、少くとも信じてゐるやうなやうに思つた。『結婚後を知らないのだ。あれは非常にしつかりした女なのだから！』と彼は側近の者に語つた。(八)「あれは僕の弟達の誰よりも賢くて駆引きが巧いよ。」(九)

彼は流諺の地エルバ島へ彼女が来るのを待つてゐた。と云ふのは、彼女は「皇帝としてよりも寧ろ人として彼を愛してゐる」からであつた。同じエルバ島で、彼は貴家に命じて宮殿の天井に二羽の鳩を描かした。それは「絹のリボンに結び合はされてゐて、別れ別れに飛べば飛ぶほど結び目が固くなる」のであつた。(一〇)

セント・ヘレナで、臨終の一週間前、彼は自分の心臓を彼女に贈るやうに遺言した。「君、それをアルコール清にして、バルマにある僕の貴いマリイ・ルイズのところへ持つて行つてくれ。そして、僕が彼女を優しい心持で愛してゐること、曾て一度もその愛が杜絶えた時がなかつたことを、彼女に傳へてくれ。それから、僕がこゝでどんな風に暮してゐたか、どんな風に死んだかと云ふことを、君の見た通りに話して貰ひたい。」しかしこの時既に、彼女は彼にとつて不倶戴天の仇であり、多年に亙る間諜であつたかさま者の、ナイツベルグ男爵といふ埃太利の外交官を情夫にしてゐたのである。(一一)

「余は最愛の妻マリイ・ルイズに余の息子を劬り守らんことを乞ふ。」といふ一句が皇帝の遺言状

に讀まれる。(111) 幸にして、彼は彼女が一人子を如何に幼り守つたかを知らずして世を去つたのである。

一八一〇年四月二日、曾てナポレオンとジョセフィーヌを結び合せた法王樞機員フォツシユが、彼等二人を結び合せた。一八一一年三月二十日、彼等の間に男の子が生れた。これが即ち羅馬王である。幻の皇統は基礎を置かれた。深淵は花で掩はれたのである。とは云へ、彼自身も己れを欺いてはゐなかつたやうである。「マリー・ルイズとの結婚が余を滅ぼした。……余は花に掩はれた深淵の上に片足を載せたのであつた。」(112)

彼が自ら己れの頭に縛りつけた最初の石は西班牙であり、第二の石は皇統であり、第三のそれは法王であつた。

「法王は靈の上に君臨してゐるが、余はたゞ物質を支配してゐるのみである。」(113)「人間の魂は僧侶達がこれを取つて、余には死骸を残すに過ぎない。」(114)それは彼の望むところではなかつた。彼は死骸を蘇らせて、靈を物質と結合させたかつたのである。そこで、基督の代官として法王と帝王の両者が存立すべきでなく、たゞ一つ帝王あるのみと宣言した。「神は皇帝を己れの力の代官とし、地上に於ける己が像となし給うたのである。」(115)

「余は法王を支配し得るものと期待した。それをなし得たならば、その時は世界に對して如何に大なる權力と感化力を獲得しようか！」(116)「余は精神界をも此界と同じく易々と統治したのであら

う。」(117)「余は法王の位置を無限に高め、世俗のことに哀惜を感ぜざるに到るまで、名譽と榮華をもつて法王を圍繞したであらう。余は彼を一箇の偶像とする心算であつた。彼は余と相並んで住み、巴里は基督教の首都と化したであらう。余はコンスタンチヌス及びカルル大王と同様、己れ自身の伽藍を有する筈であつた。」(118)

一八〇八年五月、エスリングの戦鬪後、皇帝はシェンブルンから命令を發して、法王から教會領、即ち地上の權力を剝奪した。それに對して法王は皇帝を破門した。「最早一切容赦はない！あれこそ氣の狂つた癡呆者で、牢に押籠めるより外はない。」とナポレオンはミュラーに書送つてゐる。ミュラーは軍隊を率ゐてキリナールの宮殿へ闖入し、法王を逮捕して、虫の息である瀕死の老人を初め先づトスカナへ、ついでグレンブルへ、そして最後にジェノア縣のサヴォナへ移した。皇帝は法王樞機員の全部と法王廳を巴里へ移すやうに命じた。彼は法王をも同じく巴里へ連れて來て手許へ置き、完全な權力を掌握しようとして考へたのであつた。が後にフォンテンブローへ移して幽閉し、第二の對法王條約に署名を強制した。それは俗世的權利の放棄を唱つたものである。しかし法王は後日この條約を拒否した。フォンテンブローでは、彼は憲兵將校の牢番に看視されて暮してゐた。一八一〇年以後、彼は祕書も、一切の書類も、インキヤベンすらも奪はれてしまつた。(119)けれど彼は何處までも毅然として屈しなかつた。「事は我等の良心に關する問題である。事ごとくに至つては、假令我等は身の皮を剥ぎ取られようとも、彼等に一步も譲りはしないであらう！」(120)

かうしてナポレオンは、自分自身の坐つてゐる木の枝を、——神聖なる戴冠を切り落さうとしたのである。鐵の劍をもつて幻影と戦つたのだ。^(二二)

「プロテスタントの國々でさへ、法王に對する彼の態度に憤慨した。」^(二二)ナポレオンは西班牙戦争に關して述べたのと同じやうに、この羅馬との一騎打についても次のやうに云ふことが出来た譯である。「この事件に手を染めた余の遣り口は拙劣を極めてゐた。しかも全體がこの上もなく醜惡な形狀を帯びてゐた、何となれば余が失敗を喫したからである。それがためにこの試みは赤裸々にその醜惡を晒した。」^(二三)「余はあまりに高く腕を擡り上げた。余は神意そのものの如く行動せんと欲したのである。」^(二四)

侍醫のゴルギザールは、すでに帝政も末期の頃、トゥロン以來の皇帝の疥癬を全治したが、それから彼はめき／＼と肥りはじめた。彼はよく若い時分のことを追想して、「儂はあの頃まるで空中を飛んでゐるやうであつた。」と云つたものであるが、瘦軀と共に彼はこの神の如き輕快さをも失つた。四十歳に近づく頃には、彼は肥満し、脂ぎり、鈍重になつた。自然の法則に反して、彼の魂は病的な肉體に宿つてゐる時には健康で、健全な肉體に宿つてゐるときは病的なものであつた。もと黃みがかつてゐた皮膚の色も光澤のない白さに變り、大理石のやうに冷やかになつた。や／＼腫んだ顔には何かしら柔らかな、女性的な、殆ど「お婆さんじみた」と云ひたいやうなものが現れて來た。地方から出て來た一人の侍醫は、彼が世帯のために大きな白い羽織りのついた伊式用の羽子を

被り、皇后と並んで馬車に乗つて行くのを見て、彼をマリー・ルイーズ「年をとつた女家」^(二四)かと思ひ違ひをした程である。以前のオシアンを想はせる憂愁に引換へて、今やこの顔には石のやうに重苦しい倦怠が、——「假死」の表情が現れてゐるのであつた。

「僕は君が氣の毒でならないよ。」とタレイランは式部長のレミュザールに云つた。「君は愉しみ得ない人 *Vinamusable* を愉しませなくちやならないんだからね！」

皇帝自身もその宮殿で催される舞踏會の退屈なのに、時として一驚を吃することがあつた。「それと云ふのは、陽氣つてもものが太鼓の命令を聽かないからですよ。」とタレイランは彼に説明した。^(二五)

皇帝が倦怠を感じれば、國民も倦怠を感じた。戰捷も人心を愉しませなかつた。むしろ戰捷のため益々倦怠が深められた。何故なら、戦争が涯しないものに思はれたからである。「當地では憂鬱と不安が世間一般に瀰つてゐます。」と或る同時代の婦人が私信の中に書いてゐる。「戰捷を聞いても感激もなければ、驚愕の念もありません。奇蹟に食傷したのでございます。」^(二六)

革命の獨裁官が專制君主に變つて行つたのである。

政治犯のための牢獄復活を制定した一八一〇年三月の勅令は、「恰も革命の第一の行動、——巴士チーニ破壊を無に歸せしめた」^(二七)感がある。國民學校や専門學校は兵營と化して、その藝術神たちは宮中の舞踏會で踊る貴婦人達と同じやうに、太鼓の響きにつれて行進した。言論の自由は窒息させられ、七十四の新聞のうち残るは僅か四つだけであつた。それに掲載される論文は輿論局 *Bureau de*

L'esprit public から廻され、主筆は司法大臣の任命によらねばならなかつた。「印刷機械は兵器廠

に属するものであつて、一般の利用に委ねべきでない。書籍を刊行し得るものは政府の信頼ある人物に限る。」^(一七)「新聞は結局廣告の機關たらしむべきである。」といふのが皇帝の空想であつた。^(一八)「須らくタルチニーフを禁止すべきであらう。」^(一九)「思想は帝王達の主なる敵である。」^(二〇)

無邪氣な自由主義者であつたド・スタール夫人は迫害された。「煽動者どもの王國は終りを告げた。余は人々が余の命に服することを欲する。権力を尊敬せよ、何となればそは神より出でたものだからである。」^(二一)「シャトープリアンは、ネロとタシタスに就いて不用意な言を吐いたがために、皇帝から「チュリエリイ宮殿の階段上で剣をもつて斬殺すぞ」と云つて威嚇された。

誰も彼もが、まるで悪夢でも見てゐるやうに退屈で、息苦しく、氣が重かつた。彼自身もそれを承知してゐた。「儂が死んだら、世界中のものがやれ〜と云つて安堵の溜息をつくことだらうな！」^(二二)

「神様はボナバルトを創つてお寝みなされたのでございます。」とある州の知事が彼に面と向つてかう云つた。「もう一寸早くお寝みになつたらよかつたのだ！」と誰か々低聲に半疊を入れた。^(二三)

巴里市は皇帝の玉座のために銘を案じ出した。「Ego sum qui sum、我は存在するものなり。」すると皇帝は、「余を神になぞらへることは差し止める。」と倦怠の表情と共に、餘りにも無恥な阿諛に對する嫌惡の色を浮かべながらさう云つた。^(二四)

さながら石の客である。彼が歩みを遅ぶと、大地はその足下に震動するのであつた。「下は青甲の侍僕から上は宰相に至るまで、一同は彼が近寄る度に恐怖を覺えた。」^(二五)

果して彼は己れのなすところを知つてゐたのであらうか。それとも無限の炯眼を有してゐた彼が盲いたのか、無限の智を有してゐた彼が痴呆となつたのか？ 否、彼は何もかも知つてゐた。己れを滅ぼしてゐることを知りつゝも、滅ぼさずにはゐられなかつたのである。——「燃え盡き」すには、死なすには、「犠牲」とならすにはゐられなかつたのである。「全生涯、余は一切をわが運命のために犠牲とした、——平安も、利益も、幸福をも。」^(二六)また犠牲とせずにはゐられなかつたのである、夕日が西に傾かずにはゐられぬやうに。

「彼一人のみ能く持ち上げ得る恐ろしい棍棒が、彼自身の頭上へ落ちて來たのである。」^(二七)彼は落ちて來ることを知つてゐた、のみならず、恰も彼自らそれを欲したかの如くである、とさへ云ふことが出来る。

「彼は己れ自らを破滅したのである。政治的自殺によつて己れを亡ぼしたのである。」と或る同時代人が云つてゐる。自殺は自己苛責である。^(二八)「精靈彼の上に降りて、彼は獅子を仔山羊のごとく引裂きたり。」そして、「食ふものより食物出で、強きものより甘きもの出で來る」ために、己れ自身を八つ裂にしたのである。

一八〇八年、西班牙戦争の前に彼は毒の入つた守袋を肌につけて、最後まで外さなかつた。^(二九) けれど、^(三〇)

* ドン・ジュアン傳説に現れる騎士團長の石像。ドン・ジュアンの招きに應じて彼を訪れ、死を齎す。

ども毒を仰ぎはしなかつた、——もはや毒に犯されてゐたのである。彼の纏つてゐた皇帝の緋袍は、さながらニッソスの衣のやうであつた。ひたと彼の身に吸ひついて、骨まで焼き盡すのだ。彼は犠牲の焚火の上に昇るまでは、所詮それを脱ぎ棄てることは出来ない。太陽が落日の焚火の中で燃え盡すのと同じやうに、彼もその中で燃え切らなければならぬのだ。

「たゞこれが續いてくれたらねえ、これが續いてくれたらねえ！ Pourvu que ça dure, pour-
vous que ça dure!」と母ルチーチャは巫女のバルカのやうに、首を振りながら囁いたものである。「何もかも瓦解々々になるつてことは、はつきり知つてゐました^(四)」或は、息子もそれを知つてゐたのかも知れない。運命の聲を耳にして、恰も幼児が母の聲に引かれて行くやうに、従順しくその方へ向つて行つたのかも知れない。

彼は己れの時、——十二年の近いことを知つてゐたのである。

註

(一) マッソン、『離婚されたジョセフイヌ』、四六頁。(二) マッソン、『ナポレオンと女達』、二七一頁。(三) ロエドレー、一三—一四頁。(四) マッソン、『ナポレオンとその子供』、三〇九頁。

(五) コンスタン、第三卷二一五頁。(六) アブランデー、第三卷二一五頁。(七) コンスタン、第三卷二一五頁。(八) マクドナルド、二八四頁。(九) ロエドレー、三八三頁。(一〇) マッソン、『ナポレオンと女達』、二九五頁。(一一) 同上、三一四頁。(一二) 回想録、第四卷四〇頁。(一三) 同

上、第三卷一一八頁。(一四) フロア、一五一頁。(一五) レミューザ、第三卷五〇頁。(一六) 回想録、第三卷二四八頁。(一七) 同上、第三卷二五四頁。(一八) 同上、第三卷二五七頁。(一九) モザール、第三卷、四七〇頁。(二〇) フロア、一五一頁。(二一) メレジコーフスキイ、『ナポレオン論』、第三章『世界の王者』。(二二) プウリエンヌ、第四卷四〇七頁。(二三) フロア、一五二頁。(二四) ラクール・ゲイエー、三八三—三八四頁。(二五) レミューザ、第三卷六五頁。(二六) テイボオドー、二八六頁。(二七) ラクール・ゲイエー、三八七頁。(二八) J・ペルトー、一四〇頁。(二九) 回想録、第三卷二六九頁。(三〇) J・ペルトー、九五頁。(三一) プウリエンヌ、第四卷三三八頁。(三二) レミューザ、第一卷一二五頁。(三三) プウリエンヌ、第三卷三〇四頁。(三四) ラクール・ゲイエー、一七六頁。(三五) コンスタン、第一卷二八六頁。(三六) マッソン、『ナポレオンの成徳式』、五頁。(三七) レミューザ、第一卷三八三頁。(三八) マルモン、第五卷二頁。(三九) コンスタン、第三卷八〇頁。(四〇) シュケー、第一卷五〇頁。(四一) スタンダール、五頁。

四、モスクワ

一八一二年

「一八一一年の長い冬の夜、幾時間も幾時間もソファに身を横へたまゝ、彼は深いもの思ひに沈んでゐた。時々不意に躍り上つて、『誰だ僕を呼んでゐるのは？』と叫ぶ。それからまたもや部屋の中を歩き廻りながら、『いや、まだ早い、準備が出来てゐない。……三年ばかり先きへ延ばさなければならぬ。……』と呟くのであつた。』しかし結局延ばさないと云ふことを知つてゐた。そして彼を呼んでゐるのが宿命であることも承知してゐた。

「余は戦争を欲しなかつたし、アレクサンドルもこれを欲しなかつた。しかし余等二人は相會し、外部の事情は余等を互に衝突せしめ、かくして宿命が残餘のすべてを完成したのである。」

露西亞戦役は大陸封鎖、——佛蘭西と英吉利の一騎打から生じた不可避の結果である。「西歐羅巴の自然的堰堤とも云ふべき塊太利とプロシヤを崩壊せしめたナポレオンは、自然東方——露西亞とつたり直面することになつたのである。」

一八一〇年の秋、封鎖はその効力を示しはじめた。ロンドンの下町では相次いで破産騒ぎが起つた。英吉利の國內情勢は堪へ難き迄に立到つて、經濟界の危機は社會革命の脅威すら呼び起さんす

勢ひであつた。ナポレオンは既に目的が達せられようとしてゐるやうに思はれた。たゞ最後の打撃を加へさへすればよいのであつた。それはバルチック海の閉鎖である。——英吉利の貨物が歐羅巴へ流れ込むこの最後の隙間を塞ぐことであつた。「平和も戦争も一つに露西亞の手中にあり。」とナポレオンは云ひ、バルチック海上に於て英吉利船のみならず、英吉利の商品を積んだ中立國の船すらも拿捕するやうにと、アレクサンドルに提議した。「英吉利は曾て今日ほどの絶望的狀態に置かれたることなし。……彼が和を希望しつゝあることは吾々の確報を有するところなり。……もし露西亞にして佛蘭西に合流せんか、英吉利の輿論は『媾和』を要求し、英政府も和を乞ふの止むなきに到らん。」

けれどもアレクサンドルは一向に英吉利の敗北を希んではゐなかつた。「諸國民が一人の権力下に隷屬し盡す」のを防いでくれる最後の望みが英吉利にあることを、彼はちやんと見抜いてゐた。同時に、ナポレオンも、千二百艘の中立國船が露西亞の諸港で貨物の陸揚げしたのを聞いて、露西亞は決して佛蘭西に合流しないのを悟つた。

一八一一年の一月以來、アレクサンドルは密かに動員を開始して、二十四萬の兵力を西部國境に集中した。彼は無遠慮にナポレオンを欺いたのである。彼に向つて思ひがけない打撃を準備してゐたのに、もし波蘭さへ合意したらその打撃を加へたに相違ない。

しかしナポレオンはアレクサンドルの機先を制した。一八一一年の春、彼は當時として前後未

會有の軍隊を獨逸に集めた。——兵數六十七萬人、歐羅巴の戰鬥力の三分の二に相當し、しかも鐵の如き腕によつて規律を與へられ、教練せられ、一人の意志によつて自由に動かされる軍隊であつた。彼は一八一二年に露西亞を攻撃しようとして決心したのである。

「兵士等よ！」と彼は偉大なる軍隊に對する布告の中で云つてゐる。「戦争は開始されんとする。……露西亞は宿命に牽かれつゝある。彼の運命は成就されずにはゐられない。……いざネマン河を渡らう！」^(五)

やはりあの時、五年前のティルジットの時と同じやうに、

もの憂げに霞める正午は息づき

もの憂げに川は激みつ流れ

清くまた焰のごとき穹窿に

もの憂げに雲け溶けゆく。

むし熱き眠りけ小霧のごとく

あめ地をなべて抱きつゝめり……

やはりあの時と同じやうに砂洲の上には水蒸氣が立ち騰り、生暖い水と魚の匂が鼻を打ち、松林

からは草屑と樹脂を含んだ濃眉の香が漂つて来る。息ぐるしい。苦熱の中に雷鳴が響きまわつてゐる。

對岸はがらんとしてゐる。いつたい露西亞軍は何處にゐるのだ？ 黄昏の中を幾人かの斥候が河を泳ぎ渡つて、向岸に上つて行つた。コザツクの哨兵長をしてゐる露西亞將校が、森の中から騎馬で出て来て、「貴様達は何者だ？」と呶鳴つた。「佛蘭西兵だ。」「一體何の用があるのか？」「やい、こん畜生、知らないのか？ 戦争をしに來たんだ。ギリナを、波蘭を、露西亞を取りに來たんだ！」騎馬の將校は無言のまま馬首を轉して、森の中に逃げ去つた。三發の銃聲がその背後を追つて、銜がわアんと森の中でその響を繰返したが、やがてまた死のやうな靜寂があたりを領した。^(六)

軍は三つの縦隊となつて、三つの船橋づたひにネマンを渡つた。露西亞側はこの渡河を妨害しなかつた。一同はそれを喜んだが、たゞ皇帝ばかりは例外であつた。彼は河岸に立つて軍の行動を注視しながらも、何者かを待つものやうに、屢々はるかな彼方を振返つて見た。と、不意にひらりと馬に打ち跨つて、たゞ一人護衛もつれず、森の中へ驀地に飛び込んだ。一露里、二露里、三露里、彼は駛り續けたが、——人つ子ひとり出會さな。立ち停つて、邊りを見廻し、耳を澄ました。が靜寂と、空虚と、涯しない、眞に涯しない神祕、——露西亞である。「儂を呼んでゐるのは誰だ？」と叫んで、彼はネマン河の方へ取つて返した。

軍はリトワニヤ、——コヴノ、ギリナ、ギテプスクを経て露西亞に向つたが、途中どこにも敵の姿を見ず、次第々々に靜寂と無限の空虚の中に深入りしながら前進した。それけさながら深淵の中

へ落ちて行くやうであつた。水中に投ぜられた鍵が底へ底へと沈んで行くやうであつた。人々は恐怖の俘になつた。それは最早戦争ではなく、何とも知られぬ或るものであつた。人は人間もしくは自然と闘ふものである、けれども非物質的な感覺を絶したものの、——空間と、どうして戦ふことが出来よう？

苦熱の中に雷雨を孕んでゐたのも徒事ではなかつた。盆を覆したやうな夕立が襲つて、烙くばかりの苦熱の後に冷氣がやつて來た。——七月に十月が訪れたのである。一萬頭の馬が粗悪な糧秣と不意の冷氣のために斃死した。次第に腐つて行くその死骸は道端にころ／＼して、空氣を毒するものであつた。足も踏みこめないやうな泥濘が輻重を停止させた。軍隊内には饑餓が始まり、創傷熱と赤痢が猖獗をきはめた。人々は蠅のやうにころ／＼と死んで行つた。脱走するものも續々と現れた。が、それはほんの序幕に過ぎなかつた。まだリトワニヤも通過してゐなかつたのである。

「軍の狀況が恐るべきものだ」と云ふことも知つてゐる。」とナポレオンは云つた。「ギリナ以後、落伍者が半數に達したが、今では三分の二になつてゐる。空しく時を移してはならない。是が非でも媾和を撈ぎ取らなければならぬ。それはモスクワにあるのだ。それに、軍は最早停止することが出来ない。たゞ行動のみが軍を維持してゐるのだ。我軍を率ゐてなし得ることは前進あるのみで、停止したり退却したりすることは出来ない。これは攻撃のための軍であつて、防禦のための軍隊ではない。」

とは云へ、たとへ軍隊が停止することが出来たにせよ、彼自身それは出来なかつたに相違ない。空間は恐怖感を抱かせると共に、深淵のごとく牽きつけるのであつた。どうしても先へ先へと進まなければならぬ。深淵の中へ、無限の静寂の中へ、無限の神秘の中へ、露西亞の中へ入り込まなければならぬ。

七月二十三日はギテブスクである。皇帝は用意の間へ入つて、帽子を脱ぎ、それを露西亞地圖の載つてゐる卓子の上に置いて、かう云つた。「僕はこゝに滞在して待機しよう。よく情勢を見て、軍隊にも休息を與へ、波蘭も整理して、氣力を恢復しなければならぬ。一八一二年の役は終了した。一八一三年の役が残つた仕事を完成するのだ。」「一八一三年には我々はモスクワに入り、一八一四年にはベテルブルグに達するのだ。露西亞戦争は三年がかりだ。」

他人にはさう云ひながら、心の中では決して停止はしない、モスクワまで行つて深淵の底に觸れるのだ、と云ふことを知つてゐた。

八月十七日はスモレンスクである。市街は突撃によつて占據され、焼拂はれた。佛蘭西側では、古い聖母像のある、神聖なるモスクワ城門を露西亞が戦はずして渡すことはあるまいと考へてゐた。ところが渡したのである。たゞ聖母像だけは持ち去つた。

「スモレンスクを渡したからには、モスクワをも渡すであらう！」とナポレオンは狂憤に驅られて叫んだ。「臆病者、女の腐つたやつ、祖國を持たぬ人間ども。我々は素手で奴等を俘にしてや

る！」「ふむ、それならやつて見ろ、俘にして見るが……」と元帥達の氣むづかしげな顔は、言葉に出さないうで答へるのであつた。

會戰、遂に會戰！ 九月の五日、佛蘭西軍は露西亞軍に相見えた。モジャイスク街道に沿ふモスワへの近接地點を防禦し乍ら、露西亞側は要塞工事を施したボロチノ高地を占領したのである。偉大なる軍隊は武者ぶるひした。再び總指揮官の運命の星を信じた。これこそ勝つか亡びるか、一切を決する最初にして最後の闘ひであることを悟つたのである。

決戰の前夜、皇帝はよく睡れなかつた。風邪をひいて發熱し、咳と涙に悩まされたのである。秋の晝夜平分の頃ほひ、——晝が夜に向ひ、太陽が冬に向ふ一年の轉廻期には、彼はいつも氣分が勝れなかつた、恰も太陽とともに病み衰へるかのやうに。

彼は絶えず眼をさまして、いま何時かと訊ね、露西亞軍が撤退してはゐぬかと聞きにやつた。熱に浮かされて、露西亞軍撤退の夢ばかり見てゐたのである。

朝の五時、ネイ元帥は依然として敵軍を眼前に認め、攻撃開始の許可を乞うてゐるとの報告を聞いて、皇帝は起上つて、元氣をつけようとしてもするやうに身慄ひ一つし、「到頭やつらま引つ捕へることが出来た！ さあ行つてモスクワの扉を開けよう！」と云つた。⁽¹⁰⁾

彼は昨日占領したシェヴルヂノの角面堡に赴いた。太陽が差し昇るのを待つて、その方を指しな

から叫んだ。「あれはアリスアルリツクの大砲だ！——それこそその砲が如何にも撃つた……」

たので、寧ろ初めからそんな事を云はない方がましな位であつた。

然り、太陽も彼に反して差し昇つたのである。露西亞軍から射して來る日光は佛蘭西兵に目つづしを食はせ、彼等を敵の打撃に曝したのである。⁽¹¹⁾

戰闘は始まつた。「余の行つた數々の戰闘の中これこそ最も血腥いものであつた。」とナポレオンは後にさう云つてゐる。單に佛蘭西軍と露西亞軍のみならず、恐らく一般に凡ての人間があれ程向う見ずに、又あれ程相伯仲した勇敢ぶりをもつて戦つたことは、曾てこれまでなかつたであらう。

何故ならば、兩軍ともその價値に於て相等的な聖物のために戦つたからである。——佛蘭西は世界と「人間」のために、露西亞は祖國と、それから自分でもはつきり知らないながら、何かしら更に大きなもののために戦つたからである。彼等は「基督のために反逆者と戦ふのだ」と考へてゐた。

生れて初めてナポレオンは戰闘に参加しなかつた。彼が終日を過したシェヴルヂノの角面堡は、佛蘭西軍の背後にあつた。丘陵に遮られた戰場はそこからよく見えなかつた。皇帝は行軍用の疊み椅子に腰を下したり、角面堡上の狭い平地を行つたり來たりしてゐた。石のやうな倦怠が、——「嗜眠病的な表情」がその顔に現れてゐた。戰闘に渴してゐながら、それが愈々はじまると、ろくに見もしなければ報告を聞かうともしないのであつた。勇敢な將士の戰死を聞いても、たゞもの憂げに手を振るばかりであつた。まるで何かほかのことを考へてゐるかのやうに、ほかのことに氣を取ら

れてゐるかのやうに。それは果して何であらう？ それともたゞ病氣のせめだらうか。「僕は自分の體をいつも自分の思ふ通りにして来た。」^(一三)しかし今はどうする事も出来なかつた。世界を征服しようとした彼が、鼻風邪すら征服しなかつたのである。背中を圓くし首を垂れたまゝ、じつと坐つて、咳をし、嘔をし、涙をかんでゐるのであつた。稍々むくみを帯びた、白い、女じみた彼の顔は、「マリイ・ルイズの年老つた女家庭教師」を想はせた。恐らく神人ともに、「人間」である彼がこのやうな瞬間に、「濡れしよぼけた牡雞」のやうに意氣地なくしよんぼりしてゐるのを、救すことが出来なかつたに相違ない。しかし或は、彼は救してなど貰ひたくなかつたのかも知れない。――何も要らない、世界も最早征服したくない、こんな事に大騒ぎして骨を折る値打はない、と云ふことを悟つたのであらう。「三十の年までは勝利が光榮によつて目眩ませ、戦の恐怖を飾つてくれるかも知れない、がそれから後は……」^(一四)「戦争があれば程余に忌はしく思はれたことは言てない！」である。

征服することが出来たのに、それを欲しなかつた。飽満した男が情婦を押しつけるやうに、勝利を押しつけたのである。これは戦の女神の断じて救さないとあるところである。

ミュラーの騎兵突撃によつて、クトゥゾフの左翼は覆へされた。セミヨーノフスクの高地はラトル・モプールの騎兵隊に占領された。勝利への道は拓かれたのである。しかし疲憊したネイ、ミュラー元帥が増援を請求しても、皇帝は遠慮して、興へるとも興へないとも決して言はれるのであつた。

露西亞軍はその機に乗じた。バグラチオンは突破された線を立て直して、今や既に問題は勝利を完成することではなく、これを確保すると云ふことになつて来た。元帥達は再び増援を乞うた、哀願した。皇帝は近衛に出動を命じたが、出動を開始するや否や、中止を命じた。「いや、もう少し見てみよう……」^(一五)

正午近く、佛蘭西軍の右翼は露西亞軍に深く食ひ入つて、露呈された敵の内部が残りなく見られる程になつた。敗走兵、負傷者、輜重の車など、モジャイスク街道にまで達する背面が全部見渡された。たゞ濠と伐採後の森が佛蘭西軍を隔ててゐるのみであつた。敵を突破して戦鬪の運命を、恐らく全戦役の運命を決するためには、最後の一撃が必要であつた。「近衛を！ 近衛を！」と元帥達は哀願し要求した。「たゞ遠方から姿を見せて貰つただけでも、我々は獨力で一切を片づけてしまひます！」^(一六)「いや、僕はまだ将棋盤の上が充分はつきり見えないのだ。……もし明日新しい戦鬪が始まつたら、僕の手もとは一體何が残るのだ？」と皇帝は答へた。^(一七)

「皇帝はまるで人が違はれたやうだ！」とミュラーは憂愁を懐きながら嘆息した。「一體あの人は後方で何をしてゐるのだ？」とネイはかん／＼に怒つて呶鳴つた。「もしあの人が將軍でなく皇帝でゐたいのなら、チュウエリーの宮殿へ歸るがよい、我々があの人の代りに戦争するから！」^(一八)

遂にナポレオンが近衛を與へた時には、時すでに遅かつた。露西亞軍は佛蘭西軍にたゞ戦場のみを残して、完全な秩序を保ちながら退却した。そこには死せる勝利者の方が生けるそれよりも多い

と思はれる程であつた。

「モスクワ！ モスクワ！」九月十四日午後二時、モジャイスク平野の端に金色の四頂閣を見た時、兵士等はいかう叫んで、喜びのあまり両手を拍つた。一同は忽然として戦争の痛苦を悉く忘れ果てた。「平和はモスクワに」と皇帝が約束したのである。

もしかしたら、彼等は自分でも説明することの出来ない、より大きな何ものかに歡喜したのかも知れない。モスクワを経て道は東方に通じてゐる。そこは曾て神がアダムのために己れの苑を、樂園をつくつた所である。ところが今や新しきアダムが、「人間」が、彼等を新しき樂園へ——自由と平等と同胞愛の王國へ導いて行くのだ。ファヴォールからジブラルタルまで、ピラミツドからモスクワまで、——これこそ地上に於けるナポレオンの十字架であり、默示録的表象なのである。

「世紀の目的は達せられた、革命は成就した。」と彼はセント・ヘレナで當時の自分の空想を追憶しながら述べてゐる。「余は舊約及び新約の方船（二八）となつた。兩者の間の自然な仲介者となつたのである。」「恐らくかつてこの世に存した野心の中で最も大きく最も深いものであつた余の野心は、ほかでもない、理性の王國を樹立することであつた。——人間の力の完全なる發顯と完全なる勝利を拵（一九）ぎなきものとするのであつた。」「その時は、力と、光榮と、幸福と、安寧との、如何に廣大なる視野が展（二〇）げたことであらう！」これぞ即ち、「モスクワを経て樂園へ！」なのである。

「やうとの事だ！」ポクロンナヤの丘から足下に横がるモスクワを眺めながら、彼は恐ろしい夢から醒めたやうに叫んだ。

彼はすぐにも媾和談判を開始するつもりで使節を待つてゐたが、突然モスクワが空虚になつてゐることを知つたのである。彼は信じ兼ねて、何時までも待つてゐた。漸く夜に入る頃モスクワへ乗込んだが、再び恐ろしい眠りに落ちて行くかのやうであつた。夥しい人口を有しながら不意にがらんとした大都市の空虚感、死に絶えたやうな街並、寂として聲のない家は、如何なる恐ろしい砂漠よりも物凄かつた。空虚、無限の静寂、——無限の神祕、露西亞、——運命。

その夜たゞちに、彼はモスクワが焼けてゐることを知つた。火事は五日間つゞいた。佛蘭西兵は消火につとめたが、消しとめることは出来なかつた。消してもすぐ四方八方から自然に燃え始めるのであつた。そのために態々牢獄から出された露西亞の泥棒や強盜が、火を放けて廻るのであつた。「荒れ狂ふ焰の中を彷徨ふ悪魔のやうな相好をした人間ども、——正真正銘の地獄だ。」と目撃者は語つてゐる。「何といふ連中だ、何といふ連中だ！ あれはスキチャヤ人だ！」とナポレオンぞつとしながら囁くのであつた。

晴れて乾いた日々が続いた。烈しい北東の風。市街は教會と宮殿を除くほか殆どすべて木造建なのである。——荒れ狂ふ焰の海。「それは僕の見た限りで最も莊麗な、しかも恐ろしい光景であつた。」とナポレオンは追想してゐる。

かくして露西亞は自己焼却をもつて彼に答へたのである。

幾時間も幾時間も、クレムリン宮殿の窓から火事を眺めながら、彼は自分の全生涯が、——勝利も、光榮も、偉大も、悉く煙と焰の渦巻の中に消えて行くのをまざまざと見た。彼は露西亞を羨んでゐたのであらうか？「我が世紀を照らすために燃焼すること」と云ふ己れ自身の火の誘惑を想起したのであらうか？

クレムリンは焰に包圍された。皇帝が窓から火事を眺めてゐると、硝子はその額を焼くほど熱は烈しかった。

彼はクレムリンを逃げ出して、「火の空のもと、火の壁の間を、火の上を踏みながら、」辛うじて身を道れた。^(二三)

ベトロフスコエ・ラズーモフスコエで、モスクワが焼け切るまで待つた後、その焼跡へ歸つて行つた。彼はなすところを知らなかつた。ペテルブルグへ進撃しようと思ふと、モスクワに冬營することに決めても見た。卷狩に遭つた野獸のやうに跳き廻けた末、遂にアレクサンドルに使節を送つた。「僕は媾和を欲するのだ。」と彼は使節に云つた。「僕は是が非でも媾和が必要なのだ。たゞ體面だけ保つやうにしろ。」^(二四)

アレクサンドルは答へなかつた。媾和は望みがなかつた。

十月十三日、きびしい露西亞の冬を豫告する初雪が降つた、——火の地獄の後に氷の地獄がやつて来るのだ。

十九日、偉大なる軍隊——否、今ではもう偉大どころか弱小軍隊で、最初の分隊の一にもなつてなかつた——はモスクワを出發し、カルーガ街道に沿つて退却を始めた。

二十八日に極寒が襲つた。十一月の八日にはギャージマへ向ふ途上で、恐ろしい吹雪が佛蘭西軍を見舞つて、露西亞の冬を知らない人々には、誰も彼もこれがこの世の見納めかと思はれる程であつた。眞黒な空が白い地上に崩れ落ちて、何もかもが物狂ほしい眞白な混沌の中に入り交り、渦巻くのであつた。人々は風のために息づまり、雪に目つぶしを食ひ、寒さにかぢかみ、躓いては倒れた。そして二度と再び起き上らなかつた。吹雪はその上に堆高くつもつて、墓場の土饅頭のやうになつた。軍の進んで行く道はずつと何處までも涯のない墓地のやうに、かうした土饅頭の連続であつた。

殊に彼等の膽を冷したのは長い冬の夜であつた。零下十二度の曠野の中の露營で、人々はどうしたら身を切るやうな氷の風を防いだらいいか分らなかつた。心細いところ火で斃馬の肉を焼いたり、雪を溶かして一握りの腐りかゝつた麥粉でスープをつくつたりして、すぐそのまゝじかに雪の上で寝た。やがて朝になると、剛直した多くの死骸と邊りの野に散在する斃馬が、夜營の名残をとどめるのであつた。

しかしそれでも、コサツクや農民達の手に落ちるよりは、凍死する方がまだしもであつた。パルチザン達はいきなり直ぐ殺してしまはないで、長いこと慰みものにして苦しめたり、雪の上へ素裸

で抛り出したりした。もし捕虜があまり多過ぎると、家畜のやうに槍で追ひ立てて行つた。恐らく更に新しい、より惨酷な苦痛の待つてゐるところへ。

モスクワを出た時には十萬人あつた佛蘭西軍が、三週間の後には僅か三萬六千人になつてしまつた。それさへも生ける屍であり、色さまざまな襤褸を纏つた、滑稽な、しかも恐ろしい、虱だらけの寒山子であつた。——官吏の燕尾服を着てゐるものがあるかと思へば、僧侶の法衣を纏つてゐるものもあり、婦人上着を引つけてゐるものもあれば、女の室内帽を被つてゐるものもあつた。上官も部下もなかつた。不幸が彼等を平等にしたのである。餓えた犬の群が彼等の跡について行つた。黒雲のやうな鴉の大群が、獸の死骸でもあるかのやうに彼等の頭上を舞つてゐた。

しかし勿論、すべてがそんな風ではなかつた。まだ近衛隊があつた。髭武者の古い選抜兵は相變らずかぢかんだ手で捧げ銃をし、チュリエリイ宮殿の觀兵式の時と同じやうに、「皇帝陛下萬歳！」と、弱々しい聲で叫んでゐた。彼等は子孫が到底信することも出来ないやうな奇蹟をなし遂げた、またこの後ともなし遂げるのである。

ネイ元帥は七萬對二千の兵をもつて、スモレンスクに向ふ退却を掩護しながら、十日間つゞけて奮戦し、しかも勝利を博したのである。昔に佛蘭西のみならず、全世界がこの聖なるヒロイズムを忘れはしないであらう。

ところでナポレオンはどうか？ 依然として「潰れしよにげた地獄」であつたらうか？ 否、そ

ながらこの最後の没落を待つてゐたかやうに、彼のあらゆる勝利よりも更に偉なる光榮を以てして、この没落から立ち上つたのである。

彼の顔は死の如く蒼褪めた雪のやうに、蒼然として死人のやうであつた。けれども地獄へ降つたデオニソスの顔に似て、奇しくも恐ろしかつた。地獄の中にゐた人々はその顔を見ると、この人こそ自分達を救つてくれる人だ、地獄から天國へ連れて行つてくれる人だ、といふ希望を再び抱き始めるのであつた。

「お前、さぞ寒いだらうな？」と彼は零下二十度の寒氣の中を、自分と肩を並べて進む老選抜兵にかう訊ねた。「いゝえ、陛下、あなた様のお顔を拜みますと、わたくしは暖くなつて参ります！」
氷の地獄の中で太陽を見たやうに暖いのである。

人々は依然彼を信じてゐた。もし信じてゐなかつたら、雪の中を彼等と並んで鞭を手に進んでゐる時、百度も千度も彼を殺さない筈がないではないか。ところが殺すどころか、彼のために死んで行つたのである。無神者の革命黨員達が、「今にあの方と一緒に天國へ行くのだ」と信じてゐた。或は彼自身も、地獄を潜つて彼等を天國へ導いてゐるものと、やはり信じてゐたのかも知れない。このやうな時に信じると云ふことは、これこそ即ち彼が「人間」であることを意味するのだ。

この地獄の焦點はベレージナ河であつた。すべての正教徒達を喜ばすために、こゝで「反基督の犬」を片づけて了はうと、クトゥゾフは東から、ギットゲンシュタインは北からチチャゴフは南か

し、こゝへ彼を壓迫して、兎のやうに追立て、狩り立てるのであつた。

彼は知つてゐた。——自分のためにはペレージナはマツクのためのウルムであり、陥井であり、カウヂン峡谷であり、最後の汚辱であり、降伏であることを知つてゐた。知つてゐながらも、依然それに向つて進んで行つた。最早行くべきところがないからである。何よりも不可なのは、彼自身に罪があつたことである。モスクワへ進撃する時、氣狂ひじみる程戦捷を信じ切つてゐたので、オルシャで架橋材料をすつかり焼いてしまつて、今は渡河の方法がないのであつた。丁度わざと狙つたやうに雪溶けが始まつて、河の結氷が割れ、氷が流れ出したのである。

十一月二十五日、ナポレオンはペレージナに着いた。そこには早くもチチャゴフが、ボリーソヴオ附近で彼を待受けてゐた。ゴットゲンシュクインは今にもクトゥゾフと合して、釘抜の兩顎のやうに彼を挟撃せんとしてゐるのであつた。

「その時の状況は、一人の佛蘭西兵も、ナポレオン自身ですら、所詮遁れ得まいと思はれるほどであつた。」とラップ將軍は追想してゐる。「我軍の状況は絶望的であつた。」とネイ元帥も云つてゐる。「もしナポレオンがこれを脱出したら、それはほかならぬ悪魔の助けによるものである！」
「私はこゝから數里離れた所で彼を渡河させ、頼もしい波蘭兵を附けてギリナへ送り届け、彼一人を救はうと提議した。」とミュラーは云つてゐる。「しかし、彼はそれに耳を傾けようとしなかつた。『僕の勇へては、我々は生きてこゝを立退くことは出来ぬ。……我々一同こゝで命を盡して』

のだ。降伏などするわけには行かない。」

ペレージナの前日は恐るべき式典の日であつた。皇帝は全軍の軍旗を集めて焚火をつくらせ、旗が敵の手中に渡らないために、悉く火中に投じさせた。「人々は後から後からと列を離れて、彼等にとつて生命より貴いものを焰の中へ投げ入れた。私はあれ以上の恥辱と絶望をついぞ見たことがない。それは軍全體が呪咀嘲弄されるかのやうであつた。」^(二七)これらの聖なる旗の魂はファヴールからジブラルタルまで、ピラミッドからモスクワまで、全地上を飛び翔つたものである。それが今は焼かれて、焰と共に天へ飛び去つて行くのだ。

皇帝の蒼褪めた顔は死せる雪のやうに血の氣がなかつたが、しかし敵を征服したもののやうに悦ばしけであつた。モスクワの自己焼却は軍旗の自己焼却なのである。

軍の魂である旗を焼く以上、もはや救ひのないことを自らも知つてゐれば、他をも欺かなくては譯である。彼はそのことを二二ヶ四ほど確實に知つてゐたが、それでも矢張り奇蹟を信じてゐたのである。そして常に人間の生涯、すべての人間の生涯にあることだが、——信仰あるところ奇蹟ありである。

チチャゴフはボリーソヴオを撤退して、對岸は空虚になつた。渡河は自由なのである。人々は我とわが眼を信ずることが出来なかつた。「そんな筈がない！ そんな筈がない！」とナポレオンは呟いた。その蒼い顔は更に蒼白になつて行つた。「では、またあれが差し身つたのだ、僕の星が！」

と彼は天を仰ぎながら云つた。^(二八)運命の星は最後まで彼を見棄てはしない。が、彼の考へたのとは異つた道へと導いたのである。

ポリソヴォから河上十二露里の地點にあるストウヂョンカの渡渉點は、もしチチャゴフが守つてゐなければ、佛蘭西軍にとつて唯一の可能な渡渉河點であつた。ウディノ元帥は河下四十露里、ポリソヴォの南方に當るウコログの徒渉點へ、陽動のために派遣された。チチャゴフを欺いて、ストウヂョンカから離れさせるために、このウコログで架橋工事をしてゐるやうに見せかけたのである。ナポレオンはこの策の成功を殆ど期待してゐなかつた。このやうな見え透いた偽りを信じるには、チチャゴフが發狂でもしなければならぬ譯である。ところが、意外にも信じたのである。鳥が蛇の凝視に遭つたやうに、デモンの魅はしの視線を受けて氣が狂つたのである。數學的正確をもつて、一時一分も違へず敵の計畫を實行したのであつた。「兩者は同時にポリソヴォを出た。チチャゴフはウコログへ、ナポレオンはストウヂョンカへ」^(二九)

こゝで、二十六日の朝、佛蘭西軍は二つの橋を架け始めた。一つのやゝ廣い方は砲兵、輜重、騎兵のため、もう一つの狭い方は歩兵用であつた。農家を取り毀した丸太や板は杖や橋板に、古い砲車の轍を壊したものは釘や鏝になつた。

人々は泥つばい河底に杖を打込みながら、氷のやうな水に腰まで浸して、六時間も七時間も立つてゐた。その上、水流と風に運ばれて来る大きな氷塊を手で押しつけなければならなかつた。巧く

橋を見て押しつけなかつたものは、自分が氷塊に運ばれて溺死するのだから、^(三〇)長男の助けになつた顔は、見るのも恐しいやうであつた。その場で噎れて死ぬものも多かつた。しかも喉を取るために一滴のヲートカもなく、休憩のためのベットは雪なのであつた。血を戰場で流す代りに、血管の中で空しく凍らせるばかりであつたが、しかしこれらの無名の人々こそ、華々しい名を轟はれた人の多數に優つてゐるかも知れないのだ。

十一月二十七日が近づいた日、二つの橋は出來上つた。ナポレオンは近衛隊とネイの軍團と共にそれを渡つた。主な仕事はなし遂げられた。皇帝が、——帝國が、——偉大なる軍隊が救はれたのである。

二十八日、遂にチチャゴフは我に返つて、ストウヂョンカへ取つて返した。ギットゲンシュタインとクトウソフも強行軍で彼の援助に赴いてゐた。彼等は何時ストウヂョンカへ現れるかも知れなかつた。渡河を急がなければならなかつた。けれども急場の間に合せて作られた砲兵用の橋は、軍隊や重砲の大移動を支へるだけの力がなく、やがて壊れてしまつた。一同はもう一つの歩兵用の橋へと争つて行つたが、それは大小の行李、夥しい落伍者、負傷兵、病人、女、子供、老人など、——ありとあらゆるモスクワの避難民で身動きもつかない程になつてゐた。砲兵はその間を縫つて進まなければならなかつたのである。

その時、河の兩岸から砲の一斉射撃が轟いた。と、橋上の群集の間に、「チチャゴフ！ ギット

ゲンシュタイン！」と云ふ聲が流れた。砲弾は頭上を唸つて、群集の中へ落下しはじめた。恐怖に襲はれた人々は、互に押し合ひ、踏みつけ、水の中へ投げ込み合つた。兵士等は、銃剣と刀をもつて群集の間に道を開いた。窒息した人の死骸は倒れもせず、まるで生きたもののやうに群集に押されて行つた。

人々は野獣に化した。けれどもその時、さながら夜空の星のやうに、自己犠牲の勇氣が火花のやうに爛いたのである。男達は女に、大人は子供に道を譲り、自ら死の運命を擔つたものが、滅びんとする人を救つた。野獣のやうな顔をした一人の砲手は、刀で群集を押し分けてゐたが、ふと水の中に幼児を抱いて溺れんとしてゐる母親を見つけると、群集に踏みつぶされる懼れがあるのも構はず身を屈めて、幼児を掴んで助け上げ、母親のやうな優しさで自分の胸へひしと抱きしめた。^(三二)大砲は人間の上を通つて行つた。氷塊は水の中で打突かりあつてめき／＼と鳴り、骨は血潮の中で軋み合つた。人々は片手で橋板の縁に掴まつて、水の上に宙にぶら下つてゐるが、忽ち車の轍に手を轢き潰されると、その時水中へ落ちて行つた。

人間のものとも思はれぬやうな叫喚、呻吟、呪咀の聲が聞えた。そして遠く遙かに、「皇帝萬歳！」といふ叫びが、救世主に對する地獄の亡者の哀號かとばかりに。

ミンスタの知事はその年の春、二萬四千の死骸をストウチョンカに集めて茶毘に附した。ペレージナは教師は十年を経て、佛蘭西兵の骨が泥土で埋められて小さな島や丘を形作り、その上に忘

れた者が生きてゐるのを発見したと云ふ^(三三)。この茶のやうに白い花は、さながらやうなやつであつた。「人間達よ、こゝで滅びた人々のことを忘れてはいけない。「人間」に従ひながら地獄を潜つて天国へと進んで行つた人々のことを忘れてはいけない。彼等にも又彼にも永遠の思ひ出と久遠の榮あれかし！」

註

- (一) セギニール、第四卷八七頁。(二) 回想録、第四卷一五八頁。(三) セギニール、第四卷八頁。
(四) ヴンデル、『ナポレオンとアレクサンドル』、第一卷四九二頁。(五) セギニール、第四卷一三一頁。(六) 同上、第四卷一三八頁。(七) 同上、第四卷二八一頁。(八) 同上、第四卷二〇五、二一二頁。(九) 同上、第四卷二七一頁。(一〇) 同上、第四卷三七三頁。(一一) 同上、第四卷三七四頁。
(一二) アントマルキ、第一卷二一六頁。(一三) セギニール、第三卷四三頁。(一四) 同上、第四卷三八一頁。(一五) 同上、第四卷三八五、三八七頁。(一六) 同上、第四卷三九九頁。(一七) 同上、第四卷三八六頁。(一八) 回想録、第三卷二七九頁。(一九) 同上、第二卷二四五頁。(二〇) 同上、第四卷一五三頁。(二一) 同上、第五卷三二頁。(二二) オメアラ、第一卷一八一頁。(二三) 同上、第五卷五一頁。(二四) 同上、第五卷七五頁。(二五) ラクテール・ゲイヤー、二〇七頁。(二六) ラック、追想記(ガルニエ版)二六〇—二六一頁。(二七) コンヌタン、第三卷四四〇頁。(二八) セギニール、第五卷三二二頁。(二九) 同上、第五卷三二四頁。(三〇) マルボー、第四卷九二頁。——コンヌタン、第三卷四四四頁。(三一) セギニール、第五卷三四三頁。(三二) フウルニエー、第三卷一三

第五篇 落日

〇頁。

一、ライブチッヒ

一八一三年

晝も夜も驟遅馬車を驅つて遮二無二飛ばして行く、この蒼白な顔をした男は何者であらう？ 毛皮外套に身を包んで、帽子を眼深に被り、棧や馬車の隅に隠れて、外を覗くのをさへ恐る恐るである。危険な書類をもつた経験の浅い急使か、臆病な軍の間諜か、「偉大なる軍隊」の脱走兵か、皇帝の裏切者か？ 否、彼自身なのである。

十二月六日に入らうとする夜半、ベレージナ後方の部落スモルゴニを出發すると、ギリナ、ブルシャワ、ドレスデン、マインツと——全歐羅巴を十二日間に駆け抜けて、十八日を迎へようといふ夜半にチエリエリイ宮殿の人となつた。

彼はゆつくりゆつくりと宮殿の階段を昇つて行つた。誰かの顔が眼の中にちら／＼する。あの時ベレージナで、零下二十度の寒氣の中で、「お前、寒いだらうな？」と訊ねた時、「いえ、陛下、あなた様のお顔を拜んでをりますと、暖くなつて参ります！」と答へたあの老選抜兵の顔ではあるまいか。氷地獄の中で太陽に會つたやうに暖い。けれども太陽は去つた。そして選抜兵は凍え死んでしまつた。暖いまま全軍が凍死してゐるに相違ない。皇帝は自分の手で軍隊を氷の塊から引き

出さうとしたのだが、取り落して逃げ出した、地獄の中に見棄てたのである。軍を棄てるか佛蘭西を見棄てるか、あの埃及の時のやうに、肚を決めなければならなかつた。が、直ぐに決意してしまつた。——佛蘭西のために軍を棄てたのである。運命の聲を耳にして、母の聲を聞きつけた子供のやうにその方へ向つたのである。

「陛下の御健勝は會てなき程勝れさせ給ふ。」と、彼の到着二日前に届いた軍報第二十九號にかう書いてあつた。それにはベレージナ事件が報じられてゐるのだ。それを讀んだ佛蘭西の全國民は愕然としたのである。「遺族の人々、涙を干し給へ。皇帝は健在に渡らせ給ふ！」とシャトーブリアンは苦い嘲笑を洩らした。彼は果して何を嘲笑したのか？「余は健勝息災である」と皇帝は云はざるを得なかつた。何故なら、大膽な陰謀者マレー將軍の放つた皇帝死すとの風説を聞いたのみで、危くボナバルト皇朝の廢黜騒ぎが起りかけた程だからである。それはモスクワ炎上の直後であつたが、ベレージナの災厄を聞いた後にはどんな事が持ち上るか知れなかつた。

「巴里歸還後、彼は極めて快活であつた。」と皇帝の侍従コンスタンは追想してゐる。「露西亞戰の開始當時と些かの變りもなく、依然晴々とした顔つきで、過ぎ去つたことはまるで存在しないかのやうであつた。」

その冬は、何時もと同じやうに過した。餘りに潔癖なマリイ・ルイズによつて手巾で拭き取られる接吻、漸く生え初めた幼い羅馬王の齒、國會の議事、外國公使の謁見、終夜を徹しての仕事、フ

ロールの離家に燿く花房のやうな舞踏會の灯火、フォンテンブローの森に響き渡る狩の角笛——何もかも常の如くである。恐ろしい夢、——モスクワ、ペレージナ、——が睡りを訪れる、が醒めると、夢を見たことも忘れて了ふ。「どうやら自然そのものが余を偉大なる不幸のために創つたらしい。余の魂はその下積みになつた大理石のやうである。稲妻もこれを砕くことが出来ないで、たゞその上を滑つたばかりである。」^(三)「余は巖の上に基礎を置かれてゐる。」^(四)

しかし彼の足下では巖も震動する。ブリニツヘルの豫言した「爆發」は獨逸で起つたのである。一八一三年二月二十八日、プロシヤ王フリードリッヒ・ウィルヘルム三世は、露西亞皇帝アレクサンドル一世とのカリシニ條約に副印した。プロシヤは一八〇六年の國境線をもつて復興され、アレクサンドルは獨逸が佛蘭西の桎梏を脱するまでは武器を斂めない、と云ふのであつた。

プロシヤは佛蘭西に戦ひを宣した。この新しい聯合には瑞典も加はつたが、この國の王位繼承者ほもと佛蘭西の元帥であつたポンテコルヴォ侯ベルナドットだつたのである。

北には露西亞、プロシヤ、瑞典、南には西班牙、ポルトガル、西には英吉利、東には既に勳搖を示し始めた奧太利、——歐羅巴全體が活火山の狀を呈して來たのである。

四月五日、佛蘭西に新しく十八萬人の徵兵が公表された。「それは極めて迅速容易に行はれ、軍隊が自づと地中から湧き出ると思はれる程であつた。」^(五)

十四日、皇帝はマリイ・ルイズに攝政を委任して、巴黎からマインツへ向つた。兵力十萬の軍隊

はザアム河左岸に集結して、東方ライプツィヒに向つた。

五月二日、リニツェンで露西亞プロシヤ聯合軍に對して電撃的な勝利を博した。二十日にはパウツェンで第二の勝利を獲得した。同盟軍は算を亂してシレジャに退却した。ペレージナで葬られた偉大なる軍隊が又こゝに蘇つたのである。聯合諸國は愕然とした。

六月四日、ブレギツツ休戦條約が副印された。メツテルニツヒは同盟諸國のブラীগ會議をナポレオンに提議した。しかし二十六日、ドレスデンで八時間に互る會見をしながら、彼は巧妙な醫師のやうに、奇蹟的に蘇つた男を打診し聽診した末に、「これは一切を終つた人間だ！ C'est fait Defini!」と宣告した。^(六)「ポナバルトは惡漢だ。やつを殺してしまはなければならぬ。やつが生きてゐる間は、世界の鞭となるだらう！」と、——ベルチェ元帥の言葉を藉りると「ポンテコルヴォの惡黨」であるベルナドットが、聯合諸國の意見、「歐羅巴の輿論」を表明してかう云つた。^(七)「あの毒蛇を殺すのだ、踏みつぶすのだ。蛇の頭をなくして了ふのだ！」とアレクサンドルは神祕的な惡夢に魔されながら諸言を云つた。

「余の主なる誤謬は、敵を事實以上に聰明なものと信じた點にある。余は自分が歐羅巴にとつて必要な存在であることを知つてゐたが故に、彼等も同様にこれを承知し、余を撲滅することを欲しないであらうと思惟してゐた。」とナポレオンはセント・ヘレナで云つてゐる。^(八)

聯合諸國はブラীগ會議を單に手段として利用した。奧太利を同盟に引入れるために、時を移さ

せようと云ふのであつた。彼等は佛蘭西に自然の境界、——ピレネイ、アルプス、ラインへ還るやうに提議した。しかしナポレオンがそれに答へるよりも先に、會議は終了を宣告され、奥太利は假面をかなくなり突つて同盟軍に参加した。

休戦は終り、戦は繼續された。八月二十六日——二十七日、ナポレオンはドレスデンで勝利を博した。——「運命の最後の微笑である。この時以來、前後未曾有の宿命的な偶然の絶えざる連續が始まるのである。」「余の苦悶は、余が終末を豫見したことに存する。」と彼は回想してゐる。「余の星は光芒を失つた。手綱は余の手から滑り落ちて、余は何事をもなすことが出来なかつた。」⁽¹⁰⁾一切を見、聞き、かつ知りながら、假死的な睡りに落ちた人のやうに我に返ることが出来ないのであつた。

ドレスデンの戦捷後、彼は露西亞プロシヤ軍を殲滅することが出来たのである。既に追撃にかゝつたが、突然發病した。人々は毒を盛られたのだと思つた。彼はやむなくドレスデンへ引返した。休んだのはたつた一日だけであつたが、そのためにすべての戦果を失つた。漸く頭をめぐらして見ると、彼の元帥や將軍達は敗戦を喫してゐるのであつた。ブリュッヘルはシレジヤで、ベルナドットはプロシヤで佛蘭西軍を撃破するし、ヴンダム將軍はチェツコのクルム附近で破れた。ウエストフアリヤが背き、バワリヤが蜂起した。ギユルテンベルグ王はナポレオンに警戒して、全ライン聯邦は彼を見棄てるに相違ないから、一刻も早くマインツの後方へ退くやうにと勧めた。聯合軍は物

凄い半圓を作りたが、彼等は包圍した。彼はライプツィヒに向つて退却した。こゝで同盟軍は彼に追つて來たので、彼は戦闘に應じなければならなかつた。

十月十六日、戦闘第一日は勝負が決し難かつた。六たび攻撃を退けられた後、敵は佛蘭西軍に漸く戰場を遺したのみであつた。

十七日、ベニグセンの率ゐる露西亞軍は、シュワルツェンベルクの奥太利軍と會した。ベルナドットの指揮する北軍も戦闘線に入つて來た。物凄く半圓はその兩端を合して、必殺の良をつくつた。ナポレオンは休戦を乞うた。寧ろそのやうな提議をしなければよかつたのである。——ただ己れの弱點を曝露したに過ぎない。同盟軍はそれに對して答へすらもしなかつた。翌日は決戦なのである。

決戦は朝の八時に始まつた。午後三時頃、普近衛師團の第三回の攻撃の後、奥太利軍に動搖の色が見えた、——やがて今勝利が得られるのだ。突如、佛蘭西軍の中央部で、何かしら異様な事が生じた。人々は初め何事か合點することが出来なかつた。十二萬人から成るサクソン歩兵隊の一箇軍團が、それに續いてギユルテンベルグの騎兵隊が、まっしぐらに前方の敵線さして突進するではないか。初め突撃かと思つたが、否、彼等は停止して佛蘭西軍の方へ向き直り、佛蘭西の砲をもつて味方を砲撃し始めたのである。「卑怯な裏切者めら！」とこの決戦に参加したマルボー將軍は憤慨してゐる。⁽¹¹⁾しかし何故「卑怯」なのであらう？ 彼等はナポレオン、ロベスピエールの例に倣つて、

「全世界的」になることを欲せず、獨逸人であることを望んだのであらう。仲間が仲間合したものである。小さな水銀の玉が大きな玉と一つになつたに過ぎない。——これは卑怯ではなくて物理である。國民の肉と血が全世界性の幻影に抗して、ために幻影が消えたのである。

佛蘭西軍の中央には恐るべき空虚が生じた。それは丁度心臟を抜き取られたかのやうであつた。しかし列は更に緊密に閉ぢ合され、戦闘は夜に入るまで續けられた。

夜に入つても、兩軍は朝と同じ陣地に立つてゐた。「我々は一寸の土地をも失はなかつた。」とマルボーは回想してゐる。^(二二)けれども佛蘭西軍は殆ど包圍されてゐた。その死傷は四萬に達し、二十二萬發の砲彈のうち残るは僅か一萬六千發、二時間を支へるに過ぎない。皇帝は退却を命じた。

唯一の退却路は、ライプツヒ郊外のリンデナウにあるエルステル河の橋であつた。その橋は、退却終了後爆發するやうに地雷装置がしてあつた。退却は十九日に始まつて、二十日に互る終夜つづけられた。翌朝、ブリュッヘルはプロシヤ兵を率ゐてライプツヒに突入するや、退却軍の後方を突いた。佛蘭西軍は橋を防禦しながら、依然としてよく支えてゐた。

不意に耳を響するばかりの爆破の音が轟いた。橋は空に飛び散つた。地雷の係りに置かれてゐた下士官が、橋に乗り込むコザツクを見て、橋が攻撃されてゐるものと思ひ、地雷の導火索に火をつけたのである。軍の半ばは對岸に残されてゐた。屠殺が始まつた。露西亞兵、獨逸兵、瑞典兵、奧太利兵などは、晝日夜にかけて佛蘭西兵を虐殺したのである。

が、皇帝はどうであらうか？^(二三)二時間ばかり椅子で安んじて、^(二四) 彼の眼を醒して、軍も皇國も滅びてしまつたことを悟つた。ベレージナー——エルステル。彼は始めてあり、これは終りである。要するに、これがために彼處から遁れて來たのだ。これで佛蘭西を救つたと云へるのか！

「一體あの畜生は自分で何をしてゐるか分つてるのか？」とオジェロー元帥はマクドナルド元帥にかう云つた。「あいつが無我夢中になつて了つたのが、あなたの目には入らないのですか？ 惡黨！ 我々一同を見棄てようとしやがつた。我々一同を犠牲にしようとしやがつた！」^(二五)これはほかでもない、ナポレオンが近衛と共に河を渡り終つたので、己れの退却を安全にするため、わざと橋を爆破させた、と云ふ意味なのである。

「こんな事はもうそろ／＼お畢ひにする時機ではないだらうか？ あの男が軍隊を破滅したやうに、佛蘭西をも破滅させないやうにしくちや。」とネイ元帥は云つてゐる。^(二六)

「彼は全く疲弊しつくし、疲れきつてゐたので、人が命令を聞きに傍へやつて來ても、椅子の背にぐつたりと凭れかかり、脚を卓子の上に載せて、たゞ口笛を吹いてゐるばかりであつた。」とスタンダールは追想してゐる。^(二七)

「あらゆる不幸にも拘らず、余は依然として歐羅巴に於ける最も強力なる元首であつて、余の事態は恢復し得るものやうに思はれる。」とナポレオンはライプツヒの慘敗後七日たつた時、ラ

インへ向けて完全な退却をしながらかう云つた。^(一八)このやうな瞬間にかくの如き言葉を吐くものは、まだ「疲れた」人間ではない。それは「大理石のやうな魂」をもつてゐて、稲妻もそれを打ち砕くことが出来ず、たゞ表面を滑るに過ぎない人間の言葉である。

果して彼の事態は「恢復する」ことが出来るであらうか？ もし彼がそれを欲するならば可能である。しかし彼は欲するであらうか？ 欲する、價値があるだらうか？

退却軍を救ふために、將軍達はリンデナウを除くライプツヒの郊外を残らず焼き拂ひ、砲火の掩護のもとにリンデナウ橋による退却を續けるやうにと提議した。さうすれば、軍も、佛蘭西も、己れ自身をも救ふことが出来たのである。けれども彼はそれを欲しなかつた、市街を劬つたのである。「この行き過ぎた寛大さは彼として王冠に價するものであつた。」と、比較的云ふに足らぬバイヨシナの「兇行」のために、あれ程彼を厳しく非難した同じマルポーが、こんな風に云つてゐるのである。^(一九)「余の如き人間は百萬人の生命をも唾棄して顧みない。」ところが、こゝでは「唾棄」しなかつたのである。

ポロヂノ——ライプツヒ。恐らくこゝでも彼は彼處と同じやうに、こんな事にさほど骨折る値打がないと云ふことを、忽然と悟つたのかも知れない。「三十の年までは戦捷がその光榮をもつて人を目眩ませ、戦争のあらゆる恐怖を飾つてくれるかも知れない、が、それから先は……」「戦争があれ程忌はしく思はれたことは曾てなかつた！」

これを悟つて倦怠を感じ、倦怠のあまり誤りに落つたのである。太鼓が静寂の格が如き風潮の中に星夜を欲するやうに、彼も終焉を欲したのである。

逝れた軍隊の恐怖は、亡びた軍隊のそれに較べて優るとも劣らなかつた。乞食のやうな糧儀を纏ひ、餓えて士氣沮喪した兵士らは、ラインへ向けて退却した、——否、敗走した。チプスが狙撃を極めて、すべての病院や民家ばかりでなく、大道や街路まで死骸に埋められた程である。幾多の偉大なる戦争の英雄であつた優秀な兵士達が、「畜生同様の境涯」に陥ち込んだ。彼等はたゞ一つ、佛蘭西の土地で死にたいと云ふ考へを抱いて、とぼ／＼と歩みを續けたのである。

恰も、偉大なる軍隊の幻が己れを埋めた氷雪の露西亞の柩から出て来たかのやうであつた。

註

- (一) ラクール・ゲイエー、四七八頁。(二) コンスタン、第二卷四七四頁。(三) 回想録、第四卷二四三頁。(四) ロエドレール、二二二頁。(五) マルモン、第五卷五頁。(六) ラクール・ゲイエー、四八四頁。(七) 同上、四八八頁。(八) 回想録、第三卷三五七頁。(九) 同上、第三卷三七八頁。(一〇) 同上、第二卷六〇頁。(一一) マルポー、第四卷一八一頁。(一二) 同上、第四卷一八五頁。(一三) 同上、第五卷三〇〇頁。(一四) フェイン、二九〇頁。——セギニール、第六卷一八〇頁。(一五) マクドナルド、二二四頁。(一六) セギニール、第六卷一八〇頁。(一七) マクドナルド、二二四頁。(一八) セギニール、第六卷一八七頁。(一九) スタンダール、二八七頁。(二〇) ラクール・ゲイエ

1、第四卷四九六頁。(一九)マルボー、第四卷一九二頁。(二〇)ウーセイエー、千八百十四年、
四頁。

二、退位

一八一四年

プロシヤ、奥太利、瑞典、露西亞、西班牙、——全歐罪巴は、獵犬の群が狩立てられた野獸に向ふやうに、佛蘭西めがけて飛びかゝつて行つた。しかし獅子の巢へ踏み込む前に、まづ獅子の齒を鈍らすやうに呪まじなひをしなければならぬ。

同盟軍の厨房に於ける主なる料理人であるメツテルニヒは、フランクフルト通牒を草案した。外交界の裁縫師どもは狂へる巨人のために挾窄衣を縫つたのである。同盟諸國は再び佛蘭西に、「自然の境界線」へ返ることを提議した。しかしこれもブラーグ會議と同じ空な喜劇に過ぎなかつた。ナポレオンが回答する暇もない中に、早くも次のやうな宣言書が現れた。「同盟諸國は佛蘭西と戦つてゐるのではなくして、皇帝ナポレオンが己れの帝國の國境外で濫用し、歐洲に不幸を齎しつゝある優越權と戦ふものである。」かうして、平和を提議しながら戦ひを宣した。「同盟諸國は、既に二十年間歐羅巴を苦しめてゐる無数の災厄を除去して國民を安堵せしめるまでは、決して武器を棄てないであらう。」

これは、かの「ボンテコルヴォの惡黨」の言葉に依ると、「ボナバルトは惡漢である。やつを殺

さなければならぬ。やつが生きてゐる間は世界の鞭となるだらう。」と云ふことになるのである。

シュワルツェンベルクはエルザスから、ベルナドットは自耳義から、ウーリントンにはピレネイを越して佛蘭西へ侵入して來た。ブリニツヘルは巴里へ進撃し、アレクサンドルもそれに續いた。同盟國は常備軍として三十五萬、豫備として六十五萬の兵力を擁してゐた。この百萬の大軍が雪崩のごとく、殆ど無防禦の佛蘭西へ襲ひかゝつたのである。

佛蘭西は、さながら瀕死の病人が水を覚めるやうに、四半世紀に亘る革命戰、皇帝戰の後、平和を渴望してゐた。老人達はピラミッドの砂の中に睡り、中年のものは露西亞の雪の中に、壯年者はライプチツヒの泥沼の中に眠つてゐる。残るはたゞ子供ばかりであつた。子供と女が畑を耕してゐるのだ。「もし犁につける馬がなければ、手鋤で耕作することも出来る。」と内務大臣は慰撫の言葉を發してゐる。子供達は耕作してゐるが、やがてそこに麥の穂ならぬ血の稔りとなつて喰れるであらう。

佛蘭西は平和を渴望してゐる。そしてナポレオンが戰爭であり、しかも今は勝利でなく敗北であることを知つてゐた。とは云へ、彼は今でも依然として勝利なのである。「彼の天才に對する信頼は無限であり、全國民は彼の味方である。」と警視廳の報告の中に書かれてゐる。

「おん身らは余を選び出した。余はおん身らのなせる業である。おん身らは余を護らなければならぬ。」と皇帝は一月二十三日、佛蘭西戰爭の始まる直前、國民親衛軍の諸軍團に向つてかう云つた。

「最初の伊太利戰役、および最後の佛蘭西戰役の二つは最も輝かしいものである。……ナポレオンの敵シャトーブリアンも認めてゐた。」

同盟諸國は彼を「十萬の將」と呼びならはしてゐた。それは彼を頭に戴く軍隊が十萬人分の強みを有つてゐる、といふ謂である。「我軍の迅速さと力とは彼等をしてこの言葉を吐かしめた。」と皇帝は回想してゐる。「僅少の勇者がかほまでの奇蹟をなし遂げたことは、未だ曾てその比を見ぬところである。結果に於て我軍の敗北に終つたため、それらの奇蹟は多數者にとつて未知のまゝで殘つてゐる。けれど敵は己れ自身にそれを體驗し、當然の正しい評價を與へたのである。我々は當時眞に百の手を有する巨人ブリアレイであつた。」

この我々とは誰を指すのか？ 將軍達か、元帥達か？ 否。「余の將軍達は弛緩して俊敏を缺き、従つて不幸になつた。彼等は既に革命當初の頃とは別人の觀があつた。……余は眞實を語らなければならぬ。彼等はもはや戰ふことを欲しなかつたのである。余は餘りに彼等を名譽と富に飽滿せしめた。一旦歡樂の盃を味つた彼等は、たゞ平穩のみを欲するやうになり、如何なる價を拂つてもこれを購はうとするに至つたのである。聖なる火は次第に消えて行つて、彼等はルイ十六世の元帥たらんことを望んだのである。」

「下士官や普通師團の中尉達はまた勝利のために戰つたが、司令部の人々はたゞ平和のためだけに戰争してゐた。」とこの戰役の祖述者も云つてゐる。

とは云へ、それは尤もなことであつた。彼等の多くはマルモンのやうに、十年といふ長い年月の

間に巴里にゐたのは僅々三箇月くらゐのものでつたのである。彼等には戦争が涯しないやうに思はれた。彼等の足を停めるところは果して何處であらう。——ラインか、ネマンか、ユウフラテスカ、印度か？ それとも永遠の猶太人かカインのやうに、決して何處にも休止するところがないのだらうか？

「我々は一體どこへ行くのだらう？ 我々は一體どうなるのだらう？ もしあの人が倒れたら、我々も一緒に倒れるのだらうか？」といふ臆病げなひそ／＼聲を、皇帝は参謀部の扉越しに小耳に挟んだことがある。^(九)「佛蘭西には平和、ナポレオンには戦争。」かう云ふ同盟國の聲明を元帥達は信じたのである。

軍隊の内部もさうであつたが、巴里市中でも同様だつた。そこでは最早誰彼のものが、彼を狂人と宣して退位せしむべきであると提言してゐた。^(一〇)クレイランは彼に^(一〇)パーエール一世の運命を準備してゐたし、前警務大臣フウシエは南佛で彼の妹であるトスカナ公妃エリーズの耳打ちして、「殿下、我々に残された唯一の救ひは、——皇帝を殺すことです！」と云つた。^(一一)

否、彼と勞苦を共にするのは將軍や元帥達でなく、最後まで生き残つた舊近衛軍の老兵と、その當時マリイ・ルイズと呼ばれてゐた、まだ髭も生えてゐない少年のやうな若い新兵であつた。彼等は其の無邪氣な容子と、兵隊外套の下から覗いてゐる百姓風の服と、「さながら生れつきのもの」と思はれる^(一二)悠然貴若として^(一二)落着き持つた勇氣^(一二)によつて、直ちに見分けることが出来た。彼等は

彼等の體からは勇敢の氣が迸つてゐる！と皇帝自身發嘆の聲を上げてゐる。^(一三)「お、佛蘭西人の血の中には如何ばかりのヒロイズムが含まれてゐることか！」とマルモンも新兵達の精神を回想して云つてゐる。「彼等の一人は砲火の下に立つて、いとも悠然と銃丸の唸りを聞きながら、自分で射撃しないでゐた。『どうしてお前は撃たないのか？』と私は彼に訊ねた。『なに、わつしだつて、もし誰かこの鐵砲に^(一四)彈丸を填めてくれたら、人に負けないやうに撃つて見せるんですがね。』と彼は素朴な調子で答へた。哀れな少年は銃に装填する術を知らなかつたのである。それからもう一人、これは今すこし狡猾な男であつたが、將校に向つて、『中尉殿、あなたは中々射撃がお上手ですね。どうか私の鐵砲をお取りになつて下さい。私が藥莢を渡してあげますから！』と云つた。將校はその言葉を容れたが、少年は戦闘の間ちゆう瞬き一つしないで、物凄い砲火の下に立ちつくしたのである。^(一四)」

「今日戦列に現れて明日は殞れて行く、僅か一日を命とするこれらの數限りない戦争の蜂蟻どもを、兵士と呼ぶことが出来るだらうか？」彼等は殞れてゆく——

・ 刈人の死の鎌にふれし鈴蘭のごと。

「若き近衛隊は太陽の前の雪のやうに消えて行く。」と皇帝は云つた。「ヘロデの小兒殺戮だ。」と

* 露西亞皇帝、アレクサンドル一世の父、專制と氣紛れのため廷臣達に暗殺された、一八〇一年。

彼等がプロシヤの砲弾の下に將棋倒しに倒れて行くのを見て、峻厳な老將軍ドゥオーは呟いた。^(一六)
けれども、銃の持方を覚えるや否や、彼等はベレージナ、ライプツヒの後に生殘つた髑武者の
老選抜兵にも劣らないほど戦ふのであつた。

これらの聖なる佛蘭西の子等、——その聖なる魂は、皇帝と行動を共にした。「我は既に犠牲と
なりつゝあり。」とジャンヌ・ダルクの如く焚火の上に昇りながら、この魂はこんな風に云つたか
も知れないのである。

人々は彼を罵つて、「反基督^{アンチクリスト}」と稱ぶが、子供達は彼にホザナを唄ふのであつた。「幼兒の口によ
りて頌歌^{ほめ歌}をつくれり」である。彼等が彼を信じ愛したことによつて、彼の中にも子供らしい、善良
な、恐らく神聖なものさへ藏せられてゐたことが看取出来るではないか。彼もまた犠牲となるであ
らう。果して彼はそれを欲してゐたか？ 自分が何を欲したか、何に生涯憧れてゐたかを、彼は理
解したであらうか、想起したであらうか？ 否、理解しなかつた。そして恐らく永久に理解しない
だらう。

ところが、彼は突然勝利を欲したのである。何故なら、もし神聖なる戦争といふものがあるとな
れば、それは祖國防衛の戦ひだからである。若き近衛隊と共に彼も若返つた。「余が依然としてヴ
クラム、アウステルリッツ時代の余であることを、敵どもは思ひ知るがよい！」^(一七) 然り、またマレ
ンゴ、アルコラ、ファヴァリク時代の彼でもあるのだ。「僕はまた伊太利の戦役、三戦を録いた

よこ

護りなき佛蘭西に於ける同盟軍の最初の進軍は、殆ど凱歌の行進であつた。いとも容易に與へら
れた凱歌、なによんにも三萬對三十萬、一對十の戦ひだつたのである。

最初の戦闘ラ・ロチエールは敵の勝利であつた。ナポレオンは軍を集結する暇がなく、數に壓さ
れて退却したのである。

「この日から後、彼は我々にとつて恐るべきものではなくなりました。陛下も今こそ『余は全世
界に平和を贈る！』と仰しやることがお出来になります。」と露西亞の將軍サーケン^{サーケン}はアレクサ
ンドルに祝辭を述べた。^(一九)

ナポレオンが佛蘭西で打破られた、——獅子がその巢で狩り立てられたのである。「戦争は終つ
た。」と同盟諸國は云ふ。「なに、まだ始つてもゐない」とナポレオンは答へる。

二月十日はシャムベール、十一日はモンミライユ、十二日はシャトー・ティエリー、十三日は
ヴォシャン、十八日はモンテロ、——戦捷につく戦捷、電撃につく電撃、さながら伊太利戦役を偲
ばすものがあつた。敵は混亂状態でヴォエーズの彼方へ退却した。「余は同盟軍が巴里に近づいて
ゐるよりも、更にミュンヘン、維納に近づいてゐるのだが、彼等はそれを知らないのだ。」^(二〇) 否、彼等
は承知してゐた。で、シャチリヨンの會議で媾和を提議したのである。しかしそれはブラーグ、フ
ランクフルトのそれと同じやうに、ナポレオンとの媾和が不可能であると云ふことを證明する空な

喜劇に過ぎなかつた。荏苒時を移させて豫備軍を引きつけるために、獅子の齒を鈍らす呪にしようと云ふのだ。要するに相も變らぬ袂袂衣であるが、たゞシャチリヨンのフランクフルトのよりも更に窮窟で、「自然の境界」の代りに革命前の境界を要求したのである。「え？ あれ程の努力をした後で、あれ丈の血を流した後で、あのやうな數々の勝利を獲得した後で、儂が受取つた時よりも佛蘭西を小さくせよと云ふか？ 金輪際出来ない！ 祖國に背かず、卑劣を敢てせずして、儂にそんな事が出来ると思ふか？」とナポレオンは答へ、更にブリュッヘルを續けた。そして今にももう一息で敵を襲ひ、粉碎し、一撃のもとに戦争を終結させることが出来さうであつた。^(二二)

ブリュッヘルは遁走したが、しかし後方へでなく前方へであつた。自暴自棄の大膽不敵さで彼はマルヌ河を渡り、その後の橋を爆破して、一路孤立無援のバリをさして進んだ。しかも佛蘭西側の將軍達までがそれを助けたのである。ナポレオンが一寸わき見をしさへすれば、友軍は忽ち敗北を喫する始末であつた。二月二十七日、バル・シュル・オーブでウチノ元帥が退却した。「裏切りだ！」と兵士等は、砲兵もなしに戦闘へ引張り込まれるのを見てかう叫んだ。

ナポレオンはブリュッヘルを粉碎するために、モンスル・バリ街道上の最も重要な戦略的地點であるスアツソンに敵を壓迫した。そして、もしスアツソンがもう一晝夜半もちこたへたら、事實粉碎することも出来たのであつた。ところが、要塞司令官を勤めてゐた旅團長モロー將軍が、「恭々しく」降服してしまつたのである。「二十四時間内に銃殺だ！」と皇帝は叫んで、憤激のあまり殆ど

泣かないばかりであつた。しかし、銃殺したとて何の甲斐があらう？ ブリュッヘルは救はれたのである。彼は要塞に入つて、その中に閉ぢ籠つてしまつた。

三月七日はクラオン、十一日はラオン、二十一日はアリス・シュル・オブ、——これらはみな徒らなる勝利であり敗北であり、空に打込まれた電撃であつた。佛蘭西軍は一寸の土地をも譲らなかつたが、如何せん、その數は次第々々に減じて行つた。死の録は少年達を薙ぎ拂つて血みどろの收穫を上げた。「若き近衛隊は、太陽の前の雪のやうに溶けて行つた。」が、敵はいよいよその數を増して來た。後から後から雲霞の如き大軍が押し寄せ、百萬の勢が雪崩れ落ちるのであつた。

「鴉どもが鷲を啄き殺したのだ。」この數語の中に全戦役が盡されてゐる。^(二三) 死の痛手を負はされた鳥の王は懸命に敵を追拂はうとして、鴉の爪の一突き毎にはら／＼と羽を散らした。が彼は一羽きり、鴉は黒雲のごとく群れてゐるのだ。結局、最後の勝利を占めて、啄き殺すに相違ない。

三月二十五日、フェル・シャムヌアーズ附近で、モルティエ、マルモン兩元帥は眞向から打破られた。同盟軍の行手を阻んでゐた最後の障壁が倒れたのである。かくしてブリュッヘル、アレクサンデル、シュワルツェンベルクは、相合流してバリへ向ふこととなつた。

ナポレオンは二十七日サン・ディジエでこの報に接した。こゝで佛蘭西戦役を始めたが、又こゝでそれを終結する譯である。運命の環は遂に閉ざされた。その夜皇帝は居間に閉ぢ籠り、地圖に向つたまゝ深い物思ひの中に過した。「どうしたものだらう、——防禦したものか、それともバリを

明渡したものか？」この二つの想念は戦役の抑々の始めから、彼の内部で相剋してゐたのである。

「もし敵が巴里に近づいたら、わしの帝國は終焉だ。」一體なぜ彼は攝政皇后と皇太子に巴里を引上げるやうに命じたのか？ 何故巴里を掩護してゐたモルティエとマルモンの兩軍團を招還したのか？ 「彼は常に巴里明渡しの可能なことを豫見して、次第にこの考へに慣れて行つたのである。」

と皇帝の日常を側近く目撃してゐた秘書官のフェインは、かう追想を語つてゐる。^(二四)

けれども、最後の瞬間にまたもや疑惑に捉へられたのである。彼は巴里が明渡されたことを知つてゐた。して見ると、露西亞の一八一二年に對して、モスクワの自己燃焼に對して、佛蘭西も巴里の自己燃焼で答へるべきではないか。佛蘭西の國內深く退いて、全國民に革命戦を起させ、敵に向はせるべきではあるまいか。蜂起した西班牙が彼ナポレオンに打勝つた以上、佛蘭西がブリュッヘルに打克てないと云ふ筈はあるまい？ たゞ自分の體から皇帝の縛袍を脱ぎ棄て、冗談でなく一七九三年に立歸りさへすればよいのだ。ナポレオンを殺してボナパルトを蘇生させ、「騎馬のロベスピエール」となつて疾驅しながら、「余は革命である、故に全世界をその根底から震撼させてやるのだ。」と云へばよいのである。

果して彼はこれを實行することが出来たらうか？ 然り、出来た。しかしそれを欲したであらうか？ 欲する價值があつたらうか？ 彼はライプツヒの郊外を憐んで焼拂はなかつた。その彼が巴里を焼拂つたであらうか？ それとも、革命についても戦争についても云つたのと同じやうに、

「余は革命がこれ程思はしく思はれたことは覚えてなかつた。」と云つたであらうか？

翌二十八日の夕、彼は中央郵便局長ラブレットから暗號の急報を受取つた。「もし皇帝にして、巴里明渡しを妨害せんとの意志を有せらるゝならば、陛下御自身巴里にいらせらるゝこと肝要なり。一刻も時を失ひ給ふべからず。」^(二五)

二十九日、ナポレオンは軍を率ゐて巴里へ向つた。けれどもその動きは餘りに緩慢であつた。三十日、彼は指揮を參謀長ベルチエに託し、軍をフォレテンブローへ指向するやうに命じて、曾てベレージナから馬を驅つたやうに、單身護衛もなく、郵便馬車に乗つて藪地に急行した。

道々、恐ろしい報が後から後からと齎らされた。敵は巴里に近寄つて、皇后と皇太子はルアールへ向けて出發し、目下巴里附近で戦鬪が行はれてゐることであつた。

その夜皇帝は馬を換へるため、殆ど巴里郊外と云つてもよいクール・ド・フランスの驛邊に一泊した。眞暗な街道づたひに馬蹄の響が憂々と聞える。「止まれ！」と皇帝は叫んだ。騎兵部隊長ベリヤール將軍は、耳に覺えのある聲を聞いて、馬から跳び下りた。ナポレオンは彼を引張つて行つて街道を歩みながら、質問の雨を降らした。そして巴里附近の戦鬪が敗北であつたことを知つた。總指揮官のジョセフ王は遁走し、軍は協約に従つて市街を撤退しなければならなかつた。

「巴里へ！ 巴里へ！ 馬車を廻すやうに吩咐してくれ」

「もう時機を失しました、陛下。きつともう降伏が調印されたに相違ありません。……」^(二六)

しかし皇帝は何一つ耳にしなかつた。彼は巴里へ行つて、警鐘を亂打し、市街を篝火に照し、一同を一人残らず武装させて市街戦を演じ、もし必要とあれば、露西亞人がモスクワを焼拂つたやうに、巴里を焼拂ふのだ。

馬車が来るのを待ちかねて、足早に巴里へ向けて街道をすた／＼歩き出した。まるで單身武装もなく市街へ乗込まうとでもするかのやうに。

空には白い星が瞬き、地には赤い火が燃えてゐる。これは何だらう？ セーヌの左岸、市街の城壁間近に陣したプロシヤ軍の夜營である。

皇帝は歩みを停め、頭を垂れて、静かな足取りで後ろへ引返した。もう手遅れか、まだ間に合ふか？ もしかしたら、降伏はまだ署名されてゐないかも知れない。

驛遞へ歸ると、彼はコランクールに媾和談判を行ふ全權を託して、巴里へ送つた。

その夜はサン・ディジエの時と同じやうに、地圖の前で過した。未明に急使が到着して、降伏は署名され、同盟軍は今朝巴里へ入城する筈であると傳へた。

彼は巴里を防禦もしなければ明渡しもしなかつた、——自分自身運命に降伏したのである。

また同じ道を辿つてフォンテンブローへ引返し、城の階下に落着いた。フランシスク一世の廻廊に沿つた小さな部屋である。

彼は巴里附近で決戦するために、軍の集結を待つてゐた。彼には六萬の兵があつた。——「十萬

の將」と呼ばれてゐる彼自身を加へれば、十六萬である。彼はこゝでもライプティヒの時と同様に、「歐羅巴で最も強力な元首であり、その事態は恢復される」かも知れないのであつた。

四月一日、彼は同盟軍が意氣揚々と巴里へ入城したことを知つた。三日、コランクールはアレクサンドルの媾和拒否の答へを齎らした。

その日、新舊兩近衛師團の檢閲を終へた後、皇帝はフォンテンブローの白馬宮で軍隊に云つた。

「敵は我軍に三行進先んじて巴里へ入つた。余は偉大なる犠牲を代償として、——革命後の我等の勝利一切を犠牲として、アレクサンドルに和議を提言した。……が、彼はこれを拒否した。……余は更に巴里附近で一戦を試みる心算である。諸君にその覺悟があるか？」

「皇帝萬歳！ 巴里へ！ 巴里へ！ 巴里の廢墟で戦死するのだ！」と軍隊は雷霆の如き聲で答へた。^(二七)

「退位だ。もうこの上は退位のほかはない！」と皇帝から二歩しか離れてゐない元帥達の群の中でネイがかう云つた。皇帝にはそれが聞えなかつた、それとも聞えないやうな振りをしたのかも知れない。彼は自分の居間へ歸つた。元帥達もその後に残つた。ネイが先頭に立つてゐた。人々は後ろから彼を突ついて、小聲に勵ますのであつた。彼は一同に代つて云はなければならなかつたのである。

「陛下は巴里からの報知を御入手でございますか？」

「いや、どんな報知だ？」

「まことに不快な報知でございますして、元老院は陛下の御退位を聲明し、國民と軍隊を宣誓から解除したのでございます。」

「元老院はそんなことをする権利を持つてはゐない。それをなし得るのは國民ばかりだ。」と皇帝は落着き拂つて抗辯した。「同盟軍は僕が巴里郊外で撃破してやる。」

「我軍の状態は絶望です。」とネイは續けた。「もう少し早く媾和が締結されなかつたのが残念でございます。今となつては退位のほか方法がありません。」

マクドナルド元帥が入つて来て、一座の合唱コーラスに加はつた。

「軍は巴里をモスクワの運命に陥れることを望んでをりません。……我々はこの問題を片附ける事に決議しました。……こんな不運な戦争はもう澤山です。我々は國內戦争を始めるのは不賛成です。……わたくし一箇に關しては、はつきり陛下に申し上げますが、わたくしの劍は決して佛蘭西人の血に塗られることはありません！」

「諸君、君方は勝手に決議したのだが、僕はまた別なことを決意した。僕は巴里郊外で決戦をする。……」

「軍は巴里攻撃には向はないでせう！」とネイは聲を高めた。

「軍は僕の命に従ふだらう！」と皇帝も聲を張り上げた。

「陛下、軍は自分の將軍の命に従ひます。」

ナポレオンは、自分が一言當番副官に命令さへすれば、元帥達を残らず逮捕することが出来るのを知つてゐた。けれども敵を眼前に控へてそれを實行するのは、容易の業ではなかつた。それに、他の將軍達が果してこの連中より優れてゐるだらうか？ 彼は依然として悠々と一同を退出させて、コランクールと差向ひになると、條件付きの退位文を認めた。皇太子に皇位繼承權を、皇后に攝政權を保持しようと云ふのである。コランクール、マクドナルド、及びネイがこの退位文を巴里へ携行した。

丁度この時、忠實勇敢な老元帥であり、埃及以來皇帝と勞苦を共にして來たマルモンが、彼に背いてシユワルツェンベルクに書を送つた。「國內戰勃發の可能および佛蘭西人民の流血を未然に防ぐため、軍隊と國民との接近に協力せんとの意志により、余は部下の軍隊と共に、次の條件の下にナポレオンを抛棄するの覺悟なり。一、軍は武器、輜重、軍需品を携行して、自由にノルマンディに退却すること。二、もしこの移動のためナポレオンが同盟軍の捕虜となりたる場合、彼の生命ならびに自由は、同盟諸國の選定せる國內もしくは領土内の地域にて保證さるべきこと。」これはつまり、「どうぞナポレオンを勝手にして下さい。穴へ入れて生きながら葬つてもよろしい。たゞ殺さなければ差支へありません。」と云ふのに同じであつた。「これこそ本當に佛蘭西的な寛大さだ！」とシユワルツェンベルクは答へたが、恐らくにやりと笑つたことであらう。そして勿論一切に同意

した。^(二七)

マルモンの第六軍團は、ナポレオンを同盟軍から掩護しながら、フォンテンブローと巴里の間にあるエッセンに陣してゐた。マルモンは隊を撤去しながら、武装のない皇帝を敵に渡さうとしたのである。

アレクサンドルはこの裏切の中に、ブルボン家を守る「神意」を見て取つた。そして我子の繼承權を保有したナポレオンの條件つき退位を肯ふことは出来ないと聲明し、完全な退位を要求した。

ナポレオンはこのマルモンの裏切りを聞いた時、長いあひだ信ずることが出来なかつた。が、遂に信じざるを得なかつた。そして「彼は僕よりもつと不幸になるだらう！」と云つた。

「余は彼等を寛恕する。佛蘭西も同様に彼等を赦さんことを。」と彼は後日遺言狀に多くの裏切者を列擧した中に、マルモンの名を上げてかう云つてゐる。その連名の中にはタレイランも交つてゐた。恐らく最後の審判の日には、悪魔タレイランがその接吻によつてユグ・マルモンの口を焼くことであらう。

エッセン軍團の撤退後、巴里郊外の戦闘は不可能となつた。でナポレオンはルアールの後方へ退くことに決意した。あゝ、彼がこれをもう少し前に實行してゐたら！同じ滅びるにしても、己れの意志によつて滅びた方がよかつたではないか。聖なる佛蘭西、——ジャンヌ・ダルクと共に、蕞^{わづ}の山に昇つた方がよかつたらう。しかし今は餘儀なくされた犠牲、——刑罰である。自ら進んで

行くのでなく、引かれて行くのである。自ら決したのでなく、運命の決を待つてゐるのだ。

五日の晩、コランクール、マクドナルド、ネイの三人が、巴里からフォンテンブローへ歸つて來て、元老院はプロヴンスの伯爵を國王ルイ十八世と名乗らしたと、アレクサンドルが條件つきの退位を肯んぜず、完全な退位を要求してゐることを、皇帝に復命した。

「では戦争だな。」と皇帝は泰然として云つた。「いや、構はん、戦争も今は平和に劣りはしな^(二八)
S-1」

これより先き、彼はアレクサンドルの答へを見越して、ルアールの後方へ退却の命令を下してゐた。明日は未明に近衛が尖兵縦隊としてマルゼルブに出動し、殘餘の軍隊は同日朝これに續く筈である。

五日の晩、將軍達は秘密に集合して、軍の行動に關する皇帝の命令を一切履行しないやうに決議した。そして夜半の二時に、舊近衛第一師團長フリアン將軍はこの決議を各軍團長に傳達した。翌朝、コランクール、マクドナルド、ネイは參謀總長に傳へた。

六日、ナポレオンは最後に元帥達を招集した。彼は地圖面を指し示し、殘つた兵力を計量しながら、落着き拂つた態度で、詳細に、數學的正確をもつて退却の計畫を述べた。「ことによつたら、まだ一切を救ふことが出来るかも知れない！」^(二九)

元帥達は押黙つてゐた。ナポレオンが答へを要求した時、味方に殘されてゐるのは軍の破片とも

云ふべきものであつて、たとひルアル後方への撤退が成功したにせよ、この最後の努力は國內戰で終るに過ぎない、と答へた。そして人々の粘土細工のやうな顔は、言葉に出さずに、「退位しろ！」と云つてゐるのであつた。

「諸君は安靜を望んでゐるのだな。——ではその安靜を上げよう！」と皇帝は云ひ、卓子に向つて書き始めた。

「同盟諸國はナポレオンをもつて、歐羅巴に於ける平和克復の唯一の障礙と宣言せるに依り、宣誓に忠なる同人は己れ自身ならびに繼承者が佛蘭西及び伊太利の王位を退くことを聲明す。何となれば、同人は己れ自身の個人的犠牲のみならずその生命すらも、佛蘭西の福祉のために捧ぐる覺悟を有すればなり。」^(三三)

「犠牲」この一語は發せられ、運命の永遠なる石碑に記されたのである。犠牲の顔、——これが今後の人間ナポレオンの新しき顔なのである。

城は忽ち空虚となつた。——人々は四方へ逃げ散つた。「皇帝は既に葬られたかと思はるゝばかりであつた。」^(三三)

城の中は靜かであつたが、兵營の中は騒がしかつた。こゝでは皇帝の退位を欲せず、元帥達の裏切を憤慨してゐた。その夜、舊近衛隊は戰團隊形で、軍旗を翻へし、炬火の光に照されながら、マルセイエーズとナポレオン頌歌を高唱して、街々を行進した。兵士等の顔は天晴でもあり、恐ろし

くもあつた。それを見つゝると、このやうな人々を引きつれたなら、もし皇帝にこそ、慈悲さへあれば、全世界を踏破し征服することが出来さうに思はれた。

四月十二日、マダナルド元帥がナポレオンの署名した、——外交家の言葉に従へば「批准した」退位條件を受取つて、同盟側へ持つて行くために巴里からやつて來た。皇帝は明朝九時に取りに來るやうにと命じた。

その夜城内に何事か持上つたが、誰一人としてよくは事情を知らなかつた。城の窓々に灯がちらついて、人々は右往左往に駆廻り、叫び、助けを呼ぶのであつた。やがて皇帝が西班牙戰爭このかた頭に懸けてゐる守袋の毒を仰いだと云ふ噂が擴まつた。しかしその自殺は成功しなかつた。毒は氣が抜けてゐたので、たゞ烈しい嘔吐だけで事は済んだ、といふのである。^(三四)

彼自身はセント・ヘレナでこの風説を憤然として否定してゐる。彼は自殺に對して常に輕蔑を感じてゐた。「自分を殺すのはたゞ愚か者ばかりだ。」^(三五)「自殺者は脱走兵と同一である。人生を逃避するのは戰場から遁走するのと變りない。」と軍隊へ與へた命令の一つにも云つてゐる。彼は何處へも逃げるところがないのを知つてゐた、——記憶してゐたのである。

或は、この恐ろしい一夜の中に、彼は自分が永久にこれ等の苦患を背負はなければならぬことを、何時にも増して明瞭に想起したのかも知れない。——中でも最も悪性の苦しみは羞恥であつた。「戰團中に死ぬのは何でもない事だ。しかしこのやうな時、このやうな汚辱の中で死ぬなんてこと

は、斬じて厭だ！」^(三六)「余は己れの退位聲明を羞ぢる。」と後にセント・ヘレナで云つてゐる。「あれは余の謬りであつた、弱さであつた。無分別な行爲、一時の興奮、テムペラメントの過剰であつた。余は己れを取巻く一切のものと、運命そのものに對する嫌悪と侮蔑の俘となつたのである。余は運命に挑戦したかつたのである。」^(三六)彼は運命に挑戦狀を投げつけたが、運命はそれを返さなかつた。彼は自分が永遠に羞恥の地獄に焼かれることを悟つたのである。

「批准」とは抑々何であるか？ 相互に提出された條件を受入れると云ふ、双方の側からの確とした同意を指すのである。その際ナポレオン側としては、世界制覇の代りに滑稽なサンチヨ・パンサの領地にも均しいエルバ島と、その上に二百萬法の年俵と皇帝の尊稱保存に對する同意であつた。「僕は殺すことは出来ても侮辱することの出来ない人間だ。」と彼はよく云ひ云ひしたが、この時自分は殺すことは出来ないが侮辱することの出来る人間だといふことを、忽如として悟つたのである。^(三八)彼は顔に唾を吐きかけられながら、しかもこの唾を「批准した」のである。

九時にマクドナルドがやつて來た。「皇帝は質素な白の綾織綿布の部屋衣を着、素足に上靴を穿き、頸筋を露き出しにし、兩肘を膝の上に突き、掌で顔を蔽ひながら、壁爐の傍に坐つてゐた。」とマクドナルドは追想を語つてゐる。「私が入つて行つた時、侍僕が大きな聲で私の名を呼び上げたにも拘らず、彼は身じろぎもしなかつた。どうやら深い瞑想に沈んでゐたらしい。」ブリエンヌの表紙に従へば、「假死の如き睡り」に沈んでゐたのであらう。^(三九)「數分間沈黙の後、ギチエンザ侯

(コランクール)が、「陛下、元帥タレント侯が御命令を待つてをります。侯は巴里へ歸らなければなりません。」と云つた。陛下は眼の醒めた様子で、驚いたやうに私を眺めた。席を起つて私に手をさし伸べ、君が入つて來たのに氣がつかなかつたと謝辭を述べた。彼が兩手を顔から除けた瞬間に、私はその相恰の一變したのに驚愕した。彼は黄色いオリヴのやうな顔色をしてゐた。「陛下は御不快に渡らせられますか？」と私は口を切つた。「さう、僕は厭な一晚を過したよ。」と彼は答へ、再び先程のやうに腰を下して、深い物思ひに沈んだ。私達は無言のまま、彼を眺めてゐた。「陛下、タレント侯が待つてをられます。」と可成り長い沈黙の後に、到頭ギチエンザ侯が云ひ出した。「批准をお渡しにならなければなりません。批准の期限は二十四時間で切れますし、その交換は巴里でする筈になつてをりますから。」そのとき皇帝は再び瞑想から醒めて起ち上つた。その様子は幾らか元氣さうになつたけれども、顔色や表情は變らなかつた。「僕は幾らか氣分がよくなつた。」と彼は云つた。^(四〇)

すぐその日の中に、彼はマクドナルドに批准を渡し、こちらはそれを巴里へ持つて歸つた。ナポレオンがこれらすべてを耐へ忍んで、この世に生き残つてゐたと云ふことは、或はアルコラ、マレンゴよりも更に大きな勝利であつたかも知れない。

四月二十日、同盟側がナポレオンにエルバ島へ出發するやうにと指定した日の午前十時、幾臺かの馬車が車寄せに廻された。舊近衛隊の選抜兵は白馬宮の庭に銃を擔いで整列してゐた。かつきり

正午に、皇帝は統領官時代や帝政時代の幸福な頃と同様、飾り氣のない緑色の獵兵の制服をつけ、灰色の行軍用のマントを羽織り、三角帽を被つて庭へ出た。選抜兵は捧げ鉢をした。太鼓が行軍の合圖を鳴らし始めた。

「わが舊近衛隊の兵士達、さらば！」と皇帝は列の間へ入りながら云つた。「二十年の間、諸君は名譽と光榮の途を余と共に歩んだ。しかもこの最後の數日は、我等の幸福の日々として、諸君は依然飽くまで勇敢と誠實の模範であつた。諸君の如き人々と事を共にするならば、我等は決して敗北などしなかつたであらう。しかし戦争は更に苦しいものとなつたに相違ない。……余は去つて行くが、わが友よ、諸君は引續き佛蘭西に奉仕せられよ。……さらば、我が舊き友よ！ 余は諸君を一人残らずこの胸に抱き締めたいのだが……軍旗をかけて貰ひたい！」

プティ將軍が彼に軍旗を渡した。彼は抱き締めて接吻した、初め將軍を、その後軍旗を。

「さらば我が子らよ！ 希くばこの余の最後の接吻が諸君の胸に達せんことを。常に勇敢かつ善良であるやうに。」

選抜兵は泣いてゐた。

四日二十七日、ナボレオンはサン・ラファエル、——フレジュースに到着した。それは殆ど十五年前、埃及戰役の後、霧月十八日の前に、彼の上陸したところであつた。こゝで彼の太陽はさし昇つたが、又こゝで没せんとしてゐる。が全く没しつくすのではない。永遠の落日の前にいま一度、

最も日麗ましく神々しい眞紅の光に燃え立つのである。

註

- (一) ラクール・ゲイエー、四九八頁。(二) ウーセイエー、『千八百十四年』、四頁。(三) 同上、七頁。(四) ラクール・ゲイエー、五〇七頁。(五) 同上、五〇四頁。(六) 同上、五〇四頁。(七) 回想録、第三卷三五六頁。(八) ウーセイエー、第一卷三九九頁。(九) 同上、第一卷三九九頁。(一〇) 同上、第一卷二五二頁。(一一) 同上、第一卷四四五頁。(一二) マルモン、第六卷八頁。(一三) ラクール・ゲイエー、四八一頁。(一四) マルモン、第六卷五一頁。(一五) セギユール、第六卷四七九頁。(一六) 同上、第一卷四七九頁。(一七) ウーセイエー、第一卷五一九頁。(一八) ラクール・ゲイエー、五一三頁。(一九) ウーセイエー、第一卷六三頁。(二〇) ラクール・ゲイエー、五一三頁。(二一) 同上、五一三頁。(二二) コンスタン、第四卷一九七頁。(二三) ウーセイエー、第一卷四一三頁。(二四) フェイン、二〇三頁。(二五) ウーセイエー、第一卷四一三頁。(二六) 同上、五四一、五四二頁。(二七) 同上、五九一—五九二頁。(二八) 同上、六〇四—六〇七頁。——マクドナルド、二六四頁。(二九) 同上、六〇〇—六〇一頁。(三〇) 同上、六三七頁。(三一) 同上、六三七頁。(三二) 同上、六四一頁。(三三) 同上、六四一頁。(三四) セギユール、第七卷一九六—一九九頁。——バスキエー、第二卷三二五頁。——コンスタン、第四卷二五五—二七〇頁。——回想録、第四卷一七三頁。(三五) ダルゴイ、第一卷五五八頁。(三六) ラクール・ゲイエー、五二六頁。(三七) 回想録、第三卷二六六頁。(三八) ラクール・ゲイエー、五〇一頁。(三九) プウリエンヌ、第五卷三八七頁。(四〇) マクドナルド、三〇〇、三〇一頁。

三、エルバ―百日天下

一八一四年——一八一五年

「エルバは安らひの島となるであらう。」とナポレオンは英吉利のフレガット戦艦からこの島の主な港であるポンテ・フェライオに上陸しながらさう云つた。

「僕はこゝで治安判事のやうに暮すだらう。……皇帝は死んで、僕はいま何ものでもない。最早この小さな島のこと以外、何事も考へてをらぬ。僕の家族、僕の小家、僕の牝牛と騾馬、それよりほかのことは一切僕の興味を惹かない。」エルバに棲んだ最初の數日、或は數週數ヶ月は、彼もどうやらそんな風に感じてゐたらしい。恐らく、アヤツチオの家の板張りの座室で抱いたやうな子供らしい空想を思ひ起したのかも知れない。又ブリエンヌの學校で緑の隠遁所に籠つて、ルソーの訓めに従つて「自然の状態」に歸つた頃の空想や、カーテンを引いた暗い部屋の中で、蠟燭を點してゐた巴里の學生時代の空想や、オクソンの兵營でゴルゴナの無人島へ嵐で打ち上げられた航海者を心に描いてゐた砲兵中尉時代の空想などを、思ひ起したことであらう。「僕はこの島の王となるのだ。こゝで僕は假令幸福でないまでも、智者として平安になれるかも知れない。」もしかしたら、全世界は彼にとつて「無人島」であることを、悟つたかも知れない——想起したかも知れない。世

界制覇などと云ふものは、このリリブットの王國であり、サンチヨ・パンサの領地であるエルバに、一寸毛の生えた位のものでしかないのだ。

「おい、どうした、小言屋、退屈かね？」と或る時彼は「名譽の」護衛につけられてゐる年とつた選抜兵に訊ねた。

「退屈するといふ譯でもありませんが、陛下、あまり面白いこともございせん！」

「そんな事ぢや不可んよ。お前、あるがまゝの生活を生活して行かなけりや。」

これは生活の睿智から出た箴言といふより以上のものである。それは常に彼を導き、彼もまたそれを感じてゐた至上の力に對する謙抑な服従なのである。「Ubicumque felix Napoleo 至るところ幸福なるナポレオン」と、エルバの郊外の家、サン・マルチノの圓柱の一つにかう書いてあつた。寔に、彼は自ら幸福を欲したならば、至るところ幸福になり得る人間であつた。

エルバは「安らひの島」とならなかつた。彼は常に至るところで示したやうな烈しい貪婪さで、早速仕事にかゝつた。かつて偉大な帝國を建設したやうに、小さな島の建設を始めたのである。道路を拓いたり、病院、學校、劇場、兵營を建てたり、税關を改革して關稅や消費稅を整理したり、鑛山を掘つたり、蠶を風土に順應させようとしたり、漁業や鹽坑を獨占事業にしたり、新しい耕作地の開墾を奨勵したり、葡萄園を作つたり、ポルト・フェライオを美化しなどした。

「エルバは幸福の人々の島となつた。」と住民の一人が追懐してゐる。さながらナポレオンは、全

地球上に實現し得なかつたもの、——「黄金時代」を、「地上の樂園」を、この猫額大の土地に建設しようとして欲してゐるかのやうであつた。

それが半年ばかり続いた。もし人々が彼を放擲しておいたら、もつと長く続いたことであらう。けれども、丁度ブリュクセルの學校友達が彼の縁の「隠遁所」へ闖入したやうに、今や同盟諸國は「聖福の人々の島」へ闖入したものである。

エルバはゴルゴナではなかつた。彼は新聞や風説によつて世の中の出来事を知つた。フォンテンブローの「批准」は依然として續いた。——相變らず彼の顔へ唾が吐きかけられるのであつた。彼の妻は放埒な悪黨であり間諜であるナイツベルグに與へられ、息子は取上げられた。「古代でも丁度こんな風に被征服者から子供を取上げて征服者の分捕品の飾りとしたものだ。」と皇帝は訴へてゐる。^(六)ルイ十八世は皇帝に支給される二百萬法の配當が餘り多すぎると云つて出し漕ぎつた。恐らく、吝嗇のためと云ふよりは敵を侮辱しようとしてと云ふ氣持から出たことであらう。タレイランとケッスルリッヂ卿は維納會議で、彼を何處か大西洋の島へ流さうと云ふ申合せをした。「ボナバルトの運命は決しられた。彼はセント・ルチヤ島に流されるであらう。……かの地の氣候は間もなくコルシカの怪物を世界から驅除するに相違ない。」と英吉利人達は互に祝辭を述べ合つた。^(七)「ナポレオンがエルバにゐるのは、佛蘭西にとつて、否、歐羅巴にとつて、エスギアスがナポリにあるのと同じである。」とフリーシェは警告してゐる。^(八)「結構な流説だ。それより暮の方がよいではないか。」と多くの

人々は傳へた。「ナポレオンを生かして置くのは大變な間違ひだ。彼の頭の上に六呎も上を飛ぶやうなものは、枕を高くして眠れない。」^(九)アルジェリヤの海賊達は彼を生捕りにしようとして申出るし、羅馬の僧侶達は刺殺すやうに提議した。

「人々は僕を殺さうとしてゐる。——殺すがよい……僕は兵隊だから。……僕は自分で自分の胸を擡げて刃に晒すだらう。しかし僕は流人となるのは厭だ。」と彼は英吉利の全權ゲムベルに云つた。^(一〇)

それは恐らく、ホーランド夫人が送つて寄越した英國新聞を読んで、自分をセント・ヘレナに流さうとしてゐると云ふことを知つたからであらう。^(一一)「セント・ヘレナ、——小さい島」、彼が中學生時代の手帳に書きつけたこれらの言葉と、それに續く空白の點、——啞のやうな運命、——を、彼は勿論そのとき思ひ出しはしなかつたらう。けれども心は不吉な恐怖に戰いたかも知れない。

しかし彼は同盟諸國が互に争つてゐることを知つた。今にも彼等は唾み合ひを始め、戦争が勃發しさうな形勢であつたが、しかし今度は最早彼のことの原因ではなかつた。佛蘭西の國民は、「佛蘭西人の死骸を踏んで、コサツクの肩車に乗つて乗り込んで来た」ブルボンを憎んでゐた（これは當時の滑稽畫に描かれた圖である）。佛蘭西は彼ナポレオンを「救世主のごとく」待ち焦れ、呼び招いてゐるのであつた。

かうした一切のことを彼に傳へてくれたのは、ベルチエ元帥から派遣されて来た、もとの國會監査役フレリ・ド・シャブロンであつた。彼は水夫に變装し、漁船に乗つて密かにポルト・フェライ

オへ到着したのである。

ナポレオンは「經帷子を破り棄てよう」と決心した。一八一五年二月二十五日、彼は二艘の船を借受け、「移り氣」と稱する古い二檣帆船を修理して、これを英國船らしく塗り上げ、武装を施し、食糧品を積込むやうに命じた。明くれば三十六日の夜半、彼は僅かな手勢を引きつけて船に塔乗した。善近衛隊の選抜兵と獵兵六百人、ユルシカの獵兵四百人、それに波蘭槍騎兵百人、これだけの人数で彼は佛蘭西を征服しなければならなかつたのである。三月一日、彼はアンティープとカンヌの間に當るホルフ・ジュアンに投錨した。

「佛蘭西國民よ、」と彼は國民に與へた檄文の中で云つてゐる。「余は流謫の地にあつて諸子の哀訴と希望を耳にした。諸子は己れ自身の選舉せる唯一の合法的政府を要求してゐる。余は海洋を越えてこゝに來つた。余は再び余のものにして且つ諸子のものたる權利を獲得せんがために進むものである。」また軍に與へた檄文の中では次のやうに云つてゐる。「兵士等よ！ 諸子の長官の旗幟の下に集合せよ。余の生命は諸子のものである。余の權利は同時に國民のものであり、諸子のものである。戰勝は急行進の如き速度をもつて我等の前に展開されるであらう。三色旗に飾られたる鷲は鐘樓より鐘樓へと飛び移つて、やがてバリノートルグム寺院の塔に達するであらう。」

果してこの言葉の通りになつた。かつて埃及戰役の後フレジュースに燃え上つた火花は、今またホルフ・ジュアンに燃え立つて、倏忽の間に佛蘭西全國に擴がつたのである。太陽はあの時東にさ

し昇つたのであるが、今は最も華々しく神々しい最後の紅を黒雲の間に輝かしながら、西に没せんとしてゐるのであつた。「僕の生涯に於ける最もよき時代はカンヌから巴里への進撃中であつた。」と皇帝はセント・ヘレナで追憶してゐる。^(一三) 恐らく、この「再度の來臨」の時ほど、彼は自分の不死をしみ／＼と感じたことはないであらう。

「鷲」は沿海アルプス地方を経て北へ北へと飛んで行つた。小やかな軍勢はまだ殆ど忍び足で東プロヴンスを進んだ。この地方の住民は概ね王黨派なので、皇帝に對しては無關心であるか、或は密かなる敵意を抱いてゐた。けれどもドフィネの境界あたりからは、最早全民衆が彼の進路に蜂起した。それはさながら、大地それ自身が立ち上るかのやうであつた。彼は沈み行く太陽のごとく、この時ほど大地に近づいた事はないのである。

附近の村々の住民は彼を迎へに馳せつけて、その生ける顔を五フラン金貨の肖像と比べた後、「正しく彼である」ことを確めると、「皇帝萬歲」を叫んで歓迎し、その聲は寸時も絶えることがなかつた。^(一四)

三月七日、ラフレイ峡谷のグレノブルに近づいた時、彼はナポレオン征討のために派遣されたデレッサール麾下の、第五戦列聯隊に屬する一箇大隊を迎へることとなつた。迂回することは不可能であつた。一方は峻しい丘陵の連続であり、いま一方は湖沼なのである。皇帝軍の前衛である波蘭槍騎兵は敵の大隊に接近した。デレッサールは兵士らの顔に浮んだ恐怖の表情を見て、戰鬪開始の

不可能を悟り、隊を率ゐて立去らうとした。けれども槍騎兵は、馬の鼻息が背中に感じられるほど近々と大隊を追跡して行つた。そのときデレツサルは銃剣突撃の號令をかけた。兵士等は機械的にその號令に従つた。しかし槍騎兵の方では、如何なることがあつても攻撃してはならぬと云ふ命令を受けてゐるので、馬首を轉じて退却を始めた。そのとき皇帝は、兵士らに銃口を下へ向けるやうに命じ、年取つた獵兵數名を従へながら敵の大隊を指して行つた。

「あれがさうだ！ 射て〜！」とランドン大尉は前後を忘れて號令を下した。

兵士等の顔はさつと蒼褪め、足ががく／＼して來た。痙攣的に握りしめた手の中で銃が震へた。

拳銃射撃の距離まで近づいた時、ナポレオンは立ち停つた。

「兵士等よ！」と彼はしつかりした大きな聲で云つた。「僕はお前達の皇帝だ。わかるか？」

それから二三歩すゝみ出て、緑色の獵兵の制服の前を開いて胸を露はした。

「もしお前らの間に自分の皇帝を殺さうと云ふ兵士があつたら、——さあ、僕はこゝにゐるぞ！」

「皇帝萬歳！」といふ物狂はしい叫びが起つた。人々は列の中から彼の方へ走り出て、その足もとに身を投じ、兩手で抱きしめて、長靴や、劍や、軍服の裾に接吻するのであつた。この瞬間、彼は事實彼等にとつて「復活せる救世主」であつた。^(一五)

かうしてグレノブルの門は打破られ、要塞の守備隊は降伏した。兵士等は「八つ裂きにするかと思はれるやうな物凄い勢ひで」皇帝めがけて飛んで行き、彼をとり囲み、抱き上げ、廻んで行つ

た。——かうして殆ど巴里まで運んで行つたのである。^(一六)

その夜皇帝の軍は、斧、又木、槍、鐵砲、把火などを手にした二千人の農夫の群に伴はれ、マルセイエーズと、「皇帝萬歳！ 自由萬歳！ ブルボン一統を追ひ出せ！」などといふ叫聲の中を、グレノブルへ乗込んだのである。^(一七)

「こゝで革命が生れたのだ。」とグレノブル附近のギジュールと云ふ小さな町の住民達は、ナポレオンを迎へながらさう云つた。「我々が先づ第一番に人間の權利を要求したのだ。ところが又こゝで自由と、佛蘭西の名譽が復活しようとしてゐる。」^(一八)

「これは革命の新しい發作である。」ネイ元帥は正確な定義を與へた。^(一九)「何よりも儲かなのは、國民が又もやボナパルトの出現を欲したと云ふことである。」と露西亞の全權は書いてゐる。^(二〇)モスクワ、ペレージナ、ライプツヒ、巴里、——あれだけの血が流された後で、又これから先にも流されようとしてゐる夥しい血を眼前に控へながら、これは眞に有り得べからざることである。「第二の來臨」の奇蹟のごとくに摩訶不思議である。

「陛下、あなたは何時も奇蹟を演じてばかりいらつしやいます。何故と申して、わたくし共はあなたがお歸りになつたと聞いた時、陛下は氣がお狂ひになつたのではないかと思つた程でございます。……」とマコン市の助役は自分の歡迎の辭を述べかけたが、物凄い「皇帝萬歳！」の叫喚に消されて、最後まで云ひ終ることが出来なかつた。^(二一) 曾に皇帝一人のみならず、佛蘭西全國が「發狂し

た」のである。

リオン州の小都市ギルフランシュでは二人の農夫が、ナポレオンの泊つた宿屋の亭主から、皇帝の食べ荒した雞の骨を買ひ受けた。これを保存して聖物にしようとするのである。

リオンでは彼の部屋の窓下に、二萬人からの群衆が三晝夜も四晝夜も散らうとしないで立つたまま、「革命萬歳！」と絶えず叫び続けた。^(二二二)

彼は自分が革命であることを自ら知つてゐた。再び一七九三年の精神に靈感を得、己れを「騎馬のロベスピエール」と感じ、國民公會の決断と、力と、迅速さをもつて行動した。彼は白い徽章を禁じ、舊貴族階級と封建的尊稱を廢した。「余の見るところに依れば、現在貴族と僧侶に對する憎悪は、革命の當初と同じやうに強烈を極めてゐる。」^(二二三)

然り、革命は復活し、それと共に彼「人間」も蘇つたのである。それはある者にとつては「深淵から出て來た獸」であり、他の者にとつては「棺の中から起き上つた救世主」なのである。

「陛下、」と同じく革命の子であるネイ元帥は、恭しく老ブルボンの手を接吻しながら云つた。

「わたくしはあのボナパルトを片づけて、鐵の檻に入れてお手許までお届けする所存でございます。」^(二二四)この表現はネイ自身の氣に入つたので、彼は會ふ人毎にそれを繰返した。すると或る人が、

「ボナパルトは檻よりも棺に入れて連れて歸つた方がいゝ。」と云つた時、「いや、あなたは巴里といふものを御存じないのです。巴里人は是が非でも、彼が檻に入つてゐるところを見なくちや承知

しないでせうよ！」^(二二五)

ネイは「山賊どもの徒黨を一人残らず」捕捉して、一撃のもとに殲滅せんすものと、王軍を率ゐてスアツソンとマコンの間を機動してゐる。すると突然一通の手紙が届いた。「親しき友よ、シャ

ロンなる余のもとへ來れ。余はボロチノ戰の翌日のごとく貴下を遇するであらう。」^(二二六)勇者の中の勇

者と云はれるネイは、「あれがさうだ！ 射てつ！」の號令を聞いたグレノブルの兵士達のやうに、

さつと顔色蒼褪めて、一瞬の間に發狂してしまつた。「余は旋風に包まれたかの如く、分別を失つ

てしまつた。」と後日告白してゐる。「かつて敵の砲口に向つて突進したやうに、深淵めがけて飛び

込んだのである。」^(二二七)彼はブルボンに背いてボナパルトに身を捧げた。尤も、たとひ彼が一戰を交へ

ようと思つたにもせよ、それは不可能であつたらう。「私とても、素手で海の流れを止めることは

出來ないからな！」と彼は裏切を決行する前にさう云つてゐる。^(二二八)

リオンから巴里へ向ふ道に、「鷲の飛翔」はます／＼高潮して行つた。彼のあとに續く革命大衆

と軍隊の行進は、「夜空に伸びる彗星の焰の尾さながら」であつた。^(二二九)

三月二十日に入らうとする夜半、王はチュリエリイ宮殿から逃げ出した。翌日の夕刻、皇帝の馬

車はフロールの離宮に乗り近づき、數歩の距離を置いて立停つた。あまり雜沓が甚たしいので、馬

車を玄關へ着けることが出來なかつたのである。人々は馬車を取り圍み、扉を開けて皇帝を抱き取

り、庭から玄關へ擔ぎ入れ、階段を昇つて行つた。——今にも咽喉を締めて、揉み潰し、殺してし

まふのではないかと思はれる様であつた。しかし彼はもう何事も見ず聞かなかつた。恰も蒼樹めた一莖の花のやうに、彼は暗い人間の波に揉まれて流れて行つた。両手を前へさし伸べ、頭をぐつたりと垂れ、眼を塞ぎ、唇に不動の微笑を浮べたまふ、人々のなすに任せてゐた。その様はさながら夢遊病者か、興奮した使徒の群に圍まれた酒神ディオニソスのやうであつた。「彼を運んだ人々は丁度狂人のやうであつた。その他の數千の人々も、遅よく彼の衣服に接吻するか、又はそれに觸れることが出来た時、己れを幸福者と感ずるのであつた。……私は基督の復活に居合せたやうな氣がした。」と目撃者は語つてゐる。^(三〇)

維納會議は恐怖に襲はれた。三月十三日、英吉利、奥太利、露西亞、瑞典、プロシヤ、和蘭、西班牙、ポルトガル、——これら八つの同盟國の共同宣言が調印された。「ナポレオン・ボナパルトは再び佛蘭西に出現して、己れを公民的・社會的法律の保護外に置き、世界平和の擾亂者として、自ら全國民的刑罰を受くべき運命を擔へり。」^(三一)

第七聯合が組織された。英吉利、奥太利、露西亞、プロシヤの全權委員は「平和維持」を目的とする條約を結んだが、その平和のために、「ボナパルトが歐羅巴の安靜を脅威するの可能を喪失せざらん限り」、各國それ／＼十五萬——合計百萬の兵を提供すると云ふのであつた。^(三二)

彼等の恐怖の程度は、憤激の程度によつて判斷することが出来よう。「我々が佛蘭西を容赦したのは間違つてゐた。やつらは懲殺しにしなければならなかつたのだ！」と獨逸の新聞記者は這に絶叫した。^(三三)

「佛蘭西の國民全體を法律の保護外に置くやうに宣言すべきである！」やつらはみもな狂犬のやうに撲殺してやるがよい！」^(三四)

ボナパルトに對する恐怖は、革命に對する恐怖である。それはアレクサンドルが誰よりもよく理解してゐた。「彼をジャコバン黨から切り離すのだ、切り離すのだ！」と彼は繰返した。そして新しい戦争の血腥い空明りの中に黙示録の騎士、「騎馬のロベスピエール」の巨大な影像を見るのであつた。「ナポレオン、——^{*}アポリオン、破滅者、深淵の天使。」と彼は黙示録で占ひながら呟く。

「六百六十六、——獸の數、——人間の數。」

しかしその恐怖は空しいものであつた。革命の新しい火の手はかの落日の最後の紅のやうに消えて行つて、邊りは突如として再び薄暗くなり、死の相を帯びて行く。たつた今燦然たる黄金であつたものが、又もや灰色の鉛となつたのである。一七九三年の後にいきなり一八一一年が襲つて來た。「騎馬のロベスピエール」は消えて、又もや皇帝ナポレオンが現れたのである。

「余は佛蘭西を踏破して、一同の歡喜の中に、市民の肩に乗せられて首都に入つた。しかし余が都に入るや否や、さながら何ものかの魔法にかけられたかの如く、すべては慄然として余の傍らをたち／＼と退き、一同は余に對し冷淡となつた。」^(三五)

否、彼自身すべてのものに對して冷淡になつたのである。丁度ボロチノ戰の時のやうに、突然、彼はまた倦怠を感じ始め、何ものをも欲しくなくなつた。ライプツヒの場合のやうに「假死的な睡

* 底なし穴の魔王。

り」に落ちたのである。棺に入れられ、土中に埋められながら、一切を見聞きして、しかも正氣に返ることも出来ず、指一本動かすことも出来ないのである。

ルイ十八世は佛蘭西に憲章を與へた。で、ボナパルトもブルボンに負けを取るわけに行かない。「ナポレオンよ、自分の権力を緩和せよ。」と國民公會時代の古いジャコバン黨や王政復古時代の新しい自由主義者達は、彼の耳に入れがしに歌ひつゞけるのであつた。「佛蘭西は自由にならうとしてゐる。……もしお前が自由を與へなければ、明日は信服した臣下の代りに叛逆者を持つことにならう。」^(三五)

新しい侏儒シーエスとも云ふべき、死産した憲法の父親であるバンジャマン・コンスタンは自由主義的憲章——皇帝の憲法に對する追加法 *acte additional* を起草した。

かやうな秋、百萬の軍勢の襲來を前に控へながら、馬を下つて國會の馬車に乗りかへ、革命の獨裁から憲法國の元首になるのは、たゞ「假死的な睡り」の中でしか出来ない事である。

彼自身もこれを感じた。「人々は余を見當違ひの道へ押し進め、余の力を拘束し、弱めてゐる。

佛蘭西は余を覺めて見出し兼ねてゐる。『歐羅巴を鎮定し得べき以前の皇帝の手は、今いづくにありや?』と佛蘭西は訊ねてゐる。」^(三六)

「彼は已れに反して自由主義者となり、已れを不具にし弱めてゐた。彼は既に自分自身でなくなつたのである。」と古い正直なジャコバン黨員は云つてゐる。」^(三七)

六月一日、新憲法の祝典が行はれた。それは「バンジャマン・コンスタン」と譯名を附されたが、過させた立法委員會の参加の下に、元のマルス練兵場、今の五月廣場で、物々しくて而も生氣のない儀式が行はれた。法王樞機員達が祈禱式を執行した後、皇帝は廣場の中央にしつらへた王座に登つて、聖書を前に新憲法に對する宣誓をした。人々は彼がマレンゴかアウステルリッツの時のやうに、舊近衛隊の獵兵か選抜兵の制服を着て現れるものと思つてゐたが、豈圖らんや、彼の身に纏つてゐたのは古代羅馬風の下着と、黄金の蜜蜂を散らした緋の袍、それに白獅子のズボンを着き、白い羽飾りのある黒の西班牙帽を被つてゐた。「なんだ、まるで假裝舞踏會ぢやないか!」と群集の中で囁く聲がした。然り、不吉な假裝舞踏會、彼の體からは墓場を出た死人のやうに腐屍の臭ひが漂つてゐた。

六月七日、皇帝の列席のもとに新國會の第一次の議事が開かれた。彼は次のやうな演説をした。

「三ヶ月の間に、多くの事情と國民の信念は余に無限の權力を與へた。今日こそ余の最も熱烈な希望の實現される日である。即ち余は立憲君主制を開くのである。人間は國民の運命を鞏固にする上に於て無力なもので、これをなし得るのは制度のみである。」^(三八)

「人間は無力である、」といふのは、彼が無力であることを意味する。L'Homme が無力なのである。この第二の自己否定は第一の否定、——帝位断念よりも劣るのである。

「彼は已れを制馭する異常な力を有つてゐたが、それにも拘らず、彼はこの告白に伴ふ苦痛と憤

一) ホーランド、一四五頁。(一二三) ウーセイエー、第一卷一九三頁。(一三三) オメアラ、第二卷二三八頁。(一四四) ウーセイエー、第一卷二三五頁。(一五五) 同上、二四七—二四八頁。(一六六) 回想録、第三卷四六三頁。(一七七) ウーセイエー、第一卷二五五、二六〇頁。(一七八) 同上、二四九頁。(一九九) 同上、三二〇頁。(二〇〇) 同上、二七六頁。(二一一) 同上、三〇三頁。(二一二) 回想録、第三卷四六七頁。(二二三) ウーセイエー、第一卷四九二頁。(二三四) 同上、三七五頁。(二三五) 同上、三〇六頁。(二三六) 同上、三二二頁。(二三七) 同上、三二三頁。(二三八) 同上、三二五頁。(二二九) テイエポー、第五卷二七七頁。(三〇〇) 同上、第五卷二九八頁。(三一一) ウーセイエー、第一卷三〇〇頁。(三一二) 同上、四四五頁。(三三三) 同上、四五九頁。(三四四) 回想録、第四卷一六一頁。(三五五) ウーセイエー、第一卷五八—五五九頁。(三五六) 同上、五五八—五五九頁。(三七七) テイボオドー、四五九頁。(三八八) ウーセイエー、第一卷六一六頁。(三九九) 同上、第二卷八二頁。(四〇〇) 同上、八四頁。

四、ワートルロオ

一八一五年

「余はワートルロオで勝利を獲てゐたのである。」とナポレオンはセント・ヘレナで云つた。ワートルロオがナポレオンの敗北であつたことは、誰でもが知つてゐる。ところが彼一人だけ、それが勝利であつたことを知つてゐたのだ。「余はワートルロオで勝利を獲てゐながら、その瞬間に奈落へ墮ちて行つたのである。」^(一)しかしその墮ちる前に、いまだ曾てないほど鮮かな高翔をした。彼の全生涯は人間の意志の最も高き昂揚であるが、その尖端はワートルロオである。

「ナポレオンはその最初の戦役に於て、三十歳の將軍の如き活動を示した。」とこの彼の優れた祖述家は断言してゐる。^(二)三十歳のナポレオンはマレンゴの勝者であり、中空に懸つた太陽であつたが、ワートルロオに於てもそれと變りのない眞晝の太陽であつた。もしさうだとすれば、彼は際どく「睡眠病」から醒めたのである。死んでゐたものが蘇つたのである。

これは二つの證言の中の一つであるが、もう一つは英吉利の元帥ウォルスリーの言葉で、ナポレオンは戦役の間ちゆう「睡眠病の蔽衣を被つてゐた」と云ふのである。^(三)

一體どちらを信じたらよいのか？ それともこの矛盾は外見的なものに過ぎないのか？

「究極の勝利を得るといふ直覺は最早余になかつた。」とナポレオンはワートルロオの回想を續けてゐる。「或は、通常幸運を助けてくれてゐた年が余を裏切りはじめたのか、或は余自身の眼中に於て、余の想像裡に、運命の奇蹟が滅退して行つたのか、何れにもせよ、余は何ものかゞ不足してゐることを疑ひもなく感じたのである。それは最早、終始離れることなく余の背後に隨つて、余に恩恵を撒きちらしてゐた從來の幸運とは違つてゐた。それは峻嚴な宿命であつて、余はその手から殆ど力づくで恩恵を掻き取つたが、そのために猶豫なく復讐を受けたのである。何故なれば、余の獲得した成功には、直ちに失敗が續いたからである。」(註)「そして白狀しなければならぬが、これらすべての打撃は余を愕かしたと云ふよりも寧ろ殺したのである。本能はこの結末が不幸なものとなるべきことを余に囁いた。それが余の決斷と行動に影響したと云ふ譯ではないが、とまれ余の心中には己れを待構へてゐるものに對する豫覺があつた。」

それとも、更に正確に云ふならば、彼の内部では二つの感情が相交錯して、二つの灯のやうに明滅してゐた。それは高翔の感じと墜落の感じである。恰も「睡眠病」から醒めながらも、その蔽衣かひが依然として頭上に搖曳してゐるかのやうであつた。如何に復活してみても、蘇生せる人の輝かしい體の中に死點が黝すんで見えるのであつた。征服しながらも、結局敗北を喫することを知つてゐた。が知つてゐると云つても確實ではなかつたので、最後まで戦はなければならなかつた。かやうな戦ひをするためには、最大の力が必用であつた。如何に云ふまでも、ワートルロオは人間である。

ナポレオンの計畫は、白耳義を占領してゐる敵の兩軍、——ウエリントンウェリントンの率ゐる英吉利・和蘭軍及びブリュッセルの率ゐるプロシヤ軍を、その合流に先んじて各箇撃破することであつた。それがためには彼等の中核部、——ブリュッセル街道上の豫想集結點に移動する必要があつた。つまりそこへ彼は「電光の如く」襲撃しようとして決心したのである。

六月十五日の未明、佛蘭西軍の前衛はプロシヤ將軍ツイテンの指揮する三萬の前衛をやす／＼と撃退して、シャルルルア附近のザムブル河を渡つて白耳義國境を越え、直ちに北上し始めた。その全機動は、アウステルリッツ、フリードランドの全盛時代と同じ數學的正確さと、豫言者的な洞察をもつて見事に成功したのである。

東方ナミュールから進んで來るプロシヤ軍と、北方ブリュッセル方面から寄せて來る英吉利軍とは、ニヴェルからナミュールに向ふ街道上で合體する筈であつた。こゝでナポレオンは挾撃隊形をとることに決心した。右翼を東方ナミュール街道上の一部落ソムブレツに、左翼を西方ブリュッセル街道上のカトル・ブラ、即ち右の兩街道の交叉する地點に配置した上、自分自身はこの三つの點によつて形かたちくられる三角形の頂點であるフレリユースに陣して、翌日まづ第一に近寄つた敵軍のいづれかを攻撃しようと云ふのであつた。もし兩軍とも去つてしまふなら、一發の砲弾をも放たずしてブリュッセルを占領するわけである。

「御機嫌よう。ネイ、君に會つて實に愉快だよ。」と皇帝は戦線に到着したネイにかう云つた。「君は第一及び第二軍團を指揮するのだ。……さあ出掛けて行つて敵をブリュッセル街道に壓迫し、カトル・ブラの陣地を占據し給へ。」

この陣地が眼前に控へた作戦の、否、恐らくは全戦役の中樞であることを、ナポレオンはよく心得てゐた。「もし君が斷乎たる行動を採れば、プロシヤ軍は全滅。佛蘭西の運命は君の掌中にあるのだぞ。」と彼は翌日ネイに云つてゐる。最高の信任のしるしであるこの任命によつて、彼はフオンテンブローについても「鐵の檻」に關しても、すべて個人的怨恨など覺えてゐないことを證明したのである。

午後三時に命令を受取つたネイは、五時には既にカトル・ブラに到着し、その時はまだ防備の微弱であつた陣地を容易に奪取することが出来た筈なのである。けれども、詰らぬことに拘すらつてゐた爲めに途中手間どつた。漸く後方に主力を残し前衛の小部隊を引率して、晩の七時過ぎに到着した時には、陣地は既に四千人のナツサウ歩兵隊に占領されてゐた。もし勇者中の勇者であるネイが、これこそ英吉利の全軍であると想像して生れて初めての驚愕を感じ、豫備軍を引きつけるために戦鬪を翌日に延期しなかつたら、その時でもまだ遅くはなかつたかも知れない。その夜ウェリントンにはカトル・ブラに全軍を集結したので、最早ネイはどうすることも出来なかつた。何よりも惡かつたのは、皇帝もネイから何の情報も受取らなかつたために、すべては豫想通りに行つてゐるも

のと考へたことである。軍の軸は折れてしまつた。しかもナポレオンは戦線に近づいてゐる。……

皇帝の運命、佛蘭西の運命が己れの掌中に托せられたこの危急の秋に際して、一體ネイはどうしたと云ふのであらう、我々は理解に苦しむ。まるでナポレオンの「睡眠病」が彼にも感染したかのやうである。一方が眼を醒すと、また一方が寝てしまつたのである。

鉄隊形は豫定された通りに擴がらなかつた。左翼はブリュッセル街道に達せず、右翼はナミュール街道まで伸ばなかつた。こゝには思ひも寄らずブリュッセルの率あるプロシヤ軍の前衛が現れたのである。が、何と云つても重要なことはなし遂げられた。ウェリントンがブリュッセルと引分けられたのである。

十六日の朝、ナポレオンはプロシヤの全軍が自分の方へ向つて來てゐるのを知つた。「恐らく三時間後には戦役の運命が決められるかも知れない。」と皇帝は云つた。「もしネイが僕の命令を満足に實行してくれたら、プロシヤ軍の砲一門も遣はしなうだらう。」

新しい命令がネイの方へ飛んで行つた。「皇帝はブリイ及サンクマン間に敵の占據したる陣地を攻撃せんとしてゐる。即刻機動を開始して敵の右翼を包圍し、最短距離に於て後方を突かれよ。もし貴官にして斷乎たる行動をなさば、敵軍は全滅したも同様である。佛蘭西の運命は貴官の掌中にあり。」

夜中の三時に、戦闘はサンクマンとリニイの兩部落で開始された。皇帝は六時にネイが到着するのを待つてゐた。プロシヤ軍の後方に砲聲が轟き始めるや否や、皇帝は敵の中央部へ豫備隊を投じてこれを粉砕し、スリベツフに向ふ退路を遮断し、銃剣突撃によつて敵の背後を襲ひネイ軍の銃剣の餌食とする、その時は六萬のプロシヤ兵は一人として近れることは出来なうであらう。

六時、七時、——ネイの砲聲は轟いて來なかつた。突然、フレリユース附近の佛蘭西軍の背後に當つて、その勢三萬ばかりの何とも分らぬ縦隊が現れた。これは一體何ものか？ 英吉利軍か、それともプロシヤ兵か？ 模範とした追憶、豫感が皇帝の胸を締めつけた。これは何處で、何時あつたことだらう——あることだらう？「裏切りだ！ 逃げられるものは逃げろ！」と兵士等は迫り來る縦隊を見て口々に叫びながら遁走した。これらの遁走兵を制止するためには、友軍の砲口をさし向けねばならなかつた。

否、あつた事、——あるべき事は、今こゝで起るのではない。不明の縦隊はネイの本隊から離れて、陽動を試みたデルロン將軍の軍團であつた。ネイは來なかつた。——結局來ないのだ。車の軸は折れた。——突進しようにも乗りもがない。戦闘の主機動が成功しなかつたのである。プロシヤ軍を撃破することは出來ない。しかし彼等を壓倒して英吉利軍と切り離すことは出来る。皇帝は豫備隊をもつて最後の攻撃を指揮した。

その瞬間、雷鳴が轟き渡つた。砲聲は雷鳴に答へ、砲火は電光に應じて、さながら地上で更に一

つの戦ひが行はれてゐるかのやうであつた。丁度二十年前、トゥロンの包圍の時、やはり雷鳴のものと英吉利の突角堡として進んで行つたことを、その時ナポレオンは想ひ起したであらうか？ 彼の全生涯はこの二つの雷電の間に流れたのである。——神の雷電。

八時近い頃、プロシヤ軍の中央部は突破せられ、退却が始つた。風は黒雲を東方へ追つて、西方は晴れて來た。ブリュッヘルは丘陵の頂きから敗北する味方の全軍を見渡した。けれども、「まだ闘ひ得る間は、敗北したものとは思つてゐなかつた。」最後の豫備隊を戦場に投じて、七十歳の老翁でありながら血氣盛りの青年のやうな意氣で、兵とともに砲火の中へ進んで行つた。

戦闘は夜まで繼續した。ブリュッヘルの乗馬は負傷して斃れ、彼を下敷にした。副官のノステイツは飛んで行つて助けようとした。この瞬間、佛蘭西の胸甲騎兵中隊がその傍らを突撃して行つた。殆どすれ／＼に通過ぎながら、暗闇のためにそれと氣がつかなかつた。その後直ちに退却しながら傍を馳せ過ぎたが、その時もまた氣がつかなかつた。ノステイツはプロシヤの龍騎兵を呼んだ。人々は、體ぢゆう打身だらけになつて半ば氣絶したブリュッヘルを、馬の下から助け出し、敗走兵の流れに紛れ込んで、遠く後方へ連れ去つた。敗走兵は夥しい數であつた。翌日リエージュとアーヘンの間に制止されたものは八千人から上つてゐた。

「ブリュッヘル老人は小つびどいお灸を頂戴しやがつた！ 何しろ十八哩から消し飛んだんだから。」とウエリントンは云ひ、例によつて硝子を釘で引つ掻くやうな笑聲を立てた。「どうやら我々も退却しなければならん事になるらしい。英吉利では我々のことを散々にやられやがつたと云ふだらうが、しかし俺はどうすることも出来なかつたのだ。」

十七日の朝ナポレオンは、プロシヤ軍がリエージュとナミュールに退却中であり、ウエリントンは依然としてカトル・ブラにあり、ネイは睡眠病を續けてゐることを知つた。

「僕は英吉利軍に向ふから、君はプロシヤ軍を追跡してくれ。」と皇帝はグルーシ元帥に云つた。彼は自分の言葉の宿命的な重みを感じなかつたのである。

グルーシはそれを感じた。その長い勤務生活を通じて、彼は未だ曾てこれ程の重任を双肩に負つたことがなかつた。撃破されてゐるとは云ひ條、まだ矢張り恐るべき力をもつたプロシヤの全軍は、云はゞ手傷を負つて猛り立つた野獣のやうなものであつた。それが彼の双肩に落ちかゝつて來たのである。勇敢な騎兵將官である彼は聰明でもあり、毅然たる性格をも有し、實行力にも長じてゐた。が、彼は要するに、「一時の人、一機動の人、一努力の人」であつた。正確な戰術家ではあつたけれども全戦局を支配する戰略家ではなかつた。何より不可ないのは、彼が自身それを感じてをり、戦闘でもその感じに自縛され、中風にでも罹つたやうに全身の自由を奪はれる惧れのあつた事である。しかし佛蘭西の元帥として、（八） 御免を願ひます、わたしは恐るしうして、いまは……

とは舌が滑つても云へることではない。それにもう遅かつた。皇帝は夜に詳細な報告を授け、三千の軍團を率ゐてブリュッヘルを追跡し、彼がどの方面へ退却するか、又ウエリントンの合流を決してゐるか、その可能性があるかを突き留めるやうに命じたのである。

あゝ、もしナポレオンが自分のしてゐる事の意義を自覺したならば！ しかし彼は自覺しなかつた、悟らなかつた。——何者かが盲人の如く彼の手を取つて導いて行つたのである。

ブリュッヘルの方は片づいた。残るはたゞウエリントンのみである。正午に近い頃、皇帝は僅かな騎兵隊を従へて、——その他の全軍は後に續く筈であつた、——ナミュール街道をカトル・ブラさして疾驅した。けれどもその途中で、ウエリントンはカトル・ブラを撤退した、少くとも目下撤退中であつて、あとはたゞニクスブリッジ卿が退却軍を掩護するために、少數の騎兵隊を率ゐて残留してゐるばかりだ、と云ふ情報に接したのである。ブリュッヘルは昨日去つてしまひ、今日はウエリントンが去らうとしてゐる。「如何なる成功と雖も、すぐその後から失敗の伴はなかつた例はない。」もし誰かが彼の邪魔をしなかつたら、もし見えざる何者かが彼の足に纏ひつかなかつたら、ナポレオンも「睡眠病に罹つた」ネイのやうに迂濶をしないで、つい六時間ばかり早目に出動し、ウエリントンを襲つて粉碎し、この最後の打撃によつて全戦局を終了したであらう。しかし或はまだ手遅れでないかも知れない。

近衛の胸甲騎兵、獵兵、槍騎兵、騎砲兵は、速足で街道を駛つて行つた。皇帝は當番中隊と共に

先頭に立つてゐた。

エクスブリッジ卿は、佛蘭西軍が向つて來るとの報に接するや否や、街道へ駆け出して行つた。そこには出發準備をしたウェリントンもゐ合せた。敵はまだ遠い。——たゞ太陽を受けた銃剣の閃きが鏡の反射のやうにきらきらしてゐるばかり。「あれは歩兵の銃剣だ。」とウェリントンは云つた。が、望遠鏡で眺めた時、胸甲騎兵であることに気がついた。彼は後衛の指揮をエクスブリッジに任せて、ひらりと馬に跨り、退却中の友軍を追つて、跑でブリュッセル街道を眞直に北の方ワイテルロオを指して疾驅した。

午後二時、風に追はれる黒雲は空に亂れ重なつた。嵐は西北方から進んで來るのであつた。カトル・ブラの上には早くも陰がさしてゐたが、佛蘭西軍の進んで來る街道には依然として日光が輝いてゐた。

エクスブリッジは、砲口を佛蘭西軍の方へ向けた輕騎砲隊の傍らに、騎馬で立つてゐた。突如、遙かな丘の稜線に、小部隊を率ゐた騎者が現れた。當の騎者もその乗馬も逆光線を背負つて、さながら青銅で鑄たもののやうに、明るい空の上に黒々と浮き出した。

「射てつ！ 射てつ！ よく狙つて！」とエクスブリッジ卿は皇帝と氣ついてかう叫んだ。

ナポレオンは近衛の騎砲兵を對應させるやうに命じた。しかしエクスブリッジはこの一騎打を繼

軍の輕騎兵と砲兵は入り亂れて、「氣でも狂つたもののやうに」跑で敗走した。この追撃は一氣の「狩り」を連想させた、と一日撃者は語つてゐる。⁽¹⁰⁾

「早く、早く、お願ひだから早くしてくれ！」とエクスブリッジ卿はまるで默示録の騎士が雷電の中を追つて來るかのやうに、恐怖にかられながらかう叫んだ。⁽¹¹⁾

人々はブリュッセル街道を北の方モン・サン・ジャン、——つい今朝ほど英吉利全軍の退却して行つたワイテルロオさして疾走した。たゞディール河の對岸なるジエナツプ附近で、エクスブリッジは眞先きに河を渡つて對岸に兵隊を配置するや、防禦射撃を命じた。間もなく佛蘭西軍はこれを撃退して、更に追跡を續けたが、その速度は既に緩慢になつた。驟雨は街道を奔流と化し、野を沼に變じて、水が馬の膝を没するに至つた。

夕刻、ベル・アリヤンス農園に達した。それは同じ名を持つた高い丘陵、といふより寧ろ山の上の、平坦な高地にあつた。その眞向ひには、やはり同じやうな高地のある山に近い丘がもう一つ聳えてゐた。これが即ちモン・サン・ジャンであり、ウェリントンの堅めた極めて強固な陣地であつた。この土地全體が、英吉利軍の後方にある部落の名によつて、ワイテルロオと稱はれてゐた。丘陵と丘陵との間には深い凹地があつた。やゝ波狀の起伏をしながら眼路の限り延びて行つて天涯に達するばかりの野が、丘陵の頂きから見通かされた。そこには瀟々熟しかゝつた麥畑があり、そこ

こゝに長細い林が見え、部落々々には教會の鐘が聳えてゐた。すべてが静かなフランドルの風景である。けれども今は夕べの雨の鉛色に包まれてゐた。

英吉利騎兵隊は凹地へ下ると、急な滑つこい坂路を辛うじてモン・サン・ジャンへ攀ち登つた。ナポレオンは、自分の前方にあるのが英吉利の全軍であるか、それとも単に後衛に過ぎないのか、判じ兼ねて立ち停つた。彼は試射を命じ、英吉利砲兵隊の應射の具合で、それが敵の全軍であることを知つた。

戦闘を開始するには時刻が餘りに遅かつた。それに佛蘭西軍の主力はまだ後方にあつた。

「僕はイエス・ナージンのやうに、太陽を引止めたいと思ふ！」とナポレオンは叫んだ。(二二二)

戦闘は明る六月十八日に延ばした。彼はベル・アリアンヌに陣を配置するやうに命じ、自分はカイユーといふ農場のさつぱりした小家に宿舎を決めた。この家はブラウンシュヴァイツ軍がたつた今掠奪して、引上げたばかりのところであつた。彼は服を乾かすために、煙爐に火をどん／＼燃やすやうに吟ひつけた。さきほど豪雨の中を行軍したので、「まるで風呂から出て來たやうに」骨の髓まで濡れてしまつたのである。

その晩の九時に、彼は斥候の報告によつて、ブリュッヘルがリエージュでなくワールを指して進んでゐることを知つた。して見ると、再びウエリントンとの合體を志してゐるのだ。しかし、彼はこの情報をもとにして不安を感じなかつた。リエージュでそれだけひどい目に遭つてから僅か三日の時

間つ後、しかも三萬三千の佛蘭西軍を背後に控へながら、果してブリュッヘルがリエージュからモン・サン・ジャンへの側面行進を敢行するだらうか？ よし敢行するとしても、あれだけの打撃を受けて士氣沮喪した軍隊が、戦闘に應じ得るだらうか？

そ 夜皇帝は殆ど睡らなかつた。一時に眼を醒して、又しても車軸を流すやうな雨の中を、たゞ一人ベルトラン將軍を従へて前哨線を巡視した。彼は、ウエリントンが去つてしまひはせぬかと、それを何より恐れてゐた。彼は英吉利の陣に野營の火は見えないか、何かの動きは感じられないかと、雨を透して闇の中を眺め入り、耳を澄ました。しかし、すべては寂寞として、邊りは眞暗であつた。敵陣は死のとき眠りに落ちてゐた。

ナポレオンがカイユーの農場へ歸つた時には、東が漸く白み始める頃であつた。こゝでグルーシからの手紙が彼を待つてゐた。ブリュッヘルは二箇縱隊をなして進んでゐるが、一はリエージュに向ふものらしく、一はワールに向ふものと想像される。もしこの點が確められたら、自分グルーシはウエリントンとの連絡を切斷するために追撃する、とのことであつた。天晴れ、グルーシ、睡眠病的なネイとは違ふぞ！ 皇帝はすつかり安心してしまつて、彼に新しい指令を送らうとさへしなかつた。何もかもが、二二ヶ四と同じやうに明瞭であつた。彼は運命が氣紛れを起したら、二二ヶ五となることもあるのを、想ひ出さなかつたのである。あゝ、七十にしてなほ青年のごとき「前進元帥」ブリュッヘルが、藁の上に身を横たへ、老骨の痛みに呻きながら、「馬にこの體を縛り

つけさせても、戦闘を逃するやうなことはせぬぞ！」と呟いたのを、もしナポレオンが知つてゐたならば！ 息子のブリュッヘルがブリュッヘルなら、母のプロシヤも矢張り同様で、この國全部が「前進」であつた。彼にとつて今や二の二倍は五なのであつた。

夜が明けて、斥候に出された將校や、白耳義の間諜や脱走兵などが、英吉利軍は昨夜のうちに移動しなかつたといふ報告を齎した。つまり決戦が行はれて、味方の勝利に移る、これは二二ヶ四である。雲間からさし覗く蒼白い太陽——復活したアウステルリッツの太陽——は「英吉利軍の最後を照すであらう」⁽¹¹¹⁾。

たゞ一つ困つたことがある。戦闘は皇帝の必要と認められた時に意のごとく始めることが出来なかつた。雨は歇んだけれども酷い泥濘で、それが乾くまでは砲を動かすわけに行かなかつた。開始が遅れば、一時間一時間がブリュッヘルのためには天佑となるのであつた。

ナポレオンはじれつたさうに部屋の中をあちこち歩き廻つてゐた。時をり窓の傍へ寄つて空を眺めた。

午前五時、戦闘を九時に開始すると云ふ命令を發した。しかし九時近くなつても、各隊はまだ陣地に就いてゐなかつた。武器の手入れをしたり、スープを煮たりしてゐるのであつた。

「英吉利軍の兵力は四分の一強わが軍に優越してゐるが、それでもチャンスは九十六ーセントまで

と報告をした、だからさう云つた。

部屋の中へネイが入つて來た。最早「睡眠病に罹つた人間」ではなく、前日カトル・ブラ附近で眼を醒してゐたのである。彼は自分が大變なことを仕出來したことを悟つて、如何にも哀れな様子をしてゐたので、皇帝も頭ごなしに叱りつけるだけの氣力がなかつた。

「陛下、もしもウェリントンが我等の攻撃を便々と待つやうな馬鹿でしたら、すべてのチャンスは我軍のものでせう。」と彼は入りしなに皇帝の言葉を小耳に挟んでかう云つた。「しかし彼は今すぐ退却します。もし陛下が攻撃をお急ぎにならないと、逃げてしまひます。……」

「君は眼が悪いな。」とナポレオンは言葉を返した。「今から退却するのはもう遅い。もし退却すれば滅亡だ。骸子は投げられた。そして骸子の目は我々のものだ！」

スルト元帥はその前夜皇帝に向つて、グルーシの軍勢を半數だけ招還するやうに進言した。と云ふのは、あれだけ粘り強い恐るべき英吉利と一大決戦をするのであるから、兵力はこちらの方により多く必要だからである。彼は同じ進言を今日も繰返した。

「君は、ウェリントンに破られたものだから、それであの男が偉い軍指揮官のやうに思はれるのだ。」と皇帝は憤然として答へた。「僕ははつきり云つておくが、ウェリントンは凡庸な軍指揮官で、英吉利人は劣弱な兵士だ。こんなことは朝飯と同じくらゐ簡單に片づけてしまふよ！」

レイル將軍が入つて來た。ナポレオンは、英吉利兵をどう思ふかと彼に訊ねた。

「勇敢な兵士でございませう、陛下！ 彼等の粘り強さと照準の正確なことは驚くばかりで、正面攻撃によつて彼等を打破ることは出来ません。たゞ機動によるのみであります。」^(一四)

レイルが西班牙戦争によつて英吉利軍を熟知してゐたに反して、ナポレオンは餘りよく識らなかつた。彼はレイルの言を聴くべきであつたにも拘らず、これに耳を藉さなかつた。昨日グルーシに對して彼の眼を塞いだ何ものかは、今日レイルに對して彼の耳を塞いだのである。

空は晴れて太陽が輝き始め、爽かな風が道路を乾かした。砲兵隊の各指揮官は、やがて間もなく砲を出動させることが出来ると報告した。

ナポレオンは馬に乗つて各隊の巡視をはじめた。この時くらゐ兵士等が熱烈に「皇帝萬歳！」を叫んだことはなかつた。それは狂氣の發作に似てゐた、——と目撃者は語つてゐる。「恐らく千歩かなたに赤黒く見えてゐる英吉利軍の線が、この叫喚に何かしら特に莊重な、胸をときめかすやうな或るものを添へたのであらう。」^(一五)

佛蘭西兵は今までの如何なる時にもまして、これからこゝで單に佛蘭西のみならず、「人間」の——人類の運命が決せられんとしてゐることを悟つたのである。

十一時近くなつても、各隊は依然として整列を終らなかつた。レイルの進言に反して、皇帝は機動によらず、直ちに英吉利軍の中央を攻撃してこれを突破し、モン・サン・ジャンの彼方に敗走せしめ、その後は既に勝利を手に握つておいて、狀況に應じ行動をしようと思つたのである。帝軍

の進軍もいふべき三十歳の時と同じやうに、「一切を一身の敵に賭けた」のである。

十一時十五分、彼は號令を發して、凹地の底の森林中にある英吉利の前進陣地ググモンの城を攻撃させた。

第一の砲聲が轟き渡つた。英吉利の將校達は時計を取出して時を見た。——十一時半であつた。

ググモンは戰鬪の序幕に過ぎなかつたが、早くも腥氣が漲つて、眞の決戦が如何に凄じいものになるかが、それに依つて察せられる程であつた。同時にナポレオンは主攻撃を準備した。前方ならびにベル・アリヤンスの右翼に八十門からなる砲兵中隊を据ゑて、英吉利軍の中央を撃滅しようとした。午後一時頃、ネイは皇帝に傳令を送つて、一切の準備がなつたことを報告し、攻撃の命令を待つ旨を傳へさせた。砲撃の煙が幕のやうに丘と丘の間に擴がる前に、ナポレオンは戰場に最後の一瞥を投げた。と、西北方十軒ばかりのところ、ローヴルから半道ほどとも思しき邊りに、彼はサン・ラムベールの森から立昇る黒い雲のやうなものを認めた。彼は忽ちこれが何であるかを悟つたが、しかし幕僚に意見を徴してみた。意見はまち／＼で、或るものは森であると云ひ、或るものは雲の影だと云ひ、また或るものは佛蘭西かプロシヤの軍服を着た縦隊の行進だと判断した。スルトは明かに夥しい兵力から成る軍團を見分けた。

皇帝は暗い追憶——豫感に心臓の縮む思ひであつた。これは何時、何處であつたことだらう、

——何時、何處であることだらう？ こゝに、今すぐブリュッヘルが現れるのだらうか？ 否、ま

だブリニツヘルではなかつた。捕虜のプロシヤ將校の語る所に依ると、これはプロシヤのビュローウ將軍の率ゐる前衛隊がサン・ラムベールに近づいてゐるのであつた。一箇軍團は全軍とは違ふ、とナポレオンは一縷の望みを抱いた、或は抱かうとしたのかも知れない。捕虜の將校はビュローウの後に全軍の續いてゐることを知つてゐたが、故意に口を緘してゐた。

「ビュローウは、我が右翼を攻撃せんとしつゝあり。」とナポレオンはグルーシに書いてやつた。

「一刻の猶豫もなく出動して我等に合し、ビュローウの不意を襲つて粉碎すべし。」^(一七)

「今朝は九十パーセントのチャンスが我方のものであつたが、今は四十對六十の關係になつた。

もしグルーシが誤謬を正して迂濶な態度を棄て、迅速に我等に合するならば、勝利は決定的なものとなるだらう。況して我等が完全にビュローウ軍團を殲滅するに於てをやである。」と皇帝はスルトに云つた。^(一八)

相手は氣むづかしさうに押黙つてゐた。しかし昨日と同じやうに、グルーシの兵力を半數招還するやうにと云ふ賢明な進言を繰返すことも出来たのである。

午後二時頃、ナポレオンはネイに攻撃命令を下した。既に半日は空費された。しかも一時間、一分を過しても、ブリニツヘルに取つては天佑となるのである。

歩兵の四箇師團が凹地へ駆け下つた。その大部分はまだ依然占領されてゐないググモンと、もう

「眞向から打撃を食らはす」餘裕を生じるので、その時は最早味方の勝利である。けれどもその瞬間、英吉利側の逆襲によつて、彼等は凹地へ追ひ返された。

午後三時、戦闘はやゝ下火になつた。丁度一息入れて力を恢復しようとするかのやうであつた。ウェリントンの目的とするところはたゞ一つ、ブリニツヘルの到着まで持ちこたへることであつた。けれども彼はなかく姿を現はさない。英吉利の司令部では、第二の突撃に耐え得ないのではないかと危ぶんでゐた。

その再度の攻撃に對する命令を、ナポレオンは三時半に發した。そのために、「最敢參の兵士すらも生れてこの方聞いたことのないやうな」^(一九) 烈しい砲火を準備したのである。しかし第二の突撃も成功しなかつた。彼は山の如くに高まつて行つたが、巖に當つて千々に碎けてしまつたのである。レルの言葉は正しかつた。「正面攻撃で英吉利軍を破ることは出来な、たゞ機動によるのみである。」しかし今さら機動を始めるのは時すでに遅かつた。

ネイは戦闘の始めから、カトル・ブラの罪を償ふために、自身親しく指揮を取つて騎兵の大突撃を敢行しようと思つてゐた。で、皇帝の命をも俟たず、凹地の底で急遽近衛騎兵師團の胸甲騎兵、槍騎兵、獵兵四千人から成る數箇中隊を編成し、これをモン・サン・ジャンに指向した。この怒濤も一旦碎けて凹地へ後退したが、又もや立ち上つて、今までのどの波も達しなかつた程遠くまで、

どつとばかり押しして行つた。かくして佛蘭西胸甲騎兵は早くも丘上の高地を疾駆して、敵の砲を破壊し、戦線を進破してゐた。

「俺は何もかも終りになるのぢやないかと思ふよ。」と英吉利の砲兵大佐グルドは、騎兵大尉のマーサーに云つた。(CIII)

「勝利だ！ 勝利だ！」と將軍達は皇帝の周囲で叫んだ。けれども皇帝は秘藏の騎兵隊が命令をも俟たずして攻撃に投入せられたのを見て、驚きもすれば怒りもした。

「ネイは急ぎすぎた。これは良からぬ結果を見るかも知れないぞ。」と彼は戦場を見渡しながら云つたが、暫く無言の後附け加へた。「さうだ、一時間だけ早すぎた。が、どうも仕方がない。彼を支持しなければならぬ。」かう云つてケラーマンの重騎兵隊に、ネイの援助に赴くやうにと命じた。早すぎたかそれとも遅すぎたか、それは恐らく彼自身も知らなかつたのであらう。何故なら状況は一刻一刻と危急を告げて來たからである。そこには二つの戦闘が同時に行はれてゐた。——即ち英吉利を相手の正面戦と、プロシヤ軍を向うに廻しての側面戦である。ビュローウは既に到着して、佛蘭西軍の右翼に當る部落フランスノアを占領し、背後へ迂回して退路を断たうと脅やかしてゐた。新近衛隊は辛うじてその強襲を支へてゐるのであつた。

モン・サン・ジャンの状況は依然として同じであつた。突撃の波が後から後から寄せて來ては碎けてゐた。佛蘭西側にはそれが涯にもないやうに思はれた。が、英吉利側は、かく終りに來るこ

とを承知してゐた。「我が戦線の中央部は露呈された。」と貝寧者は當時を指してゐる。この戦線の始終を通じて、この時ほど結果が不安に思はれたことはなかつた。

ウェリントンも、例の泰然自若たる落着きを失ひはじめた。「夜が來るか、それともプロシヤ軍が到着するか、どちらかが必要だ。」と彼はオハイン街道とブリュッセル街道の交叉點の古い櫓の木のもとに立つたまゝ、かう呟いた。戦闘の間ちゆう彼はそこに立ちつくしてゐたのである。各部隊長は彼のもとへ駆けつけては、自分の絶望的状态を報告しながら、どうしたらよいかと訊ねるのであつた。

「踏みとどまつてるのだ。」とウェリントンは答へる。

また別の部隊長が駈けつけて訊ねる。

「踏みとどまつてるのだ。最後まで踏みとどまつてゐるのだ！」(CIII)

ネイは英吉利軍の線が搖いだのを見た、少くも直覺した。ことに依つたら、僅か少数の新銳部隊を投するだけで、最後の打撃を加へることが出来るかも知れない。彼は副官を皇帝のもとへ派遣して、僅少の歩兵を請求した。「歩兵！」とナポレオンは答へた。「どこでそんなものを取つて來るのだ！ 僕に生み出せとでも云ふのか？」(CIII)

シェゾルチノの角面堡で、愛情に飽滿した男が情婦を突きつけるやうに、勝利を突き放した時にも、彼はやはりかう云つたものである。しかしマレンゴやアルコラではさうでなかつた。蘇れる人

の光り輝く顔に、突如死の斑紋が一點黒く現れたのである。

彼の手にはまだ舊近衛隊の八大隊と、中近衛隊の六大隊が残つてゐた。もしその時ネイに半数を與へたなら、「この増援は我が中央部を突破したであらう。」とワートルロオ戦の優秀な著書を發表した英人は云つてゐる。^(二四)しかしナポレオンにして見れば、豫備の騎兵隊を失つたら、彼は全近衛隊をもつてしても殆ど自分自身の陣地を守り得ない程である。この瞬間は彼にとつて、ウエリントンにも劣らないほどの危機だつたのである。新近衛隊はビュローウの壓迫に堪へ兼ねて、既に退却した。プロシヤの砲弾はベル・アリアヤンス附近の地面を穿つてゐた。佛蘭西軍の翼は迂回され、背面も脅威に曝されてゐた。

皇帝は十一の大隊をもつて同數の方陣を編成させ、それをブリュッセル街道に沿つてフランスノアに對峙するやうに配置した上、この部落を奪取するため二箇大隊を指向した。そして二十分間に攻撃占領が終つた。

もはや七時十五分である。しかし西に没せんとして太陽はあか／＼と輝いてゐるので、まだ二時間くらゐは明るみが残つてゐるであらう。その間に一切が決せられるのだ。

突然はるか彼方に、ビュローウのやつて來た西北方から、殷々たる大砲の音が傳はつて來た。その音は次第に高まり、近づいて來て、最早二三軒ばかりのリマールのあたりで轟き始めた。彼は、やつし、やつしと聲を上げた。人々、人々の顔を見ながら、

ふところでない、とにかく敵を阻止して、英吉利軍との合流を妨げるに相違ない。今まで幾度となく深淵の間際でナポレオンを救つてくれた手が、今もまた救つてくれるのだ。

英吉利の戦線が搖いだことは、今や佛蘭西側の目にも見えて來た。ウエリントンは最後の豫備軍を戦鬪に投入した、——少くとも皇帝にはさう思はれた。ところが、彼の手にはまだ「常勝軍」と呼ばれてゐる近衛隊がそつくりその儘残つてゐる。彼は先程ブリュッセル街道に配置した九箇大隊に逃出を命じ、自らその先頭隊を率ゐて、最後の突撃のために凹地の底部にあるゲ・サント——地獄の窟の中へ導いて行つた。

半時間前、ネイが増援を請求した時ならば、この攻撃は決定的なものとなつたかも知れない。が、今となつてはもう遅い。ウエリントンは逸早く陣地を固めて、勇氣を揮ひ立てたのである。彼は既に何事かオハイン街道上に生じたのを見、知つてゐた。しかしベル・アリアヤンスにゐた佛蘭西軍は丘陵に妨げられて見ることが出来なかつたのである。

しかし皇帝は凹地の底にゐながら同様に見て取つた。ブリュッセルの軍團である！ 遂にグルーシは迂迴であつた、間に合はなかつたのだ、救つてはくれなかつたのだ。たつた今ナポレオンを深淵の上に引き上げたのと同じ手が、今は彼をその中へ突き落さうとしてゐるのであつた。けれども彼の顔はマレンゴ、アルコラの時と同様に平然としてゐた。人々は彼の顔を一目見ただけで、そこ

に勝利を読み取ることが出来た。

彼は副官達を各戦線に派遣して喜ばしい報告を領つた。「グルーシが到着した、遂に間に合つた、救つてくれた！」すると將兵は眞實を目前に見ながら、虚偽を信じたのである。「皇帝萬歳！」と一同は股々たる砲聲をも壓するほど物狂はしい聲で叫んだ。潮死の負傷者すらも身を起しながら同じやうに叫ぶのであつた。兩脚を砲弾に打碎かれて、道路の斜面に坐つてゐた古いマレンゴ以來の兵士は、しつかりした大きな聲で戰闘に向ふ戦友達にかう云つた。

「なあに大丈夫だ。みなもの者、突進しろ、皇帝萬歳！」^(二三五)

ググモンと、地獄の爐と稱されたゲ・サントとの間を、僅か五箇大隊の兵がさながらチユリエリイ宮殿前の觀兵式のやうに、歩調を揃へ銃剣を並べて、嚴肅に整然と英吉利の全軍に向つて進んで行つた。すべての將軍達もネイ、フリアンと共に、眞先に砲火の中へ突入した。ネイは五匹目の乗馬を撃たれて墜れたが、直ちに起上つて、徒歩のまゝ拔劍で進んだ。

英吉利軍の砲兵隊は三百歩の距離で、正面側面二重の榴霰弾射撃を浴せてゐた。一斉射撃の度毎に佛蘭西の大隊には大きな破口が生じた。人々は列を合せ方陣を縮めては、「皇帝萬歳！」を叫びながら、前進を續けた。英吉利軍はウェリントンの「最後まで踏みとゞまつてゐるんだ！」といふ命令を守りながら、毅然として立つてゐた。^(二三六)

「少しでも長く戦つた方が勝利を占めるのだ！」と英吉利の戦士が勇氣を噴きながら云つた。

佛蘭西の二箇大隊は敵と相會することなく、既にモン・サン・ジャンの高地へ登つた。突然、彼等の前方二百歩ばかりのところ、暗紅色の屏が現れた。——英吉利の近衛隊なのである。彼等は高く伸びた麥畑の中に臥してゐて、「近衛隊、撃つ！ up, guard, and at them!」の號令と共に、發條仕掛のごとく跳ね起きて、射撃を開始したのである。第一回の一斉射撃は三百人の佛蘭西兵を薙ぎ倒した。——それは既に先程の榴霰弾射撃で疎らになつた二箇大隊の、ほとんど半數に近かつた。彼等は足を停めた。そして死傷者のために暫し混亂が生じた。銃剣突撃を號令する代りに、將校達は列伍の整理にかゝつた。そのため十分ばかりの間、彼等は小銃と榴霰弾との二重の射撃下に立つてゐなければならなかつた。遂に大隊は退却した。

ウェリントンは近衛隊に動搖が生じたのを見て取つて、總攻撃を命じた。英吉利兵は頭を下げ銃剣を突き出して、この一握の佛蘭西兵を目ざして突進し、その隊伍を潰滅させ、敵味方入り亂れた白兵戦のまゝ凹地の底へ轉がるやうに下りて行つた。「彼我の兵士がしつかり絡み合つてゐたので、これに射撃を加へることが出来ない程であつた。」と或る目撃者が回想してゐる。^(二三七)

「近衛隊が退却してゐる！」といふ聲が、恰も偉大なる軍隊を弔ふ葬送の鐘のやうに、佛蘭西軍の全線に互つて響いた。

その時、ブリュッヘル軍國がオハイン街道から乗込んで来て、佛蘭西軍に猛撃を加へはじめた。「裏切りだ！ 逃げられるものは逃げろ！」と彼等は叫んで敗走した。これがどうして裏切りで

なからう？ たつた今皇帝が「グルーシだ」と云つたばかりなのに、思ひがけないブリュッヘルが現れようとは。

ウェリントン（二九）は、瀕死の重傷を負つた敵軍に止めを刺さうとした。彼は馬に跨つて、崖の端れまで乗り出すと、帽子を取つて空に一と掉りした。各隊はその合圖を読み取つた。忽ち各師團の歩兵、騎兵、砲兵は、馬蹄や砲車の轍で死傷者を蹂躪しながら突進を始めた。右翼から左翼まで一齊に、英吉利兵、ハンノフェル兵、白耳義兵、ブラウンシュワイグ兵、和蘭兵、プロシヤ兵などが、太鼓と喇叭の音につれて、濃くなりまざる黄昏の中を、奔流のごとく凹地へと下つて行つた。

佛蘭西兵はベル・アリヤンスへ敗走した。英吉利の輕騎兵、龍騎兵はそれを追つて、軍刀で斬りまくつた。「容赦すな！ 容赦すな！ no quarter! no quarter!」と氣でも狂つたもののやうに叫ぶのであつた。

皇帝は一切を見てゐながら、何一つ目に入らぬやうな風であつた。その顔は睡眠病に罹つたかのやうに、さも睡たげにじつと動かなかつた。睡つてゐたものが、醒めて、また睡つたのである。死んでゐたものが、蘇つて、また死んだのである。

魂は眠つてゐても、肉體は醒めて動いてゐた。最後の三箇大隊を三つの方陣に編成して、ゲ・サントから二百歩ばかり離れた凹地の底に立たせた。右翼はブリュッセル街道にあつたが、それはこの堤防の背後にもとに、急坂を合して秋作たゞしく進軍するたゞめであつた。皇帝自身は、

のだ、今すぐこの戰場で死ぬのだ！（三〇）彼の前後左右、いたるところで大勢の人が殺れて行くのに、彼は無事なのである。何者か彼を護つてゐる。いつたい何のためだらう？

又そこには、街道から程遠からぬ邊りに、ネイがゐた。馬もなく、帽子もなく、顔は前線のためにとす黒くなり、ぼろ／＼に裂けた軍服に、刀で眞二つに切られた肩章をたつた一つだけ附け、折れ残りの指揮刀を手に持つたネイは、敗走兵の奔流に引かれて行くデルロン伯爵に向つて、憤怒の語氣鋭く叫んだ。

「もし我々が生き残つたら、デルロン、我々は二人とも殺り首にされるぞ！」
彼は敗走兵を押し止めたが、再び彼等を戦場に投じるのであつた。

「さあ、みんなこゝへ来て、佛蘭西の元帥の死にかたを見るがよい！」
周囲のものは悉く戦死したが、彼は依然として戰場に獅嘯みついて、そこに死場所を見出さうとしてゐた。（三〇）

近衛の三箇大隊は、前後左右から榴霰弾を浴せ掛けられながら、方陣をつくつたまゝ何時までも立ち續けてゐた。遂に皇帝は退却の命令を下した。退却は徐かに、歩一歩と行はれた。もはや方陣ではなく、——人数があまりに少かつたのである、——三角形をつくり、銃剣を交叉させ、壁のやうに犇々と四方から取圍んだ敵の中に道を切り開きながら、獵犬に追ひ立てられる野猪のやうに逃

れて行つた。

敵と敵とがあまりにも近く相接してゐたので、殷々たる砲聲にも拘らず、聲が戦線から戦線へ聞える程であつた。

「降服しろ！ 降服しろ！」と英吉利兵は叫んだ。

この叫聲に憤激したカムブロン將軍は、不馴けな罵詈の言葉で答へた。

「この糞野郎……！」

と云ふなり細に銃丸を受けて仰向けに倒れた。

カムブロンの言葉は、ワートルオオの意味をよく表現してゐる。ナポレオンはウエリントンとブリュッヘルに征服された。これはそも／＼何を意味するのか？

「戦争以外、ウエリントンの頭には何一つ考へがないのだ。」^(三二)ブリュッヘルもそれと較べて大して優つてはゐない。ウエリントンは「踏みとゞまる」ことが要なのは知つてゐたけれども、何のために踏みとゞまるのか、——英吉利のためか、それとも英吉利の誑詐主義のためか、——そのところは御存知ないのである。ブリュッヘルは「前進」しなければならぬことは知つてゐるが、何處へ何のために前進するのか、——プロシヤのためか、それともプロシヤの有刺長鞭のためか、——これも同様御存知ないのである。

「人間」ナポレオンには、人類の最も偉大な思想があつた。——全世界の平和、各國民の同種的

結合、神の王國、これである。よしや彼がこの思想を如何に實現すべきかを知らなかつたにせよ、また彼が地獄を潜つて天國へ導かうとし、結局地獄から抜け出ることが出来なかつたにせよ、何と云つてもそれは最も偉大な思想である。従つて、彼がウエリントンとブリュッヘルに破れたのは、人間的な意味が無意味に破られたのである。ワートルオオは世界の運命を決したものであつて、もしこれが最後のな決定であるならば、つまり世界は「人間」ナポレオンに價せず、人間の肥料——「糞野郎……」くらゐの値打しかないのである。

その夜、皇帝はカトル・ブラに近い林中の空地で、舊近衛隊の選抜兵數名の手によつて焚かれた野營の火にあたりながら、退却して來る軍隊を待つてゐた。彼は兩手を胸に組み、視線をひたとワートルオオの方に注いで彫像の如く身動きもせず立つてゐた。誰やら、そこを走りかゝつた將校の一人が近寄つて、聲をかけた。

「陛下、早くこゝを引上げなさいまし。こゝでは何の掩護もございませんから！」

皇帝はまるで聞えなかつたかのやうに押黙つてゐた。將校がその顔を差し覗いて見ると、皇帝は泣いてゐた。

死者は泣かない。して見ると彼は生きてゐるのだ。——また蘇つたのだ。——一體これで何度目だらう！ 生きた者も大きな悲しみのためには泣かないから、して見ると、大した悲しみではないのだ。

翌朝、彼はフィリップギルから兄のジョセフに宛てて手紙を書いた。「戦闘は敗北に歸した、がまだ一切が失はれた譯ではない。余はあらん限りの兵力——豫備軍および國民近衛隊——を集めて、直ちに三十萬の軍を組織することが出来る。……しかしそのためには人々が余に協力して、余の頭腦を混亂させないことが必要である。……余は、議院も己れの義務を理解して、佛蘭西を救ふために余に合流することを囑望する次第である。」^(三三)これは即ち、ワートルオオも大した悲しみではない、と云ふことである。「稻妻も彼の魂を打破らず、たゞその上を滑つたのみである。」

六月二十日の晩、フィリップギルから巴里へ向ふ途上、ナポレオンはラオンで帆馬車を出て、驛遞宿の庭に下り立つた。開け放した門越しに、彼が首を垂れ兩手を胸に組んで庭内を歩き廻つてゐる様が、往來から見透かされた。既の中からは、馬糞の塊りが庭まではみ出してゐた。誰かしら通りから皇帝を眺めてゐたものが、小さな聲でかう囁いた。

「まるで穢れの中にあるヨブみたいだ！」^(三四)

「われ裸にて母の胎を出でたり、また裸にてかしこに歸らん。神與へ神取り給ふなり。神の御名は讃むべきかな！」とヨブは云つたが、ナポレオンはこれを云はないだらう。何故なら、誰に云ふべきかを知らないからである。しかし彼の心の中には不思議な静けさと明るさがあつた。「人は恐らく信じないであらうが、余は己れの偉大さを惜しみはしない。余は自分の失つたものに對して餘り感傷的にはならないのである。」と、後日セント・ヘレナで云つてゐる。^(三五)それと同じことを今穢

れの中のヨブも云つたかも知れない。

彼は、人生が永遠に繰返される夢に過ぎないことを悟つた、——想起したのである。生の輪廻は太陽の運行である。——曉の薄明、日の出、正午、黄昏、落日、夜。

註

- (一) 回想録、第四卷一六一頁。(二) ウーセイエー、『千八百十五年』、第二卷四八八頁。(三) 同上、四九八頁。(四) 回想録、第四卷一六〇—一六一頁。(五) ウーセイエー、第一卷一二三頁。(六) 同上、一六五頁。(七) 同上、一八四頁。(八) 同上、二六〇頁。(九) 同上、三三三頁。(一〇) 同上、三三三頁。(一一) 同上、二六九頁。(一二) 同上、四九五頁。(一三) 同上、二八五頁。(一四) 同上、三一八—三一九頁。(一五) 同上、三三九頁。(一六) 回想録、第一卷三一四頁。(一七) ウーセイエー、第一卷三四四頁。(一八) 同上、三四五頁。(一九) 同上、三五二頁。(二〇) 同上、三六四頁。(二一) 同上、三七四頁。(二二) 同上、三九三頁。(二三) 同上、三九三頁。(二四) ケネディ、『ワートルオオ戦考』、一二七—一三〇頁。(二五) ウーセイエー、第一卷四〇三頁。(二六) 同上、四〇九頁。(二七) 同上、四一〇頁。(二八) オメアラ、第二卷二四二頁。(二九) ウーセイエー、第一卷四一六頁。(三〇) 同上、四一八頁。(三一) スタール夫人、追憶記、第四卷二二六頁。(三二) ウーセイエー、第一卷四四〇—四四一頁。(三三) 同上、四四八頁。(三四) 同上、四五〇頁。(三五) 回想録、第三卷二六七頁。

第六篇
夜

一、再度の退位

一八一五年

「たとへ全世界を獲得したにもせよ、もし己れ自身の靈魂を害ふならば、その人にとつて果して如何なる益があるだらう？」この言葉はナポレオンの「夜」に對する題銘とすることが出来よう。生涯を通じてさうであつたが、最近は自分の靈魂のことなど一向に考へなかつた。しかし靈魂自身は彼の意志に依らず、寧ろ彼の意志に反して己れの存在を記憶してをり、己れ自らを救つてゐたのである。

人間の魂——心が時として人間に叛き、これと鬭争するものと云ふことは、賢明な子供である古代埃及人が承知してゐた。「我が心よ、我が母の心よ、我に抗する勿れ、我を陥入るゝ諛あはしをなす勿れ。」とオジリスの恐ろしき裁きで死者の心が嚴密無比の衡にかけられる時、その心の持主はかう云つたものである。それは即ち、心もしくは靈魂が人間とは別箇な存在で、云はゞその内部に生きてゐる神の如きものであり、己が心に叛かれた人間は禍なるかな、と云ふ意味になる。

この悲しみをナポレオンも味ひ識つたのである。

「いつたい何を賭けて勝負をしようかと云ふのだね！ 僕は前もつて断つておくが、自分の魂た

けは骨牌に賭けないからね。」とレールモンツフの作品に現れる賭博者のルーギンは、年取つた高利貸の幽靈にさう云ふのである。

「わしの銀行にはこれが入つてゐるのだよ。」と幽靈は答へた。

「と、その傍らに何かしら白い、ぼやつとした、透明なものが、ふわ／＼と動いた。……それは妙じくも神々しい幻であつた。光り燦々女の首が彼の上に屈み込んでゐたが、その口には哀願の言葉が浮び、眼には云ひ難い悩みが讀み取られた。彼女は霧に閉ざされた東方に輝く曉の星のやうに、暗い部屋の壁に浮き出してゐた。」

「星」とはよくも正確な言葉を見つけたものである、流石はナポレオンに近い精神を持つたレールモンツフである。人間から離れた靈、人間の内部に又その上に住んでゐる一種の神、人間のこの世ならぬ運命、——これこそナポレオンの「星」である、運命である。

「僕は五億の人間に愛せられたい。」と彼は権力と光榮の頂上にあつた頃こんなことを空想してゐた。

「愚かな人間よ！」と、この最も賢明な人間に向つて、それよりも更に賢明な彼の魂は答へたかも知れない。「たとへ全世界を獲得したにもせよ、もし自分の魂を害なふならば、一體どんな益があると云ふのだ？ よしんば全世界がお前を愛するにしたらところで、お前自身が何人をも愛さなかつたらどうするのだ？」

* 埃及の太陽神であると同時に、死靈の審判者。

彼はよくこんな事を云つたものである。「僕が他の人ほど感じ易くない心を持つてゐるなど考へて貰ふまい。僕はむしろ善良な奴だ。たゞ僕は極く小さい時分から魂のこの一面を壓へて来たので、今では死んだやうになつて了つたのだ。」

死んだやうにはなつたが、しかし全く死んで了つたのではない。靈は突如眼醒めて彼に抗し、己れを救ふために彼を滅し始めたのである。

「余は己れ自身を犠牲に捧げる。Je m'offre en sacrifice」ナポレオンが再度の退位の時に發したこの言葉、彼の口から出たものとは信じ難いほど彼らしくないこの言葉は、同様に彼の「夜」に對する好箇の題銘である。——それは恰も彼自身が云つたのではなく、彼のこの世ならぬ運命が、靈が、星が發したかのやうである。この星のために、彼は年取つた高利貸、——宿命との勝負に際して、自分の持つてゐる一切のものを一枚の骨牌に賭けたのである。

ワートルロオから三日経つた後、六月二十一日の午前八時、皇帝は巴里へ歸着し、シャンゼリゼーの宮殿へ入つた。彼は疲憊したらしい様子をしてゐた。その顔は蠟のやうな黄色を呈し、頬は落ち窪み、眼は光りがなかつた。

「もうやり切れない。……二時間ほど休まなくちや。……息苦しい！」と彼は馬車から降りながら、出迎へた外務大臣コランクールに向つて、胸を抑へながらかう云つた。「あゝ、運命、運命！勝利が三度僕の手から迂り抜けた。……しかし今だつて何もかも失はれたのではない。……僕は人

と武器を見つげ出す。……何もかも取返しがつくかも知れない。」

熱い湯に入浴すると、彼は浴室から眞直に閣議の席へ赴いた。

「我等は極めて困難な状態に置かれてゐる。」と彼は簡単に戦争の経過に關する報告をした後にかう云つた。「余は國民に偉大かつ高潔な自己犠牲を鼓吹するために歸つて来た。……起ち上るものはたゞ佛蘭西のみであつた。敵は粉碎さるべきである。……余は祖國を救ふために大なる権力、一時的獨裁権を必要とする。余は一般の福祉の名に於て、自らそれを掌握することも出来るのであるが、國會から授與された方が更に有益であり、より國民的であらうと信ずる。」

各大臣は難かしい顔をして黙つてゐた。彼が一人々々順々に訊き始めた時、みな曖昧な掴みどころのない返事をした。

「直截に云つて貰はう。代議士達は余の退位を望んでゐるのか？」と皇帝は訊ねた。

「私はそれを恐れてをります、陛下。」と、警務大臣フーシェの懐小刀であるレニエと云ふ代議士が答へた。

「もし議會が皇帝を助けることを欲しないなら、皇帝はそんな助力なしに事を運ばれるだらう！」とナポレオンの弟リュシアンが叫んだ。

「余は囑望するが、佛蘭西の領土内に敵が侵入してゐると云ふ事實は、議員諸氏の義務の自覚を呼醒ますことと思ふ。」と皇帝は云つた。「國民が余を選出したのは、廢黜するためではなく支持す

るためである。……余は彼等など恐れはせぬ。……余がたゞ一言發しさえすれば、彼等は一人残さず殺されて了ふのだ。余は己れ自身のためには何もものも恐れぬが、恐れるのはすべて佛蘭西のためである。もし我々が互ひに争ふならば、一切は破滅となるであらう。しかるに國民の愛國精神と、外國人に對する憎惡と、余に對する愛は、我等に偉大なる力を與へる筈であるが……」

かう云つて、彼は即座に新しい戦争の計畫を述べはじめたが、その言葉は精彩突々としてゐて、大臣達もワテロオのことも忘れ果て、思はず聴き入つた程であつた。彼等の前には再びナポレオンが、「戦争の神」が、「勝利の神」が蘇つたのである。

「あれは悪魔だ、人間ぢやない。」と數時間を経てフーシェは自分の新しい親友達——王黨の連中に向つてかう云つた。「今日は私もびくつとさせられたよ。あの男の話を聞いてる中に、また初めからすつかりやり直しをしさうに思はれて來た。仕合せと、みんながやり直しをしないからいゝやうなもの！」

シャンゼリゼーの宮殿では話し合ひばかりであつたが、議會では行動であつた。決議が採擇された。それは次の通りである。「國會は本會期が終始連續せることを聲明し、これを解散せんとする一切の試みを國事犯と認め、これを敢て試みんとするものを祖國の裏切人と見做す。」

ナポレオンはこれが何を意味するかを悟つた。

「余はまだ戦線に向ふより先きに彼等を解散せしめべきであつた、が今は遲了すだ。彼等は

佛蘭西を滅すであらう。」と彼はその日第二開議の席で云つたが、やがて何りやうに低い聲で附け加へた。

「もし必要とあれば余は退位するが……」

夕方、彼は弟のリュシアンと一緒に宮殿の庭に出た。それは半ば崩れかゝつた低い屏をめぐらした壕で、往來から隔てられてゐた。

「皇帝萬歲！ 武器を！ 武器を！」と往來では群衆が絶間なく叫んでゐた。

「あれが聞えますか？」とリュシアンは云つた。「あれが國民ですよ。たつた一言聲をかけたなら、あなたの敵どもは没落して了ひます。佛蘭西全國みな同じですよ。それなのに、あなたは民衆を裏切者どもの犠牲に捧げるのですか？」

ナポレオンは手を掉つて群衆に挨拶を送つた後、リュシアンに答へた。

「僕は發狂した議會を一致團結の狀態に歸らして、それによつて我國を救ふ凡人以上の人間か、それとも國內戦に火を放ける輕蔑すべき政黨の領袖か？ いけない、斷然いけない！ 霧月の十八日には、我々は佛蘭西の福祉のために劍を抜いたが、今は劍を速く投げ棄てねばならぬ。僕は佛蘭西のためなら如何なる事でもする覺悟だ。——自分自身のためには僕は何もかも欲しない。」

リュシアンが去つた後、ナポレオンの傍へバンジャマン・コンスタンが近寄つた。これは今皇帝を廢黜せんとしてゐる死産憲法「バンジャミーヌ」の父親である。群衆の叫喚を聞きながら、コ

ンスタンは慄然とした。もしもナポレオンが已れを救ふために第二の革命を惹き起したらどうだろう？、それとそ第一のものよりもつと悪いのではあるまいか？

皇帝は群集を見やりながら、長いこと沈黙してゐた。

「君、あの人達が見えるかね？」と彼は遂に口を切つた。「僕は彼等に名譽と富を撒きちらしてやつた譯ではない。僕は彼等を乞食のやうな有様で見出したが、また乞食のやうな姿のまま見棄てて行くのだ。しかし彼等には正確な直覺がある、即ち民衆の聲だ。もし僕がその氣になれば、一時間後には謀反を企てた議會など存在しなくなるのだが。……しかし人間の命はそのやうな代償に償しない。僕はジャケリヤの王様にはなりたくない。僕がエルバから歸つて來たのは、巴里を血の海にするためではないからな。……」

これは何を意味するのか？ ほかでもない、第一の政治革命は終了したが、今や第二の社會革命が始まらうとしてゐる、或は始まる可能性がある、と云ふことなのである。第一の革命はブルジョアジイの仕業であつたが、第二のものは當時の言葉で云へば「賤民」*la canaille* 今の言葉に依れば「プロレタリアート」がこれをなすのである。「賤民のみでは何一つ仕出來すことは出來ない、が僕とならどんな事でも出來る。」とナポレオンはよく云つたものである。

群集の叫喚してゐる往來を距てたシャンゼリゼー宮殿の壕は、この二つの革命、二つの世紀、二つの時代の境界線であつた。彼はこの線を越えるであらうか、それとも會て戦争に就いて云つたやうに

「革命があれば忌はしいものに思はれたことは覚えてない」と云ふであらうか？

ことに依つたら、彼は二十五年前の、一七九二年八月十日のことをこの瞬間想ひ起したのかも知れない。カルセル廣場へ行く途中、彼は「忌はしい風體をした一團の人々に出會つた」が、彼等は槍の穂先に人間の首を突き刺して、「民衆萬歳！」と叫んでゐるのであつた。恐らく彼は、今の「賤民」の方がその時の群衆よりも更に恐るべきものであることを悟つたのかも知れない。若い革命の牝狼の方が、仔狼である彼に噛み殺された古い牝狼より一層恐ろしいので、これにうつかり手を出さうものなら、どちらがどちらを噛み殺すか分つたものではない。

翌二十二日、リュシアンは開議で兄に向つて、もう一度霧月十八日を繰返し、議會を銃劍で解散させるやうに勧めた。

「いや、リュシアン、」と皇帝は抗言した。「成程、霧月十八日にはたゞ國民の救ひのみが我々の権利であつたのに對して、今は一切の権利が我々の側にあるのに違ひないけれども、我々はそれを利用すべきではないのだ。……」

それから暫く口を噤んでから、また續けた。

「リュシアン公、書いてくれ給へ……」

不意に彼はくるりとフーシェの方へ振り向いたが、その顔には何とも云へぬ冷笑が浮んでゐたので、相手は矢の刺さつた蛇のやうに思はず全身をくねくねさせた。

「君も序でにあの紳士方が安心するやうに一筆書いてくれ給へ。彼等の望むものを授けてやるか
ら」

リュシアンは卓に向つてペンを取上げた。けれども兄の口投する言葉を二言三言聞くが早いか、
ペンを紙の上で押し潰して跳り上り、椅子を突きつけて、扉口の方へ歩き出した。

「待つてくれ給へ」と云つた皇帝の聲には、抗ふことの出来ない命令の調子が籠つてゐたので、
リュシアンは我にもなくその意に従つて引返し、再び卓に向つて腰を下した。深い沈黙が襲つた。
たゞ宮殿の庭を隔てた遙かな往來から「皇帝萬歳！」と云ふ群衆の叫びが聞えるばかりであつた。

「佛蘭西の獨立を確保するため戦を始むるに際し」とナポレオンは口投した。「余は一切の國民
的權力が余と協同して、努力と意志を一にせんことを期待せり。然れども余の見るところを以てす
れば事情は一變せり。仍つて余は祖國の敵に己れを犠牲に供せん」とす。——たゞ希くば彼等の誓言
するところ眞摯にして、その憎惡はたゞ余一人に向けられたるものならんことを。一同力を合せて
佛蘭西を救ひ、あくまで自由の國民として有終の美を全うせられよ！」

彼は息子のことを忘れてゐた。人から注意されて、彼はかう附け加へた。「余の嫡子をナポレオ
ン二世の名のもとに佛蘭西皇帝と宣す。議會は須く法に従つて攝政を定むべし」

巴里全市は火上の釜の如く沸騰してゐた。労働者の群は革命歌を高唱しながら、街々を練り歩い
た。皇帝退位の報に火に油を注いだやうなものであつた。「武器につけ！ 武器につけ！」の叫び

は次第々々に凄み帯びて來た。

群衆の中には偉大なる軍隊の將校達もゐた。

「隊を組んで議會へ押しかけるぞ。」と彼等は威嚇した。「我々の皇帝を要求しよう。もし引渡さ
なかつたら、巴里の四方から火を放つてやるのだ！」

「民衆がナポレオンに對してこれ程の愛情を示したことは會てないことである。」とこの光景を目
撃した人が云つてゐる。

皇帝退位のために防衛軍は首腦を失ひ、その結果として外國軍の侵入を招來することは、國民も
正確に豫感してゐたので、一七九三年の時のやうに佛蘭西を救はうと思つたのである。「賤民もナ
ポレオンと一緒にならどんな事でも出来る。」それはフリーシェも知つてゐた。彼はすっかり憎え上
つて、ナポレオンを巴里から遠ざけることに決心した。

六月二十四日、議會は「前皇帝に首都を立去るやう請願する」旨を決定した。彼は巴里から三時
間ばかりの距離にあるマルメーゾンの城へ赴くことに同意した。二十五日、宮殿を包圍してゐる群
衆の目を偷んで、逃げるやうにそつと出發した。

佛蘭西に止まつてゐることは出来なかつた。彼の念頭に浮んだ最初の想念は英吉利に避難所を求
めると云ふことであつた。自分の最も凶惡な敵の名譽心に身を委ねる、——そこに彼は己れの偉大
なる運命に相應はしい莊嚴さを見たのである。彼にこの想念を放擲させ、アメリカへ走るやうに説

き伏せるまでには、側近の人々は少なからぬ努力を拂はなければならなかつた。

ロシユフオール港には出帆の準備の出来た二艘のフレガット戦艦「ザアル」と「メドゥッサ」が碇泊してゐることを知つて、彼は自分の航海のためにそれを貸してほしいと頼んだ。しかしフリーシエは皇帝の首を種に同盟諸國と取引をやらうと企らんでゐたので、彼を佛蘭西から出すことを急がうとしなかつた。マルメーゾンにはベツケル將軍が派遣されてゐた。その任務は表向き皇帝の守護であつたけれども、實は監視なのであつた。

空しく戦艦を待ちながら、皇帝はマルメーゾンで殆ど生れて初めての無爲の生活を送つた。曾て青春の日を過したことの棄てられた城の中で、追憶の甘美な偽りが澎湃と彼の心を浸した。彼は旭日昇天の統領官時代、帝制時代の正午、黄昏、落日を回想した。そして亡きジョセフ・Iヌのことも思ひ起した。

一八一四年三月二十九日、巴里降伏の前に、彼女は露西亞コサツク兵を遁れるために、ダイヤモンドや眞珠類を綿入れのスカートに縫ひ込んで、足に任せて逃げて行つた。が、それからやゝ大膽になつて、マルメーゾンへ引返し、こゝでブルボン家一族や同盟國の代表者達のお情けを待ち受けてゐた。ナポレオンのことはとんと忘れてしまつたらしい様子であつた。露西亞人、埃太利人、英吉利人、プロシヤ人、——すべて佛蘭西の征服者達は、マルメーゾンでは望ましいお客様であつた。中でもアクレサンドル帝は格別であつた。彼女は露帝が自分に氣があるものと想像して、しき

りに嬌態を演じ、白い紗の衣裳を着飾つて、十七八の娘のやうに若造りをしながら、もう片足棺の中へ突込んでゐることに氣がつかたのであつた。

五月の二十二日、彼女は軽い感冒に犯された。鼻風邪で、その上やゝ頭痛氣味であつた。彼女は夫として氣にもせず、舞踏會でアレクサンドルやプロシヤ王と一緒に踊つたが、逆上せてかつかつて来たので、軽い夜會服のまき夜の庭の濕氣の中へ出て、更に風邪を引き添へ、化膿性の扁桃腺炎に罹つた。二十八日に知死期の苦しみが始まつて、二十九日の正午、遂に意識を恢復しないまゝで死んでしまつた。

彼女がこの世に残して行つたものとしては、香水、臙脂、ボマード、手袋、コルセット、レース、帽子、衣裳などの借金三百萬法のほか、何一つなかつた。死ぬる一寸前、と云つてもまだ完全な健康状態で、一見快活さうな様子さへしてゐた頃、あるとき彼女としては不思議なほど深みのある言葉を吐いた。「わたしはどうかすると自分が死んでしまつたやうな氣がすることがあります。そして自分はどうもないんだと云ふ漠然とした感じだけが残るんです。」もしかしたら初めから存在してゐなかつたのかも知れない。丁度アダムの第一の妻リトのやうに、魂の代りに蒸氣が入つてゐたのであらう。

ナポレオンに彼女の死を知らせようとは誰も考へなかつた。彼はエルバ島へ行つてから、偶然目に入つた古新聞によつてそれを知つたのである。「彼はいたく心を打たれた様子で、自分の居間に

閉ぢ籠つてしまつた。^(一三)

巴里へ歸るとすぐ、彼はジョセフィーヌの臨終に居合せた醫師のゴローを呼び寄せて、いろいろと根掘り葉掘り訊ね始めた。

「あれは何で死んだのか？」

「御心配のためでございます。」

「何の心配か？」

「一切の出来事と、それから陛下のお身の上を思つての御心配で。」

「優しい女だ！ 優しいジョセフィーヌ！ あれは本當に僕を愛してくれた！^(一四)」

何人にもまして眞實をまともに見つめることの出来た彼は、それと同様に己れを欺くことも出来たのである。

かうして今も、半ば透明な夏の夜がマルメーゾンの並木道の古い楡や、榊や星空の下に静まり返つてゐる星影に充ちた池や、その上に眠る白鳥の幻めいた蒼白い姿や、死に行く薔薇の魂があえかに薫つてゐる花壇などを包むとき、彼は追憶の甘美な偽りの中に沈んで行くのであつた。

「可哀さうなジョセフィーヌ！」と彼は庭を彷徨ひながら獨り言つた。「こゝで彼女なしに暮すことは、僕はどうしても馴れることが出来ない。僕はどうも彼女が並木道からひよつこり姿を現して、彼女の大好きなこの薔薇を輪折りに取つてくれさうな氣がしてならぬ。……あれは僕の知つて

ゐたすべての女の中でも一番美しい女だつた！^(一五)

その時、臨時政府の首席であつたフーシェは、背椎骨を持たぬぬらりくらりした蛇のやうに、同盟諸國とブルボン家と、ボナパルトと、革命的氣分に漲つた巴里との間を這ひ廻つてゐた。彼は、ナポレオンの亞米利加行き意志をウェリントンに傳へ、表面彼のために通行許可を求めるやうに見せかけながら、内實彼を佛蘭西から出さないために、巡洋艦による海岸封鎖を強化する可能を英國側に與へてゐたのである。

皇帝は二隻の戦艦に關する請求を三日間に三度繰り返した。やがて漸く返事が來た。戦艦は準備を整へておくけれども、通行許可を受領するまでは出港しないだらう、とのことであつた。

ナポレオンはこれが陥穽であることを悟つた。「余は即時出港し得るとの確認を握るまではロシエフオールへ向はぬであらう。」^(一六)と彼はフーシェに答へた。二つの牢獄の中、彼はマルメーゾンの方を選んだ。こゝは何と云つても最後の避難所である軍隊に近かつた。

ウェリントンは、勿論、通行證の下附を拒んだ。同盟側の代表は佛蘭西の全權委員に向つて、「歐羅巴および佛蘭西の平安を破る可能を永久にナポレオン・ボナパルトより奪ふ目的をもつて、同盟各國は彼をわが方の保護下に引渡すことを要求する」旨を言明した。^(一七)

同盟側の外交官の中で最も穩健な分子は、皇帝を大陸の要塞に終身幽閉に處するか、或は非常に遠隔な島へ流刑にするか、といふやうな考へをもつてゐた。リヴァプール卿は、「ボナパルトを佛

蘭西國王に引渡し、謀叛人として彼を處刑せしめる」やう提議した。ブリュッヘルは自分こそ「神意を行ふ武器」であるとして、「人類に功績を齎らすために」、彼をプロシヤ軍の面前で銃殺するか、それとも絞刑に處すべきであると云つた。^(一八)ところがフーシェは、時に英吉利、時に埃太利との休戦の手形とするために、皇帝の首を種の取引を續けてゐた。そして同時に彼をマルメーゾンの陥穽から誘き出して、より安全なロシユフォールの良にかけようと企んでゐるのであつた。

六月二十八日、マルメーゾンへ國民近衛隊の第三軍團長が駆けつけて、プロシヤ軍がこの城に近寄つてゐると云ふ報を齎した。同時にベツケル將軍は陸軍大臣グラーから、敵のマルメーゾン城へ接近する進路を遮断するために、セーヌ河の橋を燒棄すべしと云ふ至急命令を受取つた。と云ふのは、ブリュッヘルが皇帝を捕虜にしようといふ目的で、既に分遣隊を指向する手筈をしてゐたからである。

城内は騒然として來た。

「もし私の見たところで、皇帝がどうしてもプロシヤ軍の捕虜とならざるを得ないやうでしたら、私は皇帝を銃殺します！」と彼の側近者の一人であるグルゴール將軍は云ひ放つた。^(一九)

それより更に大きな驚愕に襲はれたのはフーシェとグラーである。ブリュッヘルは既に巴里へ近づいてゐたが、巴里では八萬の軍が軒昂たる意氣をもつて戦闘を待構へてゐたので、將官達もプロシヤ軍が一敗地に塗れるものと信じて疑はなかつた程である。もしナポレオンが軍の頭梁にならう

といふ氣を起したらどうだらう。いや、それよりもつと悪い事に、軍自身が彼を迎へにマルメーゾンへ押しかけて行つたら？ フーシェはそれを何よりも惧れたので、遂にナポレオンを佛蘭西から放してやらうと肚を決めた。

二十九日の早朝ベツケル將軍は、英吉利が通過證を出すのを待たないで、ロシユフォール碇泊中のフレガット戦艦二隻を貸與すると云ふ臨時政府の決定を皇帝に傳へた。

プロシヤの騎兵はマルメーゾンに近寄つて來たので、出發を急ぐ必要があつた。皇帝は即日出發することに同意した。

彼が郵便局長のラブレットと敵軍の行動に關して談話を交へてゐる時、苑の彼方に當る街道から聲高な叫びが聞えて來た。「あれは何か？」とナポレオンは訊ねた。そして、あれは佛蘭西の戦列聯隊がサン・ジェルマンの高地を占領するために城の傍を通り過ぎながら、皇帝に敬意を表してゐるのだと云ふ答へを聞いた時、彼は感動したらしい様子であつた。やゝ暫く考へた後、佛蘭西軍の配置をピンで示した軍用地圖の上に屈み込んで、そのピンを刺し變へ、頭を上げて口を切つた。

「佛蘭西があればかりのプロシヤ軍に征服されると云ふ法はない。僕はまだ敵軍を抑制して、政府に同盟側と交渉を開始するだけの餘裕を與へることが出来る。」

彼はつか／＼と部屋を出たかと思ふと、やゝあつて引返したが、身には舊近衛師團獵兵聯隊の將軍正装をつけ、拍車つきの長靴を穿き、劍を帯び、三角帽を小腋にかゝえてゐた。たつた今まで他

し、俘囚であつた人が、早くも皇帝に立歸つたのである。

「將軍、」と彼はベツケルに話しかけた。「佛蘭西の状態と、愛國者達の意志と、兵士等の叫びは、僕が軍に歸ることを要求してゐる。僕は君に委任するから、どうか政府にかう傳へてくれ給へ。僕に皇帝としてゝなく、單に一將軍として軍の指揮をすることを許して貰ひたい。僕の名聲はまだ佛蘭西の運命に大きな影響を與へることが出来るだらう、そして敵を撃退するや否や、亞米利加へ去つてしまふと云ふことを、兵士として、市民として、一佛蘭西人としての名譽にかけて誓ふ、と云ふ」

ベツケル將軍は武人としての心を持つてゐた。ナポレオンの言葉は彼に一縷の希望を呼び醒ました。彼は自分の使命が成功するやうにと心底から祈りながら、早速巴里へ駆けつけたのである。

「一體あの男は我々を愚弄してゐるのか？」とフリーシェはベツケルからナポレオンの願ひを聞いた時、狂憤に驅られながらかう叫んだ。「もしあの男の云ふことを諾いてやつたら、奴がどんな具合に自分の約束を實行するか、それを我々が知らないとしても思つてゐるのか？ 追ひ出すのだ、やつを佛蘭西から追ひ出すのだ！」

それは瀕死の獅子に加へられた驢馬の蹄の一撃であつた。

「あの連中は自分でも何をしてゐるか知らないのだ。」とフリーシェの拒絶を聞いた時、皇帝は落着き拂つてかう云つた。「僕は出發するよりほかに何もすることがなくなつた。」

彼は再び部屋を出て、正装を脱ぎ棄て、褐色の燕尾服を身につけ、ジョセフィーヌの臨終の部屋を開けるやうに命じ、その中に閉ぢ籠つて數分間を過した。やがてそこから出て來ると、宮殿警固の將校達に謁見した。

「お見受けしたところ、私達は陛下にお仕へ申上げる幸福を持ってないやうでございます。」とその中の一人が同輩を代表してかう云ひ出したが、最後まで云ひ終ることが出来ないうで泣き出した。皇帝は無言のまま、彼を抱きしめた。

馬車が廻された。ナポレオンはそれに乗つて、ロシュフォールへ出發した。

註

- (一) レールモントフ、書き始められた小説の断片、(一八四一年)。(二) ロエドレル、二五二頁。
(三) ルールニエ、『ナポレオン』、第三卷二三三頁。(四) ウーセイエー、『千八百十五年』第三卷一四頁。(五) 同上、第三卷一六、二二頁。(六) 同上、一六一二二頁。(七) リュシアン・ボナバルト、『百日天下の真相』、五六一六一頁。——ウーセイエー、第一卷三九一四〇頁。(八) 同上、四一頁。(九) グルゴ、第一卷四九九頁。(一〇) ウーセイエー、第一卷六〇一六二頁。(一一) 同上、第三卷七八一七九頁。八七一九九頁。(一二) ラクトール・ゲイエー、三六〇頁。(一三) マッソン、『離婚せられたジョセフィーヌ』、三八八頁。(一四) 同上、四一八頁。(一五) ウーセイエー、第一卷九九九頁。(一六) 同上、二〇五頁。(一七) 同上、二〇六頁。(一八) 同上、二〇九頁。(一九) 同上、二一七頁。(二〇) 同上、二二三頁。(二一) 同上、二三三頁。

二、ベレロフォン號

一八一五年

「ポーボチカ、籠の中へお入り！」と或る愚かな老婆が、庭へ逃げた鸚鵡を呼びながら云つた。けれども鳥は高い樹の枝に止つて、狡さうな眼で老婆を眺めながら、「ポーブカ、馬鹿！」と叫ぶだけであつた。しかし彼は馬鹿ではなかつた。籠の中へは決して入らうとしよかつた。一體どういふ譯でナポレオンが英吉利の捕虜になることを望んだのか、その理由を了解しようと努める時、自然この小啻が想ひ起されるのである。

「小學生だつて儂よりもつと利口だらう、*Unecolier eut été habile que moi*」既に俘はれの身となつてから、彼は自分でもかう云つたものである。⁽¹⁾然り、小學生でさへこの「利口な政治家」よりもつと利口であらう。馬鹿のポーブカでさへこの智者より賢いだらう。しかし人間の節度は知性よりも大きい。そこが問題なのである。もしナポレオンが發狂しなかつたら、彼は自分の「人間」に完全な節度を與へはしなかつたであらう。

「余は己れを犠牲に供する。」彼がこの言葉を發したとき、恐らく自分でも何を云つてゐるのか、まだ知らなかつたであらう。やがてそれと知つた時、彼は思はず慄然としたが、もう遅かつた。言

葉はすでに發せられ、事はすでになされたのである。「余は常に己れの口にすることを識つてゐる。さもなければ余は死に瀕するものと云はねばならぬ。」

「犠牲」、これこそ彼のこの世ならぬ運命、——星、彼から遊離して彼に抗した魂が、彼を誘ひ、彼を描へた良なのである。欲すると欲せざるとに拘らず、彼はこの賢なる運命の呼ぶ方へと進んで行かなければならなかつた。

犠牲は二つの誘惑の中の一つであつた。——もう一つの誘惑は名譽である。「軍人としての名譽の觀念は生來ナポレオンに於て最高度の發達をしてゐた。……この狡智に長けた政治家は、同時に一武人であり、一點非難すべきところのない騎士であつた。」と優れた彼の傳記者の一人が云つてゐる。⁽²⁾

ナポレオンは誰にもまして人間をよく知つてゐた。彼は人間を肚の底まで見抜いてゐて、人間といふものを餘りよく思つてゐなかつた。「人間が儂の考へてゐる通りのものだつたら、彼等は極めて陋劣な手合でなければならぬ。」とよく云ひ云ひしたものである。⁽³⁾一見したところ、かういふ人間を欺くことは容易な業でなさうに思はれる。ところが容易なのである。何故たれば、眞の騎士の常として、彼は生來子供らしい信じ易い心と、子供らしい單純さの持主だつたからである。かう云ふと奇妙に聞えるかも知れないが、ナポレオンの中には、かの永遠のロマンチストであつて、ドウルシネヤといふ空想を戀ひ慕ふドン・キホーテが棲んでゐたのである。彼自身がその氣にならな

ければ、人は彼を欺くことは出来なかつたであらう。しかし彼は餘りにも屢々欺かれることを欲したのである。それは正しく、彼が餘りにもよく人間の中に苦い眞實を見てゐたからかも知れない。

英吉利の手に身を任さう、敵の名譽心に信頼しようと言ふ騎士的に馬鹿げた想念は、久しい以前から常に彼を誘惑してゐた。それが實現されるだらうといふことを、彼は常に知つてゐた、——記憶してゐた。

十七歳の少年ナポレオンは、自分の學生手帳に塊太利の冒險家ナイホック男爵の物語を書いてゐる。これは一七三七年、コルシカ王テオドル一世と名乗つて英吉利に捕へられ、ロンドン塔へ閉ぢ籠められたが、長い年月を経て漸くワルボル卿に釋放された人である。「正義なき人々。余はわが國民に幸福を與へんと欲し、一瞬の間その成功を見た。けれども運命は余に裏切つて、余は今や獄裡の人となつた。従つて卿は余を輕侮せらるゝことであらう。」とテオドルはワルボルに書き送つた。すると相手はそれに答へて、「君は苦しんでゐる、君は不幸である、それだけでも英吉利人の同情に對する權利を有つに充分である。」^(四)

「英吉利人諸君よ、余は諸君に關する己れのロマンチックな騎士的見解のために、高價な代價を支拂つた！」とナポレオンは、恰もこの未完の少年物語を完成するかのやうに、セント・ヘレナでかう云つてゐる。^(五)

同じ學生手帳に四つの言葉が書かれてゐる。「セント・ヘレナ、——小さい島、See Helene.

Petite île……」それから先は唾の如き空白の點。今やそれをも書き埋めようとしてゐるのだ。

マルメーゾンからロシニフォールへの途々、群集は絶えず例の「皇帝萬歲！」を叫び續けながら、彼の後から走つて來た、丁度エルバから歸つて來たあの時のやうに。しかし今は彼が佛蘭西を見棄てようとしてゐることを知つてゐたので、泣いて哀願するのであつた。「残つて下さい。私達と一緒に残つて下さい。私達を見棄てないで下さい！」^(六)

ニオールの町では第二輕騎兵聯隊が殆ど叛亂を起さなければかりであつた。彼に指揮を採つて巴里へ進撃して貰ひたいと要求したのである。

もし彼がその氣になつたら、エルバの奇蹟がもう一度繰返されたかも知れない。しかし彼は最早なにごとをも欲しなかつた。彼に代つて彼の魂が別な、もつと大きい奇蹟を望んだのである。

七月三日、彼はロシニフォールへ到着した。そこでは、王黨派の廻し者の報告によると、「神の如くに歡び迎へられた」とのことである。^(七)「サアル」「メドゥッサ」兩戰艦は出帆の準備を調べて碇泊してゐたが、港外へ出ることは出来なかつた。と云ふのは、英吉利の巡洋艦「ベレロフォン」が碇泊所を封鎖してゐたからである。

陸海合併の軍事會議が開かれて、逃亡の計畫が討議された。ジロンド河の河口にはボーダン大尉の指揮下に屬する二隻の佛蘭西海防艦が投錨してゐた。

「ボーダンは私もよく知つてゐますが、」とマルタン中將がナポレオンに云つた。「あれこそ陛下

を無事安穩にアメリカへお送りすることの出来る唯一の人間でございます。」

ナポレオンはこの案に同意した。もし即座に實行してゐたら、彼も救はれてゐたのである。けれども、二日三日と荏苒日を過した。この案が彼の氣に入らないのだと思つて、人々は第二案を提議した。「マクグレーナ」といふ五十噸しかない小さな丁抹船が、ブランディの積込みを終了したら、皇帝を四人の侍従と共に乗船させることを承諾した。搜索があつた場合には彼を空樽の中に隠さうと云ふのである。

ナポレオンはこの案にも同意して、ブランディをすつかり買ひ取つてもよいとさへ命じた。もし英吉利が、二十年も戦ひを交へた後に、彼を空樽の中に発見したら、歴史が一體何と云ふか、その點を彼は考へても見なかつたかのやうである。

恐らく彼は一切に同意したことであらう。何故ならたゞ一つの事を除いて、彼は何ごとをも望まなかつたのである。この一事は、先へ行くに従つていよいよ強く彼を誘惑するやうになつた。それは丁度、深淵を覗き込んだ人が、その中へ飛び込みたい欲望を感じるのと同じやうであつた。

ナポレオンは猶豫してゐたが、フーシェは苛々してゐた。七月四日、巴里降伏の後に、彼は皇帝が軍の指揮を執りはしないかと、今までになく恐慌を感じた。「暴力を用ゐても差支へなし、即座に彼を戦艦に塔乗せしめるやう御手配あれ。」と彼はベツケル將軍に書いてやつた。「塔乗せしめる」のであつて「去らしめる」のではない。フーシェは彼を人質として、——外交上の「生きた貨物」として、艦内に抑留しておく積りだつたのである。

七月八日、ベツケルは皇帝の前に伺候して、何とか決意するやうに懇願した。ロシュフォールに於ける彼の位置が危険になつて来たからである。

「しかし將軍、どんな事があらうとも、儂を裏切るだけの氣力はまさか君にないだらうな？」とナポレオンは微笑を含みながら彼に問ひかけた。

「わたくしが陛下に身命を捧げてゐることは、陛下も御承知のはずでございます。けれども政府の態度に變化が生じた場合には、わたくしも最早陛下のために何一つして差上げることが出来ませぬ。」

「宜しい、デクス島行き(八)の解を準備してくれ給へ。あそこへ行けば儂は戦艦の傍にゐる譯だから、順風のあり次第乗船するよ。」

海員達は、もし岸の方から非常に強い風が吹いたら、二隻のフレガット戦艦は港外へ出る可能性があるかも知れないが、それも大きな危険を伴ふことは免れない、と一縷の希望を與へた。その日早速、ナポレオンはフランスといふ漁港へ赴き、そこから解に乗つた。船頭達が橈を高く宙に上げた時、岸うつ波の響は「皇帝萬歳！」といふ死物狂ひの叫びに消されてしまつた。「我々は女の子のやうに泣いた。」と群集の一人が後に追憶を述べてゐる。

皇帝は初め決心したやうにデクス島へ向はないで、戦艦「ザアル」の方へ進むやうに命じた。こ

の艦上に彼は二日間滞在した。「ベレロフォン號」は戦艦から手に取るごとく見えてゐた。誘惑は更に度を増して来た。彼は二日間これと戦つたが、三日目にロギゴ侯とラス・ガズ伯爵を全權として送つた。表面は、通行許可受領の望みがあるか、もしなければ「ベレロフォン」は彼の通過を妨害するだらうか、その點を訊かせるためであつたが、その實は、英吉利政府が彼に關してどんな意向を有してゐるか、また彼が巡洋艦へ乗込んで行つたらどんな待遇が與へられるだらうか、その邊のところを探り出させようと云ふ目的であつた。

「ベレロフォン」の艦長メイトランドは使者と接見したけれど、彼等の質問に對しては曖昧な返事をした。通行許可のことについては何にも知らぬ、政府の意向についても同様である。しかし、もし戦艦が外海へ出れば自分はそれに對しては攻撃を向けるだらうし、佛蘭西および中立國の船舶一切に對して捜索を行ひ、もしその中にナポレオンを發見すればこれを逮捕して、上官ホツテム將軍の決定を待つだらうと答へた。

ラス・ガズとロギゴは、皇帝は政治から一切手を引いて、靜かに餘生を送るために亞米利加へ渡るのだと、言葉を盡してメイトランドに説いた。

「もしさう云ふことなら、どうして彼は英吉利に隠れ家を覚めないのか？」とメイトランドは訊ねた。

二人の佛蘭西人はたゞそればかり待つてゐただけれど、色にも現さなかつた。「隠れ家」なる

言葉が果して何を意味するのか突留めようと思つて、二人はわざと呆れたやうな顔をしながら抗辯した。——英吉利の濕氣の多い寒い氣候は皇帝に不適當である、それに餘り佛蘭西に近いから、故國に歸る意志があるものと疑はれる惧れがある。第一、彼は英吉利人を不倶戴天の仇と見做す癖がついてゐるし、英吉利人の方でも彼を人間らしい感情を少しも持たない「怪物」扱ひにしてゐるから、——と云つた。そこでメイトランドも單なる儀禮だけからでも、ナポレオンに關する英吉利の意見はそれ程ひどくはないから、彼としては何も英吉利を恐れることは要らない、と答へざるを得なかつた。會話はそれで打切りとなつた。

使者は皇帝のもとへ歸つて、メイトランドはお愛想を云つてはゐるけれども、決して好ましい結果は期待出来ないと報告した。ナポレオンが英吉利の手に落ちずには濟まないと云ふ噂は、兩戦艦の乗組員を憤激させた。「メドゥッサ」の艦長ボネーが新しい案を提出した。

「今夜『メドゥッサ』は『ザアル』の先頭に立つて行つて、闇の中で不意に『ベレロフォン』にぶつ突かるのです。かうして私は彼と舷々相摩の戦鬪を開始して、『ベレロフォン』をして一步も動かさないやうにします。……約二時間は大丈夫支へることが出来ます。その戦鬪後、私の艦は相當ひどい有様になるでせうが、その代り『ザアル』は海岸の方から吹く夜の微風に乘じて外海へ出る事が出来ます。」

彼は曾に自分の艦ばかりでなく、恐らく乗組員全部も自分自身も、滅亡は必至であると云ふこと

をよく承知してゐた。皇帝は衷心から感動した。

ボネーの計畫を實行するには、兩戰艦司令官の許可を得なければならなかつた。司令官は初め許可を與へたが、後でそれを取消した。フーシェが怖くなつたのである。

皇帝は最早この兩戰艦から期待することは何もなくなつた。で、彼はデクス島へ移ることに決心した。

乗組員一同は絶望の態であつた。彼等は泣いて我とわが顔を拳で打つたり、帽子を甲板へ叩きつけたり、氣狂ひのやうに足で踏み躪つたりした。

「私は皇帝を救つて、この一命を捨てようと思つたのだ。」とボネーは云つた。「あの方は英吉利人を御存じないのだ。不仕合せな方、あの方の身は破滅だ。」

デクス島では第十四陸戰隊の士官六人、まだ少年のやうな士官六人が、さらに一つの案を提出した。ほかでもない、ロシユフォール港に繋留してある二艘の艇、——二本マストの平底舟に、皇帝と二三人の侍従を乗せ、夜の闇に紛れて河岸づたひにラ・ロシエの方へ向ひ、そこから外海へ出る。そして手當り次第の商船を買取るなり拿捕するなりして、逃亡者の一行を亞米利加へ届けようと云ふのであつた。

ナポレオンは少年達を落膽させなくなつたので、彼等に同意した、或は同意したやうな振りをしたのかも知れない。しかし肚の中ではもうすつかり決心が出来てゐた。

餘りに犠牲の數が周圍に積るのを見て、彼も遂に「犠牲」の何たるやを諒解し始めたのである。ことに依つたらかのレルモンツフの賭博者のやうに、依然として自分の高利貸である宿命に向つて、「俺は魂を骨牌に賭けはしないぞ」と云ひながら、既に賭けてしまつたのかも知れない。

十三日の晩、皇帝はその宿舍となつたデクスの小家の貧しい一室で、愚鈍ではないが粗野な人物であるグルゴ一將軍を相手に、六人の少年の計畫を話題に上した。

「そんな計畫なんか世間の物笑ひですよ！」とグルゴ一は云つた。「陛下が英吉利の手に身を渡さうと云ふ御氣力に缺けてゐられるのは残念です。それが陛下にとつて最上の方法なのですがなあ。冒險家の役割などは陛下の御威厳にかゝはりませう。……後日歴史は、陛下が退位されたのはたゞ恐怖が原因であつた、何故なれば、最後まで、己れを犠牲にされなかつたからだ、と云ふことでせう。……」

下司が英雄を教へたのである。こちらは黙つてゐた。答へることがなかつたからである。

「さう、身を渡すのが一番利口かも知れないな。」と遂に皇帝は開け放した窓を眺めながら口を切つた。窓外には『ベレロフォン』のマストが蜘蛛の巢のやうな索具を眞赤な夕焼空に黒々と浮き出させてゐた。「僕はつい昨日も『ベレロフォン』へ行かうと思つたのだが、到頭行きそびれた。……敵の間で暮すといふこと、——こいつを考へると僕はやり切れないのだ。……」

突然、窓から一羽の鳥が舞ひ込んで、部屋の片隅でぱた／＼身掻き始めた。グルゴ一は起ち

上つてそれを捕へ、手の中に握りしめた。

「放してやり給へ、放してやり給へ！ 不仕合せなものももう澤山だ！」とナポレオンは叫んだ。グルゴーは鳥を意外に放した。

「さあ、あれが何處へ飛んで行くか見て見よう。これが前兆になるのだ。」と皇帝は云つた。

「陛下、『ベレロフォン』號の方へ飛んで行きます。」とグルゴーは得々として叫んだ。

ナポレオンは何とも答へなかつたが、その顔は曇つた。又もや、「ボーボチカ、籠の中へお入り！」といふ呼聲を聞いたのである。

その夜、彼は二艘の舢舨と丁抹船へ荷物を積込むやうに命じた。二つの案を折衷しようと思つたのである。

十一時に、ベツケル將軍は用意萬端とよつた由を皇帝に報告した。彼は何とも答へなかつた。ベツケルは退出して、可なり長いこと待つてゐたが、到頭ベルトラン將軍にもう一度取次いでくれと頼んだ。けれども、ベルトランが居間へ入つて取次ぎを始めるや否や、ナポレオンはそれを押し止めた。

「いや、今日は行かない。もう一晚こゝに泊るよ。」

それからもう四五分たつて、ラス・ガズとラールマン將軍に、明日は夜の引明けに『ベレロフォン』號へ出掛けるからと云はせた。

しかしその翌日も出掛けないで、また一日延期した。そして再びラス・ガズを『ベレロフォン』へ差し向けた。英吉利政府が何の言質も與へないことを承知しながら、少くともメイトランドの口から、俘虜軍人としては捕縛しないと云ふ言葉を聞きたかつたのである。

「私は如何なる横断も有してゐないから、約束は一切することが出来ない。」とメイトランドは答へた。「しかし私の考へるには、最高権よりも強力な英吉利の輿論は、各大臣をして英國民に獨特の寛大な感情をもつて行動せしめるであらう。」

廉潔の言葉にこれを翻譯すると、「ナポレオンは英吉利に隠れ家を見出すであらう。もし彼が哀願して英吉利の懐に入るならば、英吉利はこれを裏切らないだらう。」と云ふことになる。

この答へをもつて、ラス・ガズは皇帝のもとへ歸つて來た。ナポレオンは最後に側近の人々を集めて會議を開いた。意見は二つに分れて、あるものは『ベレロフォン』へ赴くべしと云ひ、あるものは行くべからずと主張した。モントロン將軍は最初の案に立返つて、『バヤデルカ』の待つてゐるジロンド河口へ赴くやうにと提議した。ラールマンは丁抹船に乗つて遁れるか、——又しても空樽なのである！——それともルアールに退却した軍隊に去るか、二つに一つを皇帝に力説した。後の方に従へば、第十四陸戰隊、ロシユフォール及びラ・ロシエールに駐屯してゐる戰列聯隊、武裝團、ボルドーの守備隊、ニオールの第二輕騎兵聯隊、その他沿道にある幾多の部隊に望みを囑ふことが出来るのみならず、いよ／＼軍に到着すれば皇帝は歡呼の聲をもつて迎へられるに相違な

「兵士等はみな陛下のために闘ひかつ死することを渴望してゐます。」とラールマンは語を結んだ。

「いや、」とナポレオンは首を掉つて答へた。「もし問題が帝國興廢に關することであつたら、僕も第二のエルバを試みたかも知れない。しかし自分一個のためには一發たりとも砲彈發射の原因になることを欲しない。明日の朝は出掛けて行くのだ。」

グルゴと差向ひになつた時、彼は英吉利の攝政殿下に宛てた書翰の草稿を示した。

「殿下よ、我が國を分裂せしめつゝある各政黨ならびに歐羅巴強國の憎惡に追はれて、余は己れの政治的活動を終結して、かのテミストクレスの如く、大ブリテン國民の爐邊に席を求むべく殿下のもとへ赴かんとするものに御座候。余は貴國の法律の保護に身を委ぬるに當り、余の敵の中にあつて最も強力、寛大、かつ恒久不變なる殿下に右の保護を懇願仕り候。」

彼はグルゴを英吉利に派遣して、この書翰を直き直き攝政殿下に手渡しさせようと考へたのである。そして早速その場で英吉利に於ける生活を空想しはじめた。それはロンドンから十哩ないし十二哩離れたところにある閑靜な田舎家で、「ミューロン大佐といふ假名のもとに」親友達と共に餘生を送らうと云ふのである。ミューロンはかのアルコラ橋上で己れの身をもつて彼を護り、遂に彼の顔に血しぶきを濟せながら彼の胸の上で死んだ勇士なのである。「余は己れを犠牲に供する、」

ミューロンは單にこれを云つたのみならず實行したのであつた。今、丁度この時ナポレオンの魂は人間ナポレオンに、忘れてゐた教訓を想ひ起させたのである。

「閑靜な田舎家で、穩かな牧歌情調の中に餘生を送る、——こんなことを英吉利の大臣達や、ウエリントンや、ブリュッヘルや、フーシェや、タレイランが果して信するだらうか、同意するだらうか！「小學生でさへ僕より利口だ。」四十六歳のナポレオンが六歳の小學生になつたのである。七月十五日、日の出と共にナポレオンは佛蘭西の小艦『華』に乗込んだ。

その頭には三角帽子

身には灰色の行軍服……

それは丁度アウステルリッツやワテルロオの時と同じであつた。

水兵達がいつもの「皇帝萬歳！」の叫びで敬意を表したとき、その叫びには獻款が籠つてゐた。

「私がかねて受けてゐる指令に従つて、陛下を巡洋艦までお伴してよろしうございませうか？」とベツケル將軍が訊ねた。

「いや、島へ歸り給へ。」とナポレオンは答へた。「佛蘭西が僕を英吉利へ引渡した、などと云はれるのは厭だからな。」

* 紀元前五世紀のアテナの將軍で政治家、サラミスの海戦でベルジャ艦隊を破つたが、後讒訴されてベルジャ宮廷に仕へた。

小艦、二度と返らぬカロンカロンの小舟——は岸を離れた。今や永久に佛蘭西を、世の中を捨てようとしてゐることを、彼は果して知つてゐただらうか、——記憶してゐただらうか？

七月二十六日、『ベレロフォン』はブリマスに投錨した。三十一日、ケイト卿は「ボナパルト將軍」に英吉利内閣の決定を聲明した。——セント・ヘレナ島に終身流刑に處すといふのであつた。

ナポレオンは憤慨したが、その憤りも長くは續かなかつた。

「僕はセント・ヘレナなどへは行かない。」と彼は側近の人々に云つた。「それは恥づべき結末だ。

……それより寧ろ僕の血で『ベレロフォン』號の甲板を染めた方がましだ！」

「さうですとも、陛下、」と人々は意氣込んで云つた。「いつそ我々一人のこらす殺されるまで防戦しませう、それとも火薬庫を爆發させるか！」(一五)

その日、皇帝はいつもの如く、物見高い見物に乗せて集つて来た夥しい小舟の群を見るために甲板へ上つた。「彼の顔は平生と少しも變らなかつた。」と一目撃者は語つてゐる。もう諦めたのである。「必然に服するの要を知ること余に如くはない。この中に理智の眞の權力ちからと精神の勝利が存するのである。」(一七)

『ベレロフォン』は遠洋航海に赴くためには余りに小さ過ぎた。でボーツモウスでコックバアン將軍の指揮のもとに、大戦艦『ノーサムバアランド』の艦装が行はれてゐた。しかしこの艦はまだ準備が完了してゐなかつた。やうやく八月四日になつて、『ベレロフォン』は『ノーサムバアランド』を迎へにブリマスを出た。

この日ナポレオンは終日船室に閉ぢ詰つてゐた。側近の人々は不安に襲はれた。彼が毒の入つた小さな瓶を肌身につけてゐることを知つてゐたので、もしや毒を仰ぎはせぬかと惧れたのである。その晩、彼の部屋へモントロンが如何にも憎え上つた顔つきをして入つて行つたので、皇帝は忽ち事の真相を悟つた。

「もし僕が自殺したら、さぞ英吉利の奴等が喜んだことだらうな！」と彼は笑ひながら云つた。(一八)

しかしそれでも、自殺といふことは矢張り考へたのである。

「君、僕はどうかすると君達を捨てて行きたくなることがある。しかもそれは大して難かしくない事なのだ。」と彼はラス・ガズに云つた。「たゞ一寸自分の頭を逆上させさへすればいいのだ。……まして僕の信念は殊かもこの行爲と撞着しないんだからな。……永遠の苦みなんてものは信じない。神様がそんなことをなさる筈がない。それは御自分の限りないお恵みと矛盾するからな。殊にこんな事くらゐのために、そんな罰をお當てになる筈がない。第一、これは煎じつめたところどう云ふ事なんだらう？ たゞ一刻も早く神様のみもとへ歸らうといふ願望に過ぎないぢやないか。……」ラス・ガズはかうした場合でも云ふやうに、忍耐、勇氣、事徳の好轉する可能性、などと云ふことを持ち出した。

「或は君のいふ通りかも知れない。」とナポレオンは相手の言葉を注意深く聽いた後かう云つた。

* 希臘神話、冥途の河の渡守。

「さうだ、人間は自分の運命を成就しなければならぬ、それが他ならぬ僕の偉大な鐵則なのだ。だから、よろしい、成就するとしよう！」

「さう云つて彼は落着いた、むしろ樂しげな調子でほかのことを話し出した。」^(一九)
しかしそれにしても『抗議文』を作るか、あるひはラス・ガズの作つた文章に署名するか、その孰れかの必要を認めただのである。

「余は神と人との面前にて、余に對し行はれたる暴行に堂々と抗議をなすものなり。……余は俘虜にあらすして英吉利の賓客なり。……『ベレロフォン』の舷上に上ると同時に、余は大ブリテン國民の爐邊に坐したるに等し。……もし英吉利政府が『ベレロフォン』艦長に余を塔乗せしむべしとの命令を發するに際し陷罪を設けたりとせば、それは政府自身とその旗幟を辱しめたるものなり。……余は敢て歴史に訴へんとす。歴史は後日に至つて、二十年間英吉利國民と戦ひを交へたる敵が、不幸に遭遇して英吉利の法律のもとに隠れ家を求めんと、自由意志をもつてその懐に入りたる旨を語るならん。……然るに英國は何をもつてこれに應じたるか？……偽善の假面を着けて手を差し伸べ、敵を藥籠中のものとするやその生命を斷ちしにあらすや。」^(二〇)

我等は眞實を語らなければならぬ。以上は彼が考へた程には、或は彼が考へようと欲した程には、説伏力をもつてゐないかも知れない。政治に於いて子供らしい單純さは赦されない。彼を載せるのが地球にとつて苦しいと云ふことは、彼自身も知つてゐたのである。

「僕が死んだら、世界中のものが安堵の吐息をつくだらう。やれ／＼！ と云つてな。」^(二一)かういふ賓客を果して英吉利として受け容れることが出来ただらうか？ 以尺報尺、英吉利もナポレオンに對して、彼が西班牙國王を遇したよりも以下の待遇をしたわけではない。プリマスはバイヨンナに對する報復である。英吉利も彼自身の言葉をもつて彼に答へることが出来た筈である。「余の偉大なる政治の車が驍進してゐる時、車の通過が必要である。従つてその轍の下に陥つたものは禍なる哉である！」

彼の身を襲つた出来事は犠牲である、がそれは刑罰でもあつた。——しかも公平を缺くものとは云ひ難い。だから彼は黙つてそれを忍んだ方がよかつたのである。

八月七日、『ノーサムバランド』號は皇帝を收容すると、直ちに帆を上げた。

大空にたゞ星屑の輝きを見る

海原の青き波路を

ひた走る一隻の船

ありとある帆に風を孕みて。

帆柱も揺ますそが上なる

風見もひたと鳴りを潜めつ